

「楽塾」報告書 '09

2009 Class Observation of 'Rakujuku'
(Joyful Cram School)

「楽塾」編集委員会 / 西成プラザ 編

Rakujuku Editorial Committee and Nishinari Plaza, edited,

「楽塾」報告書'09 の刊行にあたって

URPのレポートシリーズの第10号として、本レポートを刊行したが、本タイトルにある「楽塾」と都市研究プラザの関係を若干述べておきたい。

このレポートは、大阪市立大学、平成21年度新産業創生研究「脱貧困をめざした居住支援のソーシャルビジネス化に向けた研究」(研究代表:水内俊雄)や、プラザの都市問題研究の助成などを使用し編集、出版されたものを、URPレポートとしてwebに掲載したものである。助成額の関係上、08年度にスタートした楽塾活動の記録のうち、09年度分が先にレポートシリーズとしても登場することになった。順番は逆になったが、第12号で、08年度の記録が掲載されている。そこでは楽塾の主旨、および大学、とくに都市研究プラザとの関係が冒頭で述べられているので、まず12号を、それから10号をと、この両号をセットにして、この活動全体を鳥瞰、理解していただきたい。

12号の冒頭でも述べられていることであるが、西成区にある楽塾は、都市研究プラザの最大の売りである現場プラザである西成プラザを構成する一大拠点である。この楽塾には数多くの若手研究者が参画し、まさしく現場との往還をスリリングに行える社会実験道場としての役割を果たしてきてくれた。

研究という「学び」を地域や都市生活へ還元するという大学の新たなソーシャル・ベンチャー領域と重なり合える現場拠点として、どのような大学の貢献や新たな出会い、発見、そして包摂型社会の仕組みづくりの生々しい記録を、どうぞご覧いただければ幸いである。

都市研究プラザ 水内俊雄

あそびを学び まなびを遊ぶ 新しい学校の冒険

楽塾 '09 授業参観



あそびを学び
まなびを遊ぶ
新しい学校の冒険



楽塾のあゆみ '09

回数	日時	講師	所属	タイトル	学友	ページ
第1回	4月4日	T氏・M氏 K氏・佐々木 敏明	塾生・塾長	「僕の話聞いてくれ」 「未来世紀ニシナリ」上映会	11	3
第2回	4月11日	藤原 敦子	空手サークル長橋育勇会	空手でメタボ追放2	8	7
第3回	4月18日	黒木 宏一	大阪市立大学都市研究プラザ研究員	暮らしのオモイデバナシ ～こんなイエに住みたいナ～	13	10
第4回	4月25日	水内 俊雄 若松 司	大阪市立大学地理学教授(地理学) 大阪市立大学都市研究プラザ研究員	街道から路地へ 路地から～ふるさとの喪失(中上健二のこと)	17	14
第5回	5月2日	堀川 大介	エル・チャレンジ事務局次長	知的障害者と私たちのあいだに	10	18
第6回	5月9日	川崎 那恵	立命館大学職員	私のたくさんの“父たち 母たち”	13	22
第7回	5月16日	Mr.アマゾン	保険会社社員	男のもて方、女のもて方	13	26
第8回	5月23日	森田 智保 山口 明香	古着屋「りぶら」店長 古着屋「りぶら」スタッフ	かっこいいスタイル2	11	31
第9回	6月6日	野本 哲平	ホテルプラザ神戸シニアディレクター	ホテルマンになってわかったこと	14	35
第10回	6月13日	前山 村雄	僧侶	極楽浄土 ～吉野・熊野から～	15	40
第11回	6月20～21日	南垣内 貞史	大柳生農場主	田植えに行こう!	17	44
第12回	6月27日	石橋 友美 「紙芝居劇むすび」	紙芝居劇むすびの会 事務局 紙芝居劇むすびの会 メンバー	人生は紙芝居!	20	48
第13回	7月4日	藤原 敦子	空手サークル長橋育勇会	空手でメタボ追放3	12	53
第14回	7月11日	久保 晶	あたりきしゃりき堂店主	ドーナツの秘密	12	57
第15回	7月18日	三宅 嘉美 中野 悦代	社会福祉法人大阪府総合福祉協会	人とかかわるお仕事	12	61
第16回	7月25日	稲田 七海	大阪市立大学都市研究プラザ研究員	最果てのひとびと2	14	66
夏 季 休 暇						
課外授業	8月9日	南垣内 貞史	大柳生農場主	「育てる」を楽しもう	5	71
夏 季 休 暇						
第17回	9月5日	平田 節子	主婦	秋の惣菜	7	74
第18回	9月12日	大谷 浩子	フリーライター	怪しい“ことのは”探検1 ～日本語の迷路へようこそ～	12	77
第19回	9月19日	和久 貴子	NPOワークレッシュ代表	A L L O F D A D D I E S ～おとんのこと～	12	81
第20回	9月26日	全 泓奎 (ジョン・ホンギョ)	大阪市立大学地理学准教授	韓国のこころ	14	87
課外授業	9月27日	佐々木 敏明	塾長	仮面をつくらう@A´ワーク創造館	20	
第21回	10月3日	山崎 安敦 本田 真大	近畿大学 経済学部学生 近畿大学 農学部学生	私のポートレート	12	92
第22回	10月10日	柴田 剛	大阪市立大学大学院博士課程	極私的少女マンガのすすめ	10	97
第23回	10月11日	南垣内 貞史	大柳生農場主	大柳生収穫祭	16	101
第24回	10月17日	藤原 敦子	空手サークル長橋育勇会	メタボ追放4	7	105
第25回	11月7日	蓬莱 梨乃	大阪市立大学都市研究プラザ研究員	ちがうから面白い～違いから魅力へ～	18	108
第26回	11月14日	栗塚 旭	俳優	わが青春の歳三	21	113
第27回	11月21日	武田 緑	CORE+ 代表	学校って何だ?	13	118
第28回	11月28日	織田 隆之	ヘレンケラー財団伯太学園副施設長 (元今池平和寮 主任)	支援と被支援とは?Part 1 「施設の光と闇」	13	123

第29回	12月5日	若松 司 前山 村雄	大阪市立大学都市研究プラザ研究員 僧侶	中上建次『熊野集』 極楽浄土 ～吉野から熊野へpart 2～	14	127
課外授業	12月6日	佐々木 敏明	塾長	仮面をつくろう@長橋公園	20	
第30回	12月12日	M r . アマゾン	不動産会社社員	貧乏と希望のあいだ ～私はいまどこに?～	13	132
第31回	12月19日	山口 明香	アーティスト	思い出を絵にしよう	9	137
第32回	12月26日		塾生・教官・楽塾応援団	謝恩会 ～さようなら2009年～	38	141
第33回	1月9日	本田 哲郎	ふるさとの家 神父	支援と被支援とは?Part 2 キリスト者としての支援	15	147
第34回	1月16日	坂口 邦明	社会福祉法人みおつくし福祉会 自立支援センターおおよど 職員	支援と被支援とは?Part 3 自立支援センターにおける応援活動	9	152
第35回	1月23日	前山 村雄 佐々木 敏明	僧侶 塾長	吉野から熊野へPart 3	7	156
第36回	1月30日	北場 好信 益子 千枝	よりそいネットおおさかスタッフ	支援と被支援とは?Part 4 「よりそいネット」からのメッセージ	14	162
第37回	2月6～7日		塾生・教官・楽塾応援団 (ツアーコーディネーター:水内 俊雄、佐々木 敏明)	楽塾修了記念旅行 ～新宮市「お燈まつり」大辺路巡り～	22	169
第38回	2月13日	藤木 美奈子	N P O 法人 W A N A 関西代表	支援と被支援とは?Part 5 どんな人生もいいものだ ～なぜ私はマイノリティーの就労支援をするのか～	17	177
第39回	2月20日	小川 裕子・青山 美香 上地 徹	木曜夜まわりの会スタッフ	支援と被支援とは?Part 6 人を人として ～数々の出会いから気づいたこと～	9	181
第40回	2月27日		塾生・教官・楽塾応援団	修了式	13	187

第1回目の授業が終了しました。

09年度のスタートです

楽塾塾生諸君、楽塾応援団のみなさま。

1ヶ月間のご無沙汰をお詫びいたします。そして08年度のご支援をありがとうございました。いよいよ春たけなわの季節となり、2年目の楽塾がスタートすることになりましたが、現在の「くらし応援室」事務所を閉鎖する状況になりました。再開など詳細については未定で、それにとまなう、「楽塾」教室は「大阪市立大学都市研究プラザ阿倍野」内に設定しようとする会議がもたれています。こちらも交渉中ですが未確定なので、決まり次第お知らせいたします。ご迷惑をおかけすることになりますが、楽塾の授業をなんとか継続する方向で検討しています。

今期は前年のカリキュラムを踏襲しながら、人のかかわりや信頼感の大切さをテーマとし、これからの授業に反映させていきたいと考えていましたが、予期せぬ事態に直面しています。ご心配をおかけしますが今後の報告をお待ちください。

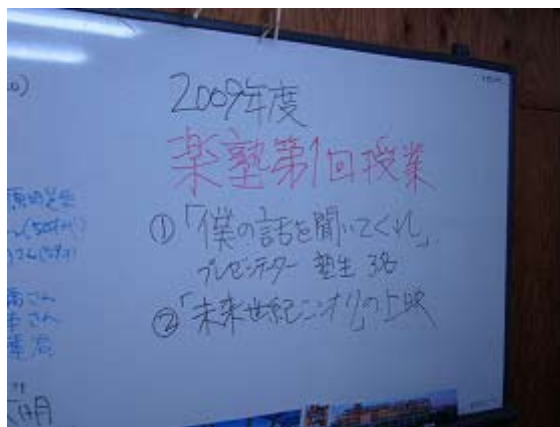
従来にも増しての応援をお願いいたします。

09年4月7日 塾長

4月4日の授業

- テーマ：①「僕の話聞いてくれ」／②ドキュメント「未来世紀ニシナリ」の上映
- 講師：T君・K君（以上(株)美交工業）・M君 司会＝塾長
- 参加者：塾生9名・スタッフ2名（以上11名）

楽塾の方向性として、講師と塾生が相互に入れ替わりながら、講師がある時は塾生となり、塾生がある時講師となる場面を作っていこうと考えていました。今回は塾生自らが第1回のプログラム提案をしてくれ、「僕の話聞いてくれ」というテーマになりました。だから新年度最初のプログラムは、3人の塾生が講師となり自らなかなか話す機会のなかった感慨を、それぞれの立場から話してくれたのです。また、②ドキュメント「未来世紀ニシナリ」の上映は、くらし応援室の活動を通じてT君やH君が出演しており、是非1度見てみたいという塾生からの声を反映したものです。



①「僕の話聞いてくれ」

前半1時間は、3人の塾生が1人15分の持ち時間を活用し、講師役をつとめました。以下3人のナラティブ（語り）です。

T君：昔から好きだった映画の話をして。小さいときに初めて見た映画は「黄色いカラス」という映画でした。淡島千景や伊藤雄之助が出演していた。絵画の時間に黄色いカラスを描いた少年が、「黄色いカラスなんてない」と先生に怒られ悔しがるのだが、実は少年は黄色いクレパスしか持ってなくて、

仕方なしにその色で着色したのだったが、この映画で僕は涙が出ました。

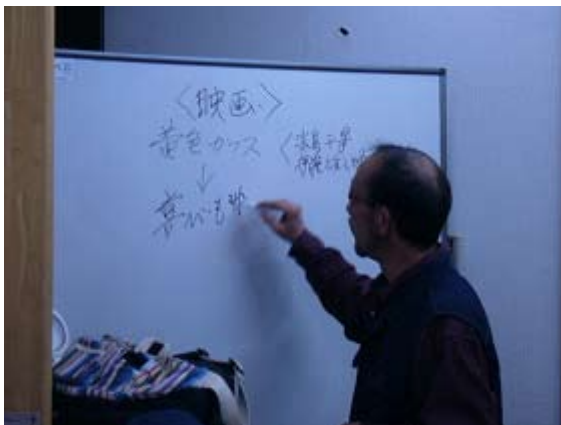
その後、木下恵介監督の「喜びも悲しみも幾年月」、♪お～いらミ～サキのオ と～だいま～り～は…♪（といきなり歌う）というやつやね。これがよかった。そのあと「無法松の一生」、これは阪東妻三郎や勝新太郎、三国連太郎などがやってるけど、僕が見た三船敏郎がよかったね。最後の雪の場面の安楽死が涙の出るシーンで印象的やった。吉岡夫人の子息にお金を貯めて渡そうとしていた男の心境に涙が出た。やっぱり三船やね。

とくにこの映画は僕は大好きで是非みんなにも見てほしい映画が「ブラックレイン」です。ブラックレインとは、原爆投下後降る黒い雨のことで、今村昌平監督にも「黒い雨」という作品があります。マイケル・ダグラスや松田優作が出てたんやね。監督はリドリー・スコットで、あの「エイリアン」の監督でもある。大阪の風景がどんより独特の雰囲気描かれていたのが印象的でした。

あと「青春残酷物語」（これまた時系列が随分さかのぼってしまう）。これは大島渚の監督で、ヌーベルバーグといわれていました。桑野みゆきと川津祐介が出演していて、最初の場面で川津が女の顔を殴っていてびっくりした思い出がある。「三匹の侍」は五社秀雄監督でテレビ映画です。平幹次郎、長門勇、丹波哲郎が三匹の侍でかっよかった。映画では「鬼龍院花子の生涯」なんかを撮ってます。これで僕の話が終わります。ありがとうございました。

僕はいつも映画と現実がごっちゃになっています。

T君の話しの中に五社監督の名が出てきたことに関して、「五社協定」という話題に移り、彼はその説明をうまくしていました。ちなみにここで「五社協定」のおさらいをしておきますと、1953年、邦画5社（東映／東宝／日活／松竹／大映）は、各所属する監督や俳優が、勝手に他社の映画会社で監督をしたり、出演できない規則を作ったことです。つまり引拔を禁止したわけです。五社監督という名前とは関係ありません



K君：ホームレス時代の話をしたと思います。姫路にいた時代にホームレスになったんですが、この頃人の観察をすることが出来ました。人はホームレスを上から（の目線で）もの珍しく見ながら通り過ぎて行ったけれど、俺も下から彼らを眺めることが出来た。

ホームレスのおっちゃんに世話になり、同居させてくれたり、空缶拾いの技術を教えてくれたりしました。姫路城のお花見の頃はたくさんの客でいっぱいになり、彼らの散会の後は食事や飲み物がたくさん残り、俺らはそれを頂いたものです。

当時は空缶の1キロ単位の値も高かったし、いまのホームレスの人たちは可愛そう。（大阪に移り）真田山公園にいた時、巡回相談員が来て、いろいろやさしくしてくれた。大阪ってやさしいところやなアと思った。自彊館に入所したあと、(株)美交工業に紹介され仕事を始めた。そして昨年、くも膜出血で入院し頭を手術した。生活保護の申請をしても、手続きが大変邪魔くさいこと、最近は大阪市営住宅に当選した。入居のための申請もうとうしいもんや。

そやけどホームレスをして世の中の仕組みが見えてきた。医療機関に入院して金がもらえたのはびっくりした。普通は病院に入ったら金を払わなあかんのに、俺らは小遣いもらえるんやからね。

若い人の問題、いわゆるフリーターや派遣は昔もあった。それを認めて仕事を選んできたんやから、今みたいに不況とはいえ、派遣村とか言うのはおかしいと思う。そんな状態になったらホームレスを経験したらいいと思う。甘えるのもエエ加減にしろといたい。

それにしても夜一人、初めてのホームレスをした時は怖かった。(T君が「しかし、それをクリアできたら翌日からホームレスはいいもんだと考えられる」と合いの手を入れる)。ホームレスをすることは、知恵を絞って考える習慣を持つことが出来ることだ。



M君：喧嘩の始まりは、中学校対中学校の争いで、その時鑑別所に入ったし、保護観察処分を3回やった。中学校を卒業後（19歳の頃）、以前喧嘩をした中学校の連中に因縁をかけられ、奈良秋篠の中等少年院に1年間満期出所した。

その後2～3年間働いた。御所市の印刷工場に行き、原付カブで走っていたが、その後、以前喧嘩をした人間と会い、ナイフで相手を刺して傷害致死にした。保釈で出たが、裁判の時遅刻をして3年の判決が出た。最高裁までいった。昭和46年仮出所した。

八木市の織物工場にいたが警察が捕まえにきた。そのあと奈良少年刑務所にはいったあと滋賀刑務所に移送された。

身元保証人を織物会社の専務がやってくれた。それから2～3年働き、その会社の女の子と結婚し大阪に出たが、女はすぐに逃げていった。その後、春日組という飯場で15年ほど働いた。春日組で古株になったがゆっくりしたくて、東住吉区の白鷺公園でホームレスを始めた。以上。

田岡事務局長の質問：最近食えなくなってわざわざ犯罪を犯し、保護される人がいるが、刑務所と野宿とどっちがいいですか？

M君：やっぱり野宿や。



②ドキュメント「未来世紀ニシナリ」の上映

2年前に公開された映画で、主として㈱ナイスおよび「くらし応援室」の活動が記録されていました。昨年度キネマ旬報ドキュメント部門の3位になった作品でもあります。

この映画の中には、塾生たちの顔がちらほら見えますし、講師でおなじみの人たちの顔ぶれにも出会えます。この映画を見ていない塾生の希望の声を反映し、上映してみました。上映後は給食を食べ、映画の感想など話に盛り上がりました。



4月11日(土)の予定

- テーマ：空手でメタボ追放
- 講師：「空手サークル長橋育友会」藤原敦子さん
- 場所：長橋小学校2階教室
- 時間：7時30分～8時30分（塾生は7時20分頃までにくらし応援室に集合）

桜が満開になってきました。自分たちの環境や状況も変化しています。世の中やはり常ならずだと感じます。今週もよろしくです。

第 2 回目の授業が終了しました。

桜日和の穏やかな季節の下

すばらしい天気が続きますが、花粉の飛散は僕にとって悲惨な状況になっています。あちこち桜が満開で、11 日の日曜日は近くの長三公園も花盛りで、公園いっぱいブルーシートを敷き詰めて、「ワンコリア西成」のイベントが賑やかに開催されていました。お袋の車椅子を押しながら、イベント会場周辺の人を横目に見て、ゆっくりと散歩しました。

第二回目の授業は、空手という格闘技でしたが、病欠と用事が重なった塾生 4 名以外は授業に出席してくれました。激しい運動で大汗をかいたわりにはみんな元気でした。T 先生の塾生への配慮も嬉しかったです。藤原先生お世話になりました！

09 年 4 月 13 日 塾長

4 月 11 日の授業

- テーマ：空手でメタボ追放
- 講師：「空手サークル長橋育友会」T 先生・藤原敦子先生
- 場所：長橋小学校 2 階教室
- 時間：7 時 30 分～9 時 10 分
- 参加者：塾生 6 名・スタッフ 2 名（以上 8 名）

大汗かいてご飯もうまい！

昨年に次いで 2 回目の空手実習です。今回の練習が初めてという塾生が 3 人いました。T 先生をはじめ、藤原先生、そして藤原先生の 3 人の子どもさんたちも参加していて、いつもとは違う、おじさんたちを相手の空手授業ということもあって、少しばかりの緊張と、わずかばかりの興味を感じているようでした。塾生たちといえば、練習後の筋肉の痛みや、朝をちゃんと起きられるのかいな、という老齡（！）ゆえの体調への心配と恐怖心の様子でありました。

準備運動はしっかりしっかり

まずは柔軟体操で、ということでしたが、その日はまる一日暖かい日が続いたので、即練習ということで、軸足を左前にして右上段突きの練習から始まりました。顔面攻撃に備え、両腕で充分顔をカバーしながら右からの上段突きを 10 回やります。その次は軸足を右前にして左上段突きの練習です。練習の合間に水分を取ったり、軽く腕の柔軟体操をして身体をほぐしたりもしました。



気分はブルースリー？

そのあとは中段蹴りの練習をしました。左足に体重をかけながら、右足で相手のみぞおち部を蹴り上げるのです。このときも顔面攻撃に備えて両腕を充分カバーし、右足の蹴りに注意力を集中します。この練習が終われば反対の右足を軸に左足の蹴り上げを行います。もうこのあたりから、息が激しくなる塾生たちもいます。発汗も人並みになってきました。

最後は回し蹴りの練習をしました。回し蹴りは、少し腰をおとし腰にひねりをつけながら足を水平に回し、そのまま足の甲を相手のわき腹に突っ込む技です。先生のモデル演舞を参考に、左右両足の回し蹴りの練習をしました。このあと先生にキックバックを持ってもらい、回し蹴りの練習をしました。前回同様I君の重量級の蹴り上げは抜群で、みんなは驚嘆していました。少年拳士たちの演舞を見せてもらって大拍手。塾生たちはもう上機嫌でした。



野球よりも楽塾だ！！

約1時間の練習を終え、楽塾に戻ることになります。給食が待っているからです。炊飯器のご飯も炊けていて、「くらし食堂」の惣菜類を配膳しながら、ちょっとだけ巨人対阪神戦の戦況も気にしながら（でも一切塾生からはその話題は出ない。むしろ「野球よりも楽塾だ！という雰囲気。すばらしいの一言）、身体を大いに痛めつけた分、食欲となって戻ってきたのです。近大の山崎君が楽塾に迷って、やっと着いたのが9時過ぎでした。



4月18日（土）の授業予定

- テーマ：「暮らしのオモイデバナシ——こんなイエに住みたいナ」
- 講師：黒木宏一先生（大阪市立大学・都市研究プラザ研究員）
- 場所：鶴見橋商店街4番街「くらし応援室＝楽塾」
- 時間：6時30分～9時00分

川浪さんに代わりまして～ ピンチヒッター黒木先生

今週の授業テーマは「死んでからのお楽しみ4」でしたが、川浪さんのご都合で変更です。市大プラザの黒木先生がピンチヒッターで登場していただくことになりました。黒木先生は若き建築博士ですが、昔ながらの住居を映像や資料を眺めながら、幼い日の暮らしや遊びを思い出してみようという試みを考えてくれています。お楽しみのワークショップも計画中です。たくさんの塾生の参加をお待ちしています。

第3回目の授業が終了しました。

夏の息吹が身近に

19日の日曜日は終日暑さが続きました。僕は衣類だけではなく、毛布やシーツなど冬用の寝具類を半日かけて洗濯しました。何回かに分けて洗いましたが、陽光がつよく、薄物などはその都度乾いていくので、ベランダでの洗濯物の取り入れは比較的うまくいきました。

「衣替え」とは陰暦4月1日（つまり現在では5月初めです）に、宮中での〈更衣の節〉として、装束や調度を夏物にあらためたといわれていますが、僕も冬物を処分しながら、少し早目の我が家の衣替え行事に汗をかいたのでした。

今年度第3回目の授業は、都市研究プラザの黒木先生が、昭和初期にあたる民家の形態や、5月に新しい楽塾の教室となる「都市プラザ阿倍野」の景観を紹介しながら、人々の暮らしの拠点となる家屋の話をしてくださいました。その上で、幼かった頃の塾生たちが住んでいた、家の思い出話や体験・経験を話してもらおうという試みをしました。

09年4月20日 塾長

4月18日（土）の授業

- テーマ：「暮らしのおモイデバナシ——こんなイエに住みたいナ」
- 講師：黒木宏一先生（大阪市立大学・都市研究プラザ研究員）
- 場所：鶴見橋商店街4番街「くらし応援室＝楽塾」
- 時間：6時30分～9時00分
- 参加者：塾生11名、スタッフ2名（総数13名）。

①昭和の民家

黒木さん所蔵の写真から、大阪の長屋をプロジェクターで映しながら、昭和初期（1930）の住まいについて語ってもらいました。現在のような水洗便所がなかったため、汲み取り口から糞尿を肥え桶に移して収集していたので、糞尿収集のための通路として民家裏にはたくさんの路地が広がっていました。また当時の一般的民家として、漫画のサザエさん一家の住まいを取り上げ、その家の中で冠婚葬祭を取り仕切ることが出来たこと、家族団らんの部屋や、お客をもてなす集いの場所としての機能を持っていたことなどを学びました（とはいえ、都会など、一般的には自分たち家族が住まうだけで余裕などなかった住宅も多かったと思います…佐々木注）

このあと、1950年代にかけて建設された公営住宅には、一般大衆の入居へのあこがれや、2DKなど住宅の間取りや、当時の電気製品の話などに話が広がりました。

現在は、住民参加の公営住宅が作られ始めており、豊富な間取りや各生活スタイルに応じた設計がされるようになったという話で終わりました。

②塾生それぞれの暮らしのおモイデ

「さて、今回の授業は、それぞれの暮らしのおモイデをみんなの体験から、お手持ちのメモ用紙に書き込んでほしいと思います。終わったら一人ひとりお話をさせていただきます」。黒木さんは、あらかじめ用意したA4プリント「暮らしのおモイデ～連想ゲーム～」に書かれた〈家族ダンランの場所・縁側・子ども部屋・遊びのおモイデ・風呂・



五右衛門風呂・親子げんか・お隣さん>など約30のワードを参考にして、白紙部分にスケッチを描いてもらったり、当時の家の間取り、あるいは文章でオモイデを書いてもらおうと考えました。こうして各自が書き上げた段階で、一人ひとりが自分のオモイデ話を語り始めました。



T君：富田林の蔵の中で生まれて住んでいた。蔵は借りていた。一間だけで天井が高く畳はひいてあって、冬は安らかだったが夏はむっちゃ暑かったんやね。兄貴にはいつも布団蒸しにしていじめられていたけど、その兄貴も、いまは70を越えて身体が弱っている。

I君：5人暮らしで、間取りが4つあった。親父が公務員だった。中学校は5分間で行けた。だから遊び場は中学校で、部活のあとは校庭で遊んでいた。昼ごはんは弁当を持っていったことがない。いつも家に帰って食べていた。高校になって通学に時間がかかった。

M君：300坪の家で、田んぼ一反分や。敷地の裏がよその畑で、自分の家の畑は別の場所に3つほどあったが、俺の代で終わりや（食いつぶした）。昭和28年に建てた家で、6畳・居間、床の間・8畳・中2階などがあった。土間には仕切りのある井戸があって、ポンプで水を上げていた。夏はその井戸でスイカを冷やしておいしかった。風呂は外にあった。牛小屋には牛が10頭、にわとりを300羽買っていた。そのうち1頭は盗まれたな。

K1さん：私が6歳になるまで、父親はサーフィンをやっていました。家は廊下があり長細いトイレがありました。母がクッキーを焼いてくれた台所があって、その奥にはお風呂があった。一番の思い出は物干し台に上ったこと。そこに上ると町内がよく見渡せました。南向きで、洗濯物もよく乾いた。石畳の道を行くとおばあさんの家があった。その後、私たちの家は立ち退きにあい、全く小さな家に移ったが風呂は小さく、それには入らず、家族で銭湯に行ったことを覚えています。

Y1君：平成生まれなので皆さんのような思い出話はありません（“平成生まれ？”という驚きのヤジあり）。これまで3つほど引越したけれど、これから話すのは一番初めのボロ屋です。亀岡で阪神大震災に会い、風呂に思いっきり亀裂があって、地震の検査時に欠陥住宅だとわかりました。父親がヤミ金に手を出したので、よく玄関の戸や窓ガラスを叩かれた。その後、母親が貯めていた貯金で田舎に大きな家を買って移った。父が死んだので保険が入り、現在の家に移りました。

Tさん：香川県に住んでいたが貧しかった。風呂から出たところには天窓があり、そこで食事をした。庭には自転車か2台ほど置けた。便所は汲み取り式で、畑にはその肥やしを施しました。海に近かったので、ちくわやかまぼこを加工していた。西国48ヶ所のうちの1ヶ所がこの町にはあったね。

K 2 君：愛媛県の田舎で住んでいた時、親父が五右衛門風呂を作った。下駄を履いて風呂のふたを踏んで入るんやが、下手をして入ると風呂全体が鉄板になってるんで、気をつけて入らんかったらやけどをする。水道やガスはなかったんで、途中から井戸にモーターをつけてくれた。平屋の壊れそうな家だった。家の前はスイカ畑で、自給自足の生活みたいなもんやった。



Y 2 君：僕が小さい時に住んでいたのは、京都の伏見区の公営住宅です。玄関すぐにダイニング、その奥に4畳半と6畳がありました。5階で廊下があって、お隣さんとおつきあいがあり、楽しく遊んだ覚えがあります。エレクトーンがあって母親が僕に習い事をさせようと買ったものですが、僕は嫌いなので挫折してしまいました。廊下からは見晴らしのいい風景を見ることが出来ました。

M さん：新潟で10人家族で住んでいました。玄関は土間があり、でっかい囲炉裏があり、その周りにはおじいさんおばあさんたち用の居間、両親用の居間などがあり、大きな家に住んでいた。食事時などは親父が先に箸をつけなければ始まらなかった。吹き抜けのある部屋には刀が飾ってあって、その周辺には隠し部屋のようなのがあった。親父が尺八をやっていたので、父の友人たちがよく集まっていた。土蔵があった。風呂があったので近所の人々がもらい湯に来ていた。屋根がつぶれて空が見えたことがあった。その際に、台風の間が見えた。その家の前で、水兵さんのセーラー服を着て撮った写真が唯一残っています。現在も広い屋敷で残っていて、兄貴から使えと言われていたんですが、維持費がかかるので断っています。僕は新潟地震、阪神大震災、中越地震と3大地震を経験しています。もう無いと思うけど。

H 君：とくに思い出はないが、千里ニュータウンに住んでました。府営団地で、三人兄妹でよく公園で遊んでいました。環境はよかった。でもよく家出をした。団地の周辺に土管が置いてあって、家に帰るのがいやだったので、その土管の中によく寝ていた。中学生の頃やったかな。

K 3 君：福岡県にいた。前にも一度話をしたが僕のトラウマの話です。団地の部屋に兄貴が倒れていて、僕はパイプを握っていました。すごく太陽が赤くて、母親が急いでやってきたことを覚えている。8歳の時です。これが現実のことか空想か今ではわからなくなっています。

ノンストップで授業は終了した

いつものように中休みもせず、時間いっぱいまで塾生たちの話が熱っぽく語られました。従って2部で計画していた黒木先生のワークショップは出来なくなりました。先生の言葉です。

「本来なら、みんなが『こんな住居に住みたいナ』というテーマで、じっくりワークショップをする予定でしたが、前半すごく面白い話で盛り上がり、後半が残り少なくなりました。この時間は、これまで皆さんが見てきた印象深い家のことを一言ずつ話してもらえないかなと思っています」。

M君：リアカーで寝とった。2年ぐらいホームレスをやっとった。

T君：俺は車（廃車）の中で寝ていた。そんな時塾長に助けてもらった。冬場が寒かったな。（野宿に）慣れた人間なら屋根のある家なんかいらんと思う。

K君：夏場の暑い時、野宿は蚊に刺されてかなわん。

I君：ホームレスは、身体が悪いとか不健康とかは関係ない。どんなに寒かろう暑かろうが関係ない。その環境で順応している。

塾長：そやけど今は家にいててエエやろ。

全員：そらええわ。

K2：良し悪しや。雨さえなければホームレスはやれるが、やっぱり屋根があるのはええな。

I君：風の強いのは辛い。

塾長：自分の友人たちの幾人かはお屋敷のような家に住んでいて、僕の家と比べて、どうしてしてこんなに違うんやろと不思議だった。それは裕福とか貧乏とかという概念ではなく、違う空間に住んでいるという感覚だったと思う。

黒木：現在のように個室が出来、子どもたちが自分の空間を持ち出し、家族との関係性を薄くしてきているのではと考えています。空間を解放していく必要がありますね。

Mさん：個室はあってもいいけど、コミュニティーをつくる部屋が必要やね。

阿倍野「楽塾」についてひとこと

このあと黒木先生から、5月に始まる阿倍野楽塾の場所について話してもらいました。阿倍野プラザの見取り図1F2F、および写真の説明をしてもらい、南田辺の閑静な住宅地であることを確認しました。このあとはいつもどおりの賑やかな給食となり、川浪さんもちょこっと寄り道してくれました。解散後、5月9日の講師である川崎那恵さんと当日の打ち合わせをし、部屋の片づけをしたのは23時を回っていました。

4月25日（土）の予定

- テーマ：中上健次の「路地」から
- 講師：1時限目：「新宮の地理」／水内俊雄先生（大阪市立大学地理学教授）
2時限目：「ふるさとの喪失」／若松司先生（大阪市立大学都市プラザ研究員）
- 場所：くらし応援室＝楽塾
- 時間：6時30分～9時00分

来る5月2日（土）から「楽塾」は、阿倍野区南田辺にある「都市プラザ阿倍野」に移転いたします。今回の授業でも黒木さんから民家例として紹介された都市プラザは教室としてかなり広く、塾としても雰囲気があり、楽しく学び遊べる空間であると思います。いろいろとご迷惑をおかけしましたが、来月からの授業にご期待ください。

また「くらし応援室」の相談事業については5月以降の詳細はまだ未定です。それから、前山僧侶から新潟産のコシヒカリを給食用にいただきました。これからの給食においしくいただきます。前山さんありがとうございました。

第4回目の授業が終了しました。

季節のわがまま

相変わらず季節が定まらなく、外出する衣服の選択が日替わりで春から夏、そして冬に逆戻りをしています。季節の移ろいは往ったり来たりを繰り返しながら、来たるべき本来の姿に成熟していくのでしょうか、それにしても寒い月曜日になりました。塾生、楽塾応援団の皆さん。季節のわがままにうまくつきあってください。

09 年 4 月 27 日 塾長

4月25日(土)の授業

●テーマ：中上健次の路地

●講師：☆1時限目：「街道から路地へ」

水内俊雄先生（大阪市立大学地理学教授）

☆2時限目：「路地から—ふるさとの喪失」

若松司先生（大阪市立大学都市プラザ研究員）

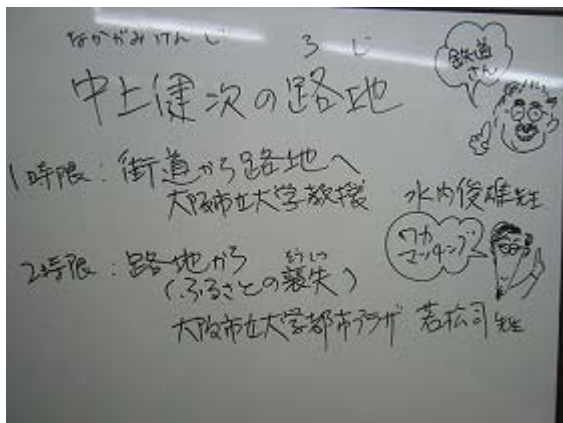
●場所：くらし応援室=楽塾

●時間：6時30分～9時15分

●参加者：塾生13名、スタッフ2名、講師2名（総数17名）。

はじめに

今回の授業は、新宮出身の作家中上健次に注目したいと考えました。そこで、中上健次の著書を持つ若松氏の「路地論」と、関西から出発するたくさんの街道が、新宮の路地に到達していく地理的過程を中上につなぐ試みとして水内氏に語ってもらいました。先生たちの資料が豊富で、この2時間の少ない時間で、もったいなく思い、これについては今後も深めていきたいと希望しています。



1時限；街道から路地——水内先生

まずは水内先生が、1枚目のプリント（明治22年発行）の大阪地図を参考に、熊野街道、こつま街道、カマから住吉を通過する紀州街道、難波宮に発するなにわの大道（おおみち）などを解説しながら、各街道中途にある、私たちになじみある拠点などの解説を織り込みながら、大阪から熊野路那智大社までの3～4km間隔ごとにある102の王子（王家の休憩所）の話題を披露してくれました。

2枚目は、大阪南部から紀州半島を眺望するカラープリントです。新宮に至る大きな街道筋は「大辺路」「中辺路」であり、高野山方面からは「小辺路」もある。そのほか吉野方面から大峯道や東熊野街道（北山街道）、伊勢からの伊勢道、五条を経由する西熊野街道（十津川街道）などたくさんの街道筋が、人を新宮に導いて

くれるのです。熊野街道で言えば、天皇たちは、京都から淀川を船で下り、天満の八軒屋で下船し15日くらいをかけて速玉神社や補陀洛山寺へ参詣したそうです。

熊野街道は、現在の新宮市内にある神倉山に至るが、丹鶴城を眺めて、蓬莱・阿須賀など珍しい地名を持つ町がある。船町は物流の集積場であり荷役でにぎわった場所。3枚目のカラー地図には春日・野田・浮島・井の沢などの同和地域の名称もあり、中上のふるさと春日に接近していきました。同プリントの絵図に丹鶴城が掲載されており、楽塾の旅行で行った丹鶴城の話題が塾生の間で戻ってきました。

中上健次は春日で誕生しました。明治時代には(穢多村=えたむら)といわれ、その後永山村と称しました。春日としてスタートしたのは近年ですが、野田・浮島・井の沢に比べ、被差別部落としてはもっとも古い地域といわれています。野田・井の沢は新参モン、春日は昔からの地域と見られ、それは、昔からの浪速と近代に形成された西成との関係によく似ています。職人集団として皮革産業を担い、市内から見えづらくするため臥龍山の山すそに地域を形成していきます。

中上はもともと春日に生まれましたが、親の再婚の繰り返しなどで野田に移動しているなど複雑な経過をたどります。・同じ被差別同士といっても厳しい住民感情の経緯を体験することになるのです。新宮は短い期間の間に戦災と2度の地震を経験しており、改良住宅など同和地域内の住宅への取り組みは、災害復興へのエネルギーからきているのではないかと水内先生は言います。

5枚目のコピーを見ながら、戦後の被差別地域を中心とした地図を読みます。この地図で、臥龍山の部分が真っ白くなっていて、昭和35年に実施された山をすべて削られた証になっているものです。昭和50年、中上のふるさと春日の山も削られ、中上の言う路地も失われてしまった。新しい部落、古い部落、地形の変成などが同時期、中上文学の創作上の大きなテーマとなっていると考えられます。

こうして水内先生さんの授業は、新宮に至る街道筋を重要な脇役としながら、中上健次と言う巨山に出会う旅を案内してくれました。これを引き取って、2時限では若松先生の中上健次論が登場します



2時限；路地から…ふるさとの喪失——若松先生

若松さんの資料も豊富で、第1枚目のテーマは「中上健次の『路地』と臥龍山」でした。若松さんは「中上健次は『春日は、人間関係が入り乱れていてグツグツ煮えたぎっているところ。さまざまな思惑が入り乱れる複雑な場所。そこに路地が存在する』と言っています」と話し、路地論がスタートしました。1948年の新宮市街地を中心とした航空写真から、春日の路地風景や臥龍山の名残り、浮島の森の白蛇伝説（上田秋成の小説で有名）や過去に賑わった浮島遊郭、健次が卒業した新宮高校の話題などが解説されていきます。

2枚目のテーマは「中上健次をとりまく家族関係」で、彼の母親は3度結婚をしていて、最初の夫の第六子として生まれている。健次が8歳の頃、母が三度目の結婚をすると同時に、春日から野田に移転するが、「それは伝統的同和路地から、情緒に欠ける新興同和地に過ぎず、この転居が後の健次に大きな影響を与えている」と言います。「13歳の時には、異父兄が自殺をしており、彼の文学を志す事件として語り継がれている」ようです。19歳の時、受験を目的に上京し、しかし大学には行かず文学活動を開始していくことになりま

した。

3枚目「分類」では、この後27歳の頃『十九歳の地図』で芥川候補。30歳、『岬』で芥川賞を受賞します。また31歳には『枯れ木灘』が毎日出版文賞を受賞。36歳で『地の果て 至上の時』を著し、『岬／枯れ木灘／地の果て 至上の時』は中上健次の3部作とされています。「これらは路地が崩壊していく前後を描いているが、その崩壊状態そのものを描いた作品として『藁の家』が位置づけられるのではないだろうか」と話していました。

4枚目「経歴」。77年、同和対策事業として生まれた春日の改良事業の調査が始まり、それに反対するかたわら、自ら16ミリで故郷の風景を撮り収めていくのです。「このころ姉や親戚などと、中上の路地喪失批判に対し喧騒状態になっていった」といいます。「中上にとって路地は特別な場所であったのでしょうか。住み続けてきた幼い頃からの原風景である山が削り取られていくことは、自我を通して路地の喪失を感じていかざるを得ない気持ちであったのだと思います」。それらは3枚目の若松さん作成の「評伝」である引用集が語っているところでもありました。

さて若松さんは、5枚目『路地』から「中上健次の故郷の喪失」で、主要な作品に触れながら、その作品の触りを語ってくれ、若松さんの健次への思い入れを感じたのです。

このあと塾生たちのふるさとの原風景がどんなだったのか、幼い頃の地域のかかわりはいかなるものだったのかを話し合いました。自分たちが住む町の喪失感や記憶は、それぞれが自分の中で再生し、諦め、熟成させていくのでしょうか。



給食：あらかじめご連絡を

たくさんの参加者になり賑やかな給食時間となりました。ご飯は多めに炊いていたのですが、事前に予約していた惣菜類が足りなくて、みんなに不足感があったことと思います。参加者が多くなった場合、惣菜の追加が出来ない状態なので、可能なら当日朝までにあらかじめ参加予約をお願いできれば嬉しいです。逆に参加を表明されていてもこれない場合はキャンセルの連絡をお願いします。惣菜の予約は楽塾の経済性に少々影響を与えますので、何とかご協力をお願いします。



5月2日（土）の予定

- テーマ：知的障害者と私たちのあいだに
- 講師：堀川大介さん（エル・チャレンジ事務局次長）
- 場所：くらし応援室＝楽塾
- 時間：6時30分～9時00分予定

既報で、「楽塾」は阿倍野区にある「都市プラザ阿倍野」に移転する予定だとしました。しかし、現在、都市プラザおよび川浪さんの阿倍野における地域的認識の合意にもう少し時間が必要だと判断し、当塾は独自の拠点を決め5月9日から移転します。詳細は近日中に告知させていただきます。重ねがさねの迷走をお詫びいたします。

今回の一連の騒ぎの発端は、地域団体の「くらし応援室」への無配慮が原因だったと考えます。少なくとも現場での作業に関わる人たちの顔を忘れてほしくないと思いました。また、時間的制約の中で、性急にプラザを選択した楽塾にも一因があったと考えます。「急いではことをしそんじる」であります。新規まき直して再出発です。（佐々木）

第5回目の授業が終了しました。

楽塾開始直前のできごと

数日前から事務所前の公園にいる青年の姿が気になっていました。まる1日そこで過ごしているようなのです。僕はこれ以上仕事を増やしたくないので、ほぼ放置の気持ちで知らん振りをしていました。ところが複数の商店主たちが地域不安と不衛生を理由に、退去説得をしていることがわかりました。要するに目障りだということなのですね。

僕はこっそり青年と話をすることにしました。彼は30歳。汚れた服を着ていました。「名前は勘弁して」「ンじゃ暗号名で呼ぶで」ということで野宿歴6年、これまで梅田あたりを彷徨し最近西成にやってきたようです。栄養失調風で目もうつつ、言葉に覇気なし。

「仕事はしたいけど、こんな状態で面接にはいかれん」

「支援センター知ってるか」

「聞いたことある」

「とりあえずはメシと寝ることを確保しようや」

「センターいうところは共同ベッドって聞いているけど」

「集団生活イヤかいな。わかるけど、今、そんなこと言うてられん。センターに入ってる間に、俺が仕事探すやん。ちょっとだけでも利用して出たらエエやん」

「……………」

「役所はずっと休みやからそれまで我慢して、連休明けたら支援課へ一緒に行こか」

「……………」

彼は自分に逡巡しています。いきなりの仕事はたぶん無理でしょう。親しい巡回相談員に「この現場に来て聞き取りをやってほしい」と頼みましたが、僕がやっていた頃の巡回とは様変わりしていて、すべての相談は支援課でしかやれないと言う返事。「私が行ってあげたいけど、それをやると違反行為になって上からどんなこといわれるか。今の巡回は何のための巡回かわからん」と悲痛な返事です。

顔色しか伺えないクソ上司を持った有能な人たちのうめき声を、最近本当によく聞きます。現場を知らず管理が仕事と勘違いしている“情け知らずの人たち”を駆除しなければ、地域支援と言う作業は死んでいきます。いやもう死んでいる！

いずれにしても休み明け、支援課に連れて行くつもりですが、ホンマ、仕事せなあかん奴が金だけはちゃんとタダ取りし、仕事は全然しいひん。

2009年5月3日 塾長

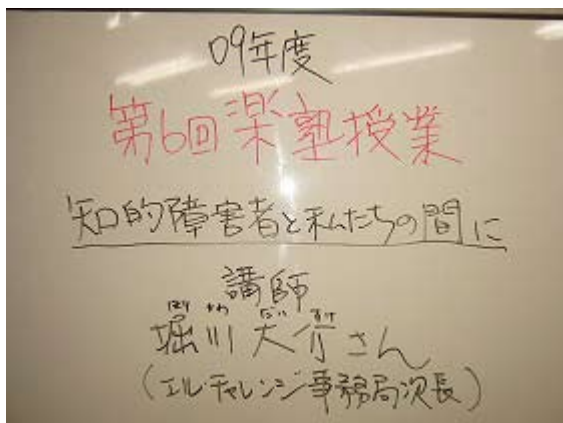
5月2日(土)の授業

- テーマ：知的障がい者と私たちのあいだに
- 講師：堀川大介さん(エル・チャレンジ事務局次長)
- 場所：くらし応援室=楽塾
- 時間：6時30分～9時15分
- 参加者：塾生7名、スタッフ2名、講師1名(総数10名)。

はじめに

と言うわけで、枕説法がいつになく長引いてしまいました。今回の授業にエル・チャレンジの堀川さんを招いた理由があります。とくに当塾生たちの多くが、知的障がい者と協同で作業をする機会を持つということ、違う現場で「同じ作業をしていて、何であいつらとおんなじ給料や」とか「仕事しよれへん」と言うような相談事を聞かされたことがあったからです。ひょっとしたら当塾生たちも、そんな悩みや課題に共通することがあるかもと想像したのです。

エル・チャレンジは、知的障がい者の当事者権利や地域的包摂、そして就労訓練や雇用活動を促すために協同組合を立ち上げ、従来の作業所依存から外に向く、一歩進んだ当事者支援を行っている団体です。堀川さんは事務局次長をしています。



知的障がい者とは

読み書きや計算能力が極端に低く、抽象的概念がわかりにくく、また応用力にも乏しく環境の変化にも対応が難しい人たちのことで、それは脳の遺伝子に傷を持って生まれてきたことに起因するといえます。だから年齢が幼年期で止まっていて、一生治癒することがないといわれています。

このほか自閉症・学習障がいなどの「発達障がい」についても言及しました。発達障がいを一言で言えば、その場の空気が読めない人といわれます。自閉症は人との関係をうまくつなげない、しかし特定の能力を秘めたユニークな人が多いと言う話にも。注意欠陥障がい・多動性障がいなどでは長嶋茂雄やアンシュタインの例を引用し説明してくれました。また学習障がいについては、普通に生活は出来るが、読み書きや計算が出来ない人たちで、最近の例ではトム・クルーズはまさに識字障がいがあるらしい。俳優としての資質は抜群ですが、字が読めないためにスタッフから教えられて演技するというのです。このように、私たちの周りの“ちょっと変”と思える人たちの話をしてくれました。しかしこれらは知的障がいのように、脳に傷を負った人たちとは違う心の病を抱えた人たちといえそうです。

福祉と労働

重度の知的障がい者が働けるようにするのがエル・チャレンジの作業。自分たちで働くきっかけを作ることが難しい人たちに、エル・チャレンジがそのお手伝いをするのです。T君は「彼らはそこまでして働く必要があるの」と質問しました。それに対し、堀川さんは「働くことは、彼らに元気が戻ってくることなのです」「働くことは、何ぼお金があっても動かせない大切な要素。毎日遊んでばかりしては暮らせない。自分の意欲を高めるためにも働こうとするのです。ところで作業所なんかで働いても、誰も注目してくれることがない。そんな場所では働く実感も薄い。しかし、一歩社会で働くことは、社会とのつながり、達成感も出てくるので作業所などで働くことと全く違う。塾生の皆さんも西成区役所などで、緑と黄のド派手なユニホームを着て作業している人を見るでしょう。彼らは見られること、声をかけられることで頑張る姿勢を得られる」と話します。



映像「知的障がい者の雇用への道」の観賞

現在、エル・チャレンジで実践する現場での活動をビデオにしたものを観賞しました。この機会に、これまで障がい者雇用が困難とされてきた医療現場での試みを見たのです。大阪済生会吹田病院とエル・チャレンジの協働で、病院内の仕事作りから雇用までの一貫した就労支援を記録していました。

まずはエル・チャレンジのリーダーたちが先行して病院で実習をするところから始まり、病院スタッフたちと情報交換をします。ここではリーダーたちが、当事者たちの能力や向き不向きなどをチェックし、希望する人たちの面接につなぎながら、はじめからの雇用ではなく、実習（研修）から入っていきます。病院の広さに驚き、さまざまな技術を習得していく青年たち。雇用を果たした青年たち、その後、病院側の理解の深まりを予感させながら映画は終わります。

ワークショップ

今回も、2時限目との境界なく授業が突き進んだために時間が少なく、休憩後約20分ほどのワークショップを実施しました。知的障がい者の中には、言葉が伝わりにくい人たちも多いので、健常者が当事者の立場になるため、「スペイン語」を使い、リーダー（堀川氏）が当事者（塾長）に指示を与えるシミュレーションを想定しました。まずはリーダーが言葉だけで僕に指示をします。内容がわからなければジェスチャーで伝えていきます。スペイン語がわからない僕は、リーダーのジェスチャーでイメージしながら作業をするのです。このように知的障がい者の気持ちになるためのワークショップでした。

堀川さんは、「知的障がい者が天使のように思われがちだが、軽度な人ほどそをついたり、づるがしこい行為をしたり、また横着なことをする人もいます。そんな時はちゃんと指導していく必要がある」と言います。「それは知的障がいであろうがなかろうが、人としては同じだから知的障がい者の特徴なのではない。ほめられたこともなく、否定さえされてきた人たちなので、彼らのほうが人に対し、観察力に長けていると思う」。そんな話を聞いて僕も同感だと思いました。僕らが関わる社会的困難層とは共通するし、弱者を演じる人たちが結構いるのです。都合のいい時は媚び従い、欲求を否定されると非難し罵倒する男たちを多く見てきました。今回は、弱者とか被支援者とかいう以前の、人間的存在としてこの問題をやってみたかったのです。



5月9日（土）の予定

- テーマ：私のたくさんの"父たち母たち"
- 講師：川崎那恵さん（立命館大学職員）
- 場所：三星（みつぼし）温泉＝楽塾
- 時間：6時30分～9時00分予定

楽塾メニューは、三セット＜授業＋給食＋お風呂＞の豪華版

「楽塾」の行き先が決まりました。現在地「くらし応援室」から西方向5分ぐらいの位置に「三星温泉」というお風呂屋さんがあります。当店の地下会議室は一定の広さと、何より清潔で使い勝手のある場所なので、利用することに決めました、地域NPOが経営母体で、今後、店舗イベントなどの企画運営などにも協力していくつもりです。5月9日の授業からスタートしていきますので、お立ち寄りの節は三星温泉にお越しください。お店の暖簾をくぐって頂き、番台に「楽塾です」と伝え、正面の階段を降りていただければ教室です（土曜のみ）。後日、参考に地図を添付しておきます。給食のあとは入浴と言う楽しみが増えました。

「くらし応援室」についても5月9日付けで現在地から撤去します。当分相談窓口がなく作業に支障もあり、とくに塾生諸君、雇用協力企業、支援者の皆さんにはご心配をおかけします。9日以降は、まず佐々木の携帯に連絡いただき、その都度相談・打ち合わせなどの場所を決めたいと考えます。従来どおりの事務所での面会が出来ずご迷惑をおかけします。必ずご連絡のうえよろしく願いいたします。

佐々木

第6回目の授業が終了しました。

楽塾ならぬ音楽塾

5月12日（火）から6月2日まで、毎週火曜日の連続4回を近畿大学で講義してきます。文芸学部の清先生（08年12月の楽塾「仮面舞踏会」講師）から幾度かお誘いがあったのですが、昨年後半にお引き受けしました。ところが、事務所問題や楽塾移転が重なり、講義のシナリオを仕上げたのは連休を利用しながら、第6回楽塾終了後の10日という体たらくで、まさに曲芸師並みの荒わざというか無鉄砲ぶりをさらしました。

この間、超多忙な田岡事務局長の側面的お手伝いに感謝しています。この講義名は、清先生から「楽塾」ならぬ「音楽塾」と命名され、僕のテーマは近・現代史を語りながら、背景に流れるロックミュージックをオンエアしDJするものです。お題は「時代は変わる —h i d a r i m a k iの極私的ROCK序説—」であり資金稼ぎ（！）をしてきます。4回ともに14：50～16：20で、東大阪市の近大（A-302教室）にて開催されます。興味ある方はどうぞ。

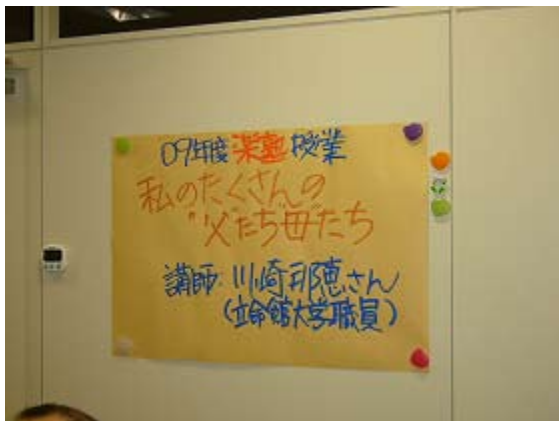
09年5月11日 塾長

5月16日（土）の予定

- テーマ：私のたくさんの“父たち母たち”
- 講師：川崎那恵さん（立命館大学職員）
- 場所：三星（みつぼし）温泉交流室＝楽塾
- 時間：6時30分～10時00分

はじめに

何年前か、川崎さんの話で印象に残っていたことがあります。「全国のあちこちに私の父や母がいる」という何だが“スキャンダラス”な始まりだったと記憶しています。実際は、自らの被差別の出自を通じ、たくさんの人々と関わりを持ちながら、部落問題を考えていく若き川崎さんの情熱に共感した話なのですが、いつか楽塾の授業にお願いしていて、今回やっと実現しました。旧守的解放運動を解放していこうとする川崎さんのような若い人たちが見られます。いわゆる垂直的組織ではなく、個の力を信じる水平的活動に、僕は全面的に共感を覚えるのです。



1 時限：ドキュメント「出会いを紡ぐ」

「自分にとって実の父母とは違う、私のことを娘みたいに思ってくれる人たちが全国各地に多いのです。今日は、そんな全国の“父たち母たち”、そんな私を許してくれる人たちを紹介し、私の自慢話をしてみたいと思います」。「お話の前に、川崎と友人武田さん二人の日常を描いたドキュメント『出会いを紡ぐ』を見ていただきます。監督は『未来世紀ニシナリ』でも活躍された田中監督です」。

アメリカ留学や、香川県の本島などいくつかのフィールドを体験してきた川崎さんと、ピースボートに参加して世界を視野にしてきた武田さんの 30 分のドキュメントでした。



アメリカ留学の経験をもつ川崎那恵(25)、ピースボートで世界一周した大学生・武田緑(21)。
生い立ちや活動は違っても、互いにリスペクトするふたり。部落問題を共有するため、そして何より、自らが気持ちよく生きるために、肩肘張らず、柔らかいつながりの中で人権を考えていきたいと思います……。
那恵はムラの暮らしを書き残そうと、お年寄りたちの聞き取りを始めたり、後輩たちを離島の被差別部落に誘います。緑は地元の青年部の活動と並行して、人権や教育を考える若者のネットワーク作りや学校のフィールドワーク、韓国へのスタディツアーにも参加します。
ふたりのフラットでフレンドリーな解放運動とは？

監督／田中幸夫
プロデューサー／田中幸夫・酒井邦一
企画・制作／風楽創作事務所・フルーク映像館

<http://www.flugeizo.com/>

武田さんは冒頭「これまでのゴリゴリな人権運動は自分たちに合わなかった。ピースボートなどの活動の楽しさは新鮮だし、いろいろなテーマを持って活動する人たちとのかかわりが出来て、それが大切だと思いました」と話します。全く同感です

川崎さんは「大阪の部落で生まれました。市立大学に入って部落問題を学びました。アメリカで肌の違いやさまざまな人種を見てきて、自分の問題を自覚しました」。人種の「垣塙（るつぼ）」の中で大きな収穫を得たと述懐します。

「本島での被差別部落での出会いが、自分たちの生き方を徹底的に変えた」と。実際、本島でのあっけらかんとした支部長の語り面白い。「隠さず、本音で語る大切さ、出会いが人を変えていく。それを実感した」と川崎さん。「差別はなくなしてほしいという反面、自分はそれをルーツに生きている。本島の人たちと出会って、自分らしい解放運動とは何かを問うきっかけになりました」。川崎さんは画面の中から、これまでの解放運動ではない何かを模索し始めたのです。

武田さんは「ともえちゃん（川崎さん）と同じように、ライフワークというのではなく、人権の楽しい活動にしていきたい」と語ります。つまりこれまでの活動の面白さは2人に共通しているのですね。僕もよく理解できます。「将来、教育者としての夢を持っている。韓国でのフィールド・ツアーを通じ、歴史の大切さ教育の大きさを痛感した」。教育がいかに大切かを力説していました。

「二人はこれからも一緒につながっていくようにしたい」というのが二人の目標だそうです。＜柔らかい関係性が、今後の解放運動をつくっていく＞というのが映画の終幕です。

「母は矢田、父は浅香出身者。彼らは被差別をネガティブにとらえていた。日ごろサイボシやアブラカスを食べていたが、それを他人にしゃべるなど強く言われていた。また地元のことを一切言わないようにいわれていた。市立大学は、人権に関わる教科がたくさんあると聞いていたので勉強して入学した。入学当初、カミングアウト出来ず悩んでいた。香川の本島に連れて行ってもらったが、1日目は自分のことをしゃべれなかった。

しかし、2日目、村の人たちが若い人たちに歴史を教えてくれ、そこでカミングアウトした。親は折角大学に入学したのに、なぜそんなことを学ぶのか不満であった。しかし、全国のあちこちを訪ねる中で、両親の選択を理解できるようになった。また全国の父、母のような人たちの話を聞きながら、自身の存在を考えることが出来るようになった」と言います。

T1君：どんな差別があるのか？

川崎さん：結婚や就職への偏見など。カミングアウトしたら、その結果どうなるのか、周囲の目はどうなのか、仲良い友だちはどう思うのか不安だった。たとえば、在日の人たちは自由に自分の話をするのに、自分はどうしても言えないのだろう、というのが潜在している。

T2君：自分を治すのか、他人を治すのか？

川崎さん：両親が私のやり方をいい風に思っていない。学力を身につけ社会を見返す目論見は水泡に帰すことになるから。親に悪いという気持ちもある反面、いろいろな考え方があると納得している。しかし一生懸命がんばっている活動家たちと両親は、共通している部分があると思う。

S：共通する部分とは？

川崎さん：差別されたくない、次代に負の遺産を残させたくないという点。

こうして川崎さんの講義中も質問が入り、差別への関心が塾生にも広がっていく気配でした。



2時限：部落出身者としてのメッセージ

●スライドショー

温泉の機械室や温泉そのものが珍しく、塾生たちは休憩中ウキウキしていました。これまで川崎さんがフィールドを旅してきた、新潟水俣病の患者さんたち、鳥取・広島・箕面の各被差別地域、アメリカのセクシャル・マイノリティー、韓国の学生たちとの交流を通じ、「さまざまな地域の人たちが、私の父にあたり母になるのです」と、スライドショーを見せながら、語り終えました。

T2さん：こんな話は知らなかった。そんな話があることも知らなかった。開けてきたなあと思う（ちょっと感動の面持ちでした）。全国あっちこっちにこんな話があるちゅうことやが、初めて聞いた。

●制作

「それぞれ、今までに印象に残った人、大切な人、恩のある人などの顔を描いてください」。川崎さんは、皆にこれまで一番記憶に残っている人を絵で描いてほしいと注文をつけました。「絵が描けたら一人ひとり、

その絵が誰なのかを解説し、思い出をしゃべってください」。ということで、「絵は描けん」「思いだされへん」「そんなんいてへん」とか言いながら、最後は全員が、一人ひとり解説をしました。絵のかけない人は文章で、どちらも書かない人はおしゃべりでやりましたが、ほとんどの人は絵を描いていました。



5月16日（土）の予定

- テーマ：男のもて方女のもて方
- 講師：Mrアマゾン先生
- 場所：三星温泉交流室＝楽塾
- 時間：6時30分～9時30分

人気もんMrアマゾン先生の授業は、今回は、私たち男どもが願望する異性への憧れを、大胆に解析していこうとするテーマで迫ります。男がモテルには女性への尊敬が第一だと思うのですが、さてそれだけか。そこはMrアマゾン先生の底力を注視してみましょう！

お風呂に入れます

お風呂を希望の方は最低用具を持参してください。ただし温泉にもミニセットで販売はしています。入浴割引券を楽塾で購入しています。楽塾に一式を置いてもらってもいいですよ。

おまけ

前山僧侶が、ふるさとのおいしいお米（黒酢製法：コシヒカリ）を土産に持参してくださりました。今回参加した塾生で山分けし、各自持ち帰りました。ごちそうさまです。



09年度楽塾授業参観

第7回目の授業が終了しました。

最近では梅雨の前哨を思わせる雨がよく降ります。桜前線も例年より早かったので、入梅も近いと想像しています。入梅の季節になくてもならない風景は田植えですが、今年も奈良市大柳生で水田作業を行うことになりました。夜はホタルの乱舞を楽しみます（さてホタル出現のタイミングが合うかどうか）。時間があれば柳生散策もしてみたいと考えています。塾生・応援団の皆さん！ご一緒にませんか。

- 日 時：6月20日（土）～21日（日）●宿泊地：奈良市野外教育センター
- 予 算：約6000円（宿泊・食事・交通費込み）

次回に詳細をお知らせします。

09年5月18日 塾長

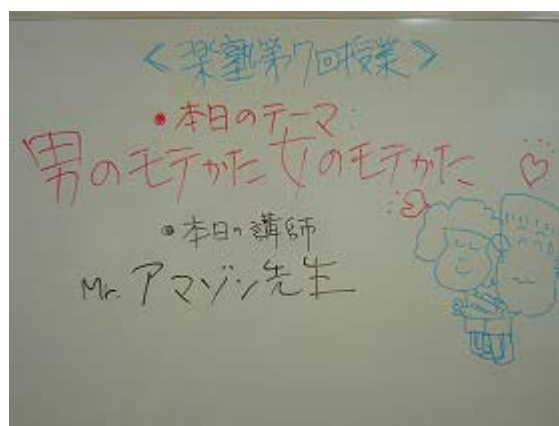
5月16日（土）の授業

- テーマ：男のもて方女のもて方
- 講 師：Mrアマゾン先生
- 場 所：三星温泉交流室＝楽塾
- 時 間：6時30分～10時00分
- 参加者：塾生10名、スタッフ2名、講師1名（総数13名）。

はじめに

恋はいつもトキめきます。優しい気持ちで相手のことを考えたり、時には妄想が自分の恋をあらぬ方向に導いてくれたり、果てはストーカーになったりして（あかんがな）。

恋はフィーリングだと思うのですが、好きなだけで成就するわけではないのも恋なんですね。「恋はかけひき」ともいわれます。恋にも技術が必要らしい。塾生諸君の中には「いまさら恋なんて」と興味のなさを強調する人たちがいます。また僕のような恋下手の人たちもいます。数ヶ月前、恋愛の達人Mrアマゾン先生にこのプランを相談し、先生も大いに興味を持って本日の授業作成にこぎつけてくれました。アマゾン先生ありがとう。



1時限：恋愛のKASH

「いつまでも活動的で若く見える人は、いつも恋をしている人です。年齢に関わらず、恋は人を若く元気にします」、「恋心をなくすと老化していきます」。アマゾン先生は医学的な実証を引用しながら、「基本的に恋のKASHは男女ともほとんど同じ」ともいいます。このように恋の大切さを説きながらスタートしました。

1. 今日の目標。
 - ・モテるとはどういうことかを考える
 - ・モテるためのスキルについて知る
 - ・モテるために自分が出来ることを考える
2. モテるということ。
 - ・恋愛の相手としてもらえる
 - ・相手方から積極的に好きになってもらえる
 - ・より多くの人に好かれる

H君は一生懸命メモにかかりっきりです。なるほど情熱は必要の母である！そしていよいよ恋を成就させるキー捜しに進みます。

3. 成功のための4つの鍵。

K = KNOWLEDGE…知識 (いろいろなことを幅広く知ること)

A = ATTITUDE…態度 (大柄な態度は成功しない)

S = SKILL……………スキル (相手のことを知ることがスキル)

H = HABIT……………習慣 (日ごろからかっこよくする習慣をつけておく)

ということで、この「4つのキー」を縦軸に、その「中身」と「目標」を横軸にする「恋愛KASHシート」が配られました。そしてそれをテキストに、塾生が考えるKASHについてそれぞれに聞いてみました。



恋愛KASHシート		
	中身	目標
K 知識		
A 態度		
S スキル		
H 習慣		

恋に望む態度 (A) について多くの意見が出ました

聞き上手が大切 (I君) / さわやか、明るいなど好感の持たれる笑顔 (T1君) / 相手を尊敬する態度 (S) / 強さ・頼りがいのある態度 (H君) / ほめ上手 (Oさん) / 控えめ (M1さん) / 相手を理解する (H君) などなど

恋のスキル (S) について

ギャップをつくる。つまり意外性をつくって自分を特化させる (T2君) / サプライズ。相手に何かを上げたりして驚かせること (Gさん) など。

恋の習慣 (H) とは

身なりをこぎれいにしておく (K君) / サプライズを習慣にすること (O) さん

K (知識) についての意見は少ないようでしたが、塾生諸君は、恋のKASHのツボを把握していました。このあと恋愛作法に入る前、仕事のKASHを考えてみようとして先生は「仕事が上手なら恋も上手」ということで、お客さんへの配慮 (どちらかといえば先生が担当する営業職を中心に) について話しました。

こうして本格的恋愛 (?) のKASHに入っていきます。要約すると、

K (知識) は、よりよい恋愛が出来るよう、あらゆることに多くの知識を持つことが大切といえます。この

際「相手の趣味を知ること」とはGさんの発言でした。

A (態度) については、異性に好かれる態度を心がけること。例えば優しさ、暖かさ、誠実、マメさ、勇気がある、包容力がある、積極的、前向きなどの行動が必要だということです。「全部持っているはずやったけどあかんかった」とは前山僧侶さんの述懐。←前山さんそれは誤解というものです！

S (スキル) は、より短時間で相手の関心を引く腕を磨き、相手がデートをしてみたいくなる話法を身につける、ということですが…さていかがなものか？ H君は「お金が必要」と強調していましたが。恋愛の具体的スキルとは笑顔であり、相手の話を聞くことであり、ほめること、初対面の会話で共通の話題を見つけることであり、雰囲気を読むことであるといえます（さて難しくなってきたぞ）。M2君は「女の人と話をすることが出来なくなっている」と発言して笑いを取っていました。

H (習慣) では、異性の前でだけ無理をして演じることをしないような習慣を身に着ける。その具体性とは笑顔を絶やささない、挨拶をする、清潔な身だしなみ、人と楽しく話す、異性の知人や友人とも日常的に話すようにする、こまめに連絡をするようにしていく、などなどたくさんのマニュアルを覚えておかなければなりません、要は相手（人）への配慮を大切にすることでしょうね。



男の会話術

いよいよ実践ポイントに入ります。

●男の会話術実践ポイント1

コミュニケーションの基本は①初対面は相手の素性を知る時間である。②基本的に女性は話したがりの生きものです。③女性は「態度+言葉」があって初めて実感する。

しかし「たまにはモノがほしい。つまりカタチがほしい」という女性（Oさん）からの発言もありました。ボソボソとした不明瞭な言葉、眉間にしわを寄せた表情、威圧感を与えること、などは男の会話術としてはNGだということです。気をつけましょう。

●男の会話術実践ポイント2

上手な質問方法を覚えること、相手のことを理解しようと本心から思って質問する、相手が話したいことを聞く（趣味など）、YES or NOで答えられる簡単な質問を想定する、相手の言葉を否定しない、伝えたい時はお願いや提案型にする、などなどと続きます。

●男の会話術実践ポイント3

本当のほめ言葉を覚えることが大切、だそうです。

2時限：実践あるいはシミュレーション

後半は、先生が作成した初デートを想定したシナリオをテキストに、2人1組になりデート中の会話をシミュ

レーションしてみました。ほとんどが男性同士のペアだったので、気持ち悪いとか、恥ずかしいとか言いながらも塾生たちは仮想デートに興味をひきつけられていました。さあ、果たして恋愛マニュアルがそれぞれの塾生たちに効果的に現れてくるのか否か。結局は、個人個人のパーソナリティーに委ねられていくのでしょうか。即席の恋もありかと思いますが、僕はじっくり時間をかけ熟成させていく方が楽しみ多く、相手を理解するためにも大切だとは思うのですけれど。

それにしてもさすがMrアマゾン先生。いつもながらのエンターテイメントぶりに、みんなは<恋愛塾>に浸っていました。でも恋は2人だけのもの。2人で作り上げるオリジナリティーが必要だとも感じました。今後「男のもて方女のもて方2」を企画したいと考えています。先生もやりますと言ってくれています。



おまけ

この日、みんなでいただいた給食のお米は、前山僧侶寄贈の「こしひかり」でした。日ごろ安いお米を食しているの、たいそうおいしかったです。惣菜もこの日は不足なくいただきました。それから塾生T3さんから寄付金をいただきました。日ごろ節約生活を心がけていながら、楽塾に過大な寄付は心苦しい限りでしたが、是非使ってほしいとの強い要請もあり頂きました。T3さん本当にありがとう！

5月23日(土)の予定

- テーマ：明日はデート
- 講師：森田智保さん(りぷら店長) 山口明香さん(アーティスト)
- 場所：中古衣料りぷら
- 時間：6時30分～10時00分(給食タイムを含む)

Mrアマゾン先生の授業、「男のもて方女のもて方」で恋愛基礎編を学んだあとは、いよいよ「明日はデート」と想定し、おなじみ『中古衣料店りぷら』で、デートのシミュレーションをしてみたいと考えました。魅力

的な『りぷら』スタッフたちが腕によりをかけたデート構想と勝負服(?)の選択を存分に楽しんでください。女性応援団のご協力が必要です。出来ればご参加をお願いいたします。

お風呂もどうぞ

入浴をご希望の方は最低用具を持参してください。ただし温泉にもミニセットで販売はしています。入浴割引券を楽塾で用意しています。ご利用ください。楽塾にお風呂道具を置いてもらってもいいですよ。

*第5週目(5月30日)の楽塾はお休みです。したがって6月の授業は6日(土)からとなります。お間違えのないようよろしくお願いします。

第8回目の授業が終了しました。

ご冥福をお祈りいたします

修了記念旅行や楽塾に行きたいと言っていた塾生Fさんが22日亡くなりました。古川さんは、昨年に実施した楽塾主催の「合同慰霊祭」に参加後体調を崩し、入退院を繰り返していました。彼は僕が支援センター在籍時からの寮生だったので、なんとか回復をと願っていたのですが、帰らぬ人となってしまいました。大きな体と、困っている人を見ると何がなんでも見過ごせない行動が印象的な人でした。

さよなら古川さん。

09年5月25日 塾長

5月23日（土）の授業

- テーマ：明日はデート
- 講師：森田智保さん（りぷら店長）・山口明香さん（アーティスト）
- 場所：中古衣料りぷら
- 時間：6時30分～10時00分（給食タイムを含む）
- 参加者：塾生6名、スタッフ2名、講師2名（総数11名）。

はじめに

昨年暮れ以来2度目の「中古衣料店りぷら」で楽塾授業を開催しました。先週「男のもて方女のもて方」で、“恋の基礎編”を学んだので、つづいて「明日はデート」というシミュレーションを考え、店長の森田さん、アーティストとして活躍する山口さんに協力をお願いしました。塾生が衣料店での授業をこんなに興味深く感じてくれたのは、僕にとって大層誇らしく感じた一夜でした。

女性講師2人に女性塾生2人。女性たちのフォローで店内は熱くウキウキムードに満たされていました。美しきフォロワーたちありがとう！



1時限：デート計画の発表 —誰とどこへ—

「今週のテーマは『明日はデート』なので、そのためのおしゃれ服、勝負服を考えてみたいと思います」「一応今日のテーマを想定してもらっているので、今夜は先ずそのポイントを聞かせてください。それから前回以降、服装に対して変化してきたことがあれば聞かせてください」。森田さん、山口さん両者の司会で第8回授業が始まりました。

○さん：私のポイントは3点あります。1点目は病院などに行く機会があるので、注射などをする時、腕がすぐに見せられる服が必要です。第2点は体が冷えない服装が大切。3点目は男受けのする服（これは具体的でいい！）

T 1 さん：僕は 365 日おんなじ格好している。(質問「洗濯はしてるんか?」) もちろん洗濯はしてる! つまり同じような服しか着んということや。(「髪型も同じ?」というヤジ→T 1 さんは坊主頭→T 1 さん笑い)。

K 君：僕はジーンズで決めてみました。

T 2 君：仕事あとの清潔感を基本にした。五木寛之を目標にしている。

I 君：ここへ来てから(前の授業のこと) 黒い服を中心に着ている。上着を選ぶ時は女性ものを着ることが多くなった。(質問「今着てるものもそうなん?」)。これも女性モン(と言って服をみんなに見せる)。

事務局長：(前回) チャイナドレスで癖になった。今回はいつもとおりで考えている。

M さん：仕事着は全部ユニクロの製品。プライベートではパパスを切ることが多い。

塾長：おなか周りが気になってきて、T シャツに変わり最近買う服はシャツが重点的になってきた。シャツなら腹回りを多少カバーできるからね。やはり格好を気にしてるね。

M 5 さん：着た服を自分なりにアレンジして着るように心がけている。

森田・山口さん：それでは「明日はデート」というテーマを妄想していただきます。「誰」とデートするのか、「何処」に行くのかをイメージしてやっていきましょう。

T 2 君：木津市場から大国町、心斎橋を通過して野崎観音か石切さん辺りに行き、法隆寺には知人に会いに行つて(「そんなよおけ歩き回って彼女怒るで」というヤジ)、信貴山に行つて働いていた旅館を訪ねたい(「話しの中に彼女の姿が見えへん」というヤジ)。彼女はその旅館の仲居で働いとったんや。夜は山犬の遠吠えを聞いて一緒に寝るんや。

M さん：観音さんとデートします。京阪三条から石山寺へ行きます。観音さんなど秘仏公開の時期なので、日ごろ見ることが出来ない仏さんを見に行くことができます。カメラをやり始めたので、スタンプラリーで撮影もしてきたい。

K 君：僕の妄想は、夜行バスで東京府中競馬場でデートをすること。5 人ぐらいの女性候補者が僕を待っている(「それ牝馬やろ」というヤジ)。そうや、候補の牝馬 5 頭ぐらいがいるので迷っている。

O さん：ニューヨークにいます。デート相手は巨人の小笠原がいい。松井(ゴジラ)もいいな。彼らに野球解説してもらおう。ハーレムでストリートファッションを買って野球場に行くのがイメージ。

T 1 さん：若い時代のオードリー・ヘップバーンが好きで、ローマに旅行してみたい。高峰三枝子も大好きやった。彼女となら最後まで一緒に部屋で過ごしたい。

I 君：関空からヘリをチャーターし府中まで行く。デートの女の子は競馬を知っている方がいい。

妄想と夢と、或いは何でもありのイメージが飛び交って、ハチャメチャなデート計画が作り上げられていきました。この計画を土台にして、後半はそれぞれの「明日はデート」服装計画が発表されることになります。



2時限：デートファッション —その時どんな服で—

「みんなが思い描くデートスタイルを、りぷらの服を試着してもらいながら、最後に決まった服でファッション・ショーをしてもらいます。今回のポイントとなるコンセプトを踏まえて、自分のファッションをお披露目ください」。講師の一言で、全員がりぷら店内をうごめき始めました。イメージが確実な人は、そのイメージどおりの服装に近づいていきます。迷っている人も右往左往していますが、徐々に形が整っていくのです。

おかしかったのは、私たちが服を探している間に、子連れのお客さんが入ってきて、買い物を始めたことでした。そのうち何だか事情が変と察したお客さんでしたが、“君子危うきに近寄らず”の体で、無事買い物も済んで帰っていきました。

それではショー・マスト・ゴー・オン！われらがファッション・ショーの始まりです。講師がスタート宣言。「まずは花道までフリースタイルで、自分のファッションをアピールします。そのあと各自のファッション・コンセプトを解説してください」。

Mさん：プーさん：野球帽を斜めにかぶり、Tシャツの上に牛がデザインされた紺の半そでシャツを羽織り、ネクタイを半分絞った感じで合掌しながら登場する。

コメント「牛に引かれて善光寺参りがコンセプト。プーさんのTシャツは日ごろから僕はプーさんと呼ばれているもんでこのファッション」

T1さん：薄いベージュの半そでと黒いズボンで登場。なかなかすきっとしたスタイル。花道で2度ほどクルッと回転しながら自らのファッションをアピールした。

コメント「僕はシンプルなのが好きなので、このファッションを選びました」

T2君：赤い帽子に黒の背広を着て登場します。背広の上にシャツの襟を見せています。

コメント「太陽がいっぱい」のイメージやね。

I君：全体が黒のイメージ。背広の下はネットのシャツ。ちょっと胸をはだけてエロっぽい。パンツも黒。

コメント「黒ネットの服で決める」（「忍者みたいやな」というヤジ）

Oさん：ハンチングをかぶり、赤を中心とした色柄とデザインで統一された半そでTシャツ、黒の縞パンツ。片手に赤いバッグ。そして粋なベルトを締めて軽快に登場。

コメント「点滴のあとがあるけど、今日はコントラストのあるのを着ようと思った。帽子はいろいろ隠せるのでいいよね。

O2さん：グリーン of 鮮やかなTシャツにブルーの長袖Tシャツの重ね着。スカートは白地にグリーンで描かれたアイスランドのイラスト地図。それに黄色のバッグ。色合いをコーディネートして登場した。

コメント「日ごろスカートをはかないので、可愛いスカートを発見してはいてみた。胴回りがちょっときついです」

K君：真っ黒の地にシャークがデザインされているTシャツ。このシャークのキャラクターにはいくつかの色が使われている。それにジーンズ。

コメント「明日の勝負服で、明日の大穴は緑」といい、シャークの緑部分を強調。

事務局長：帽子をかぶり、薄いグレーのジャケットにTシャツ。それにベージュのモダンなデザインをしたネクタイをくくりつけ、半ズボンで登場。ちょっとパンクな少年風。

コメント「ロック・フェスにいける格好。やんちゃな小僧をイメージしました」。なるほどハイローズやね。

塾長：黄色の地にイラストがデザインされたTシャツの上に、派手なローズ色





このように大賑わいを余韻にショーは終了しました。このあとは、みんなでそれぞれの印象を話しあい、最後に山口さん、森田さんからの感想を聞き三星温泉での給食に臨みました。

山口さん：皆さんの妄想が大変面白かったと思います。前回よりも一歩進んだ会になり興味深かったです。

森田さん：たとえば赤い色を使うと自分を高揚させ刺激的になるが、冷静になるなら青色を使うと落ち着いた気持ちになると思う。今回のショーの中には、そんなそれぞれのポイントが入っていて面白かった。

6月6日（土）の予定

- テーマ：ホテルマンになってわかったこと
- 講師：野本哲平さん（ホテルプラザ神戸シニアデレクター）
- 場所：三星温泉地下交流室「楽塾」
- 時間：6時30分～9時30分

旅人のひとときを安らぎ場としてホテル運営にたずさわり、長年多くのお客さんへのサービスに努めてきた野本さんを楽塾に再度お招きしました。僕ともずいぶん昔からのおつきあいですが、誠実さとダンディズムにはかないません。ホテルの人間模様を話していただく予定です。

お風呂に入れます

お風呂を希望の方は最低用具を持参してください。ただし温泉にもミニセットで販売しています。楽塾にお風呂用具一式を置いてもらってもいいですよ。入浴割引券を楽塾で購入しています。ご利用ください。

第9回目の授業が終了しました。

いつも行くスーパーの店先には、先日まで商標の異なるイチゴが場所を競いあって並んでいました。でも今日のお店は違いました。ぶどうや巨峰、それにビワやさくらんぼがパックされ入荷していてイチゴの姿は見えません。イチゴが季節のふり分けによって店頭から撤退していくような、そんな思いに浸りました。ハウスや促成栽培により、いつでも季節の食品を食べることが可能な時代ですが、店頭前線を見る限り、うつり行く季節を発見できることがわかりました。いよいよ若夏です。

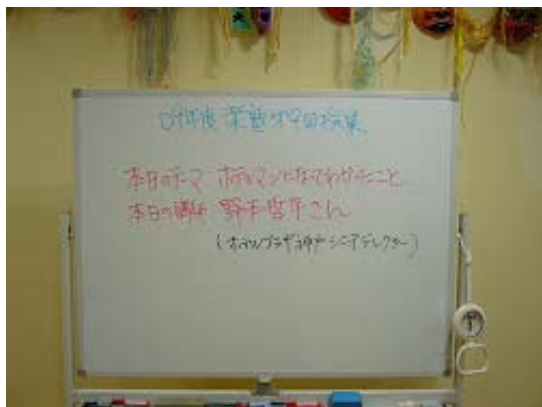
09年6月7日 塾長

6月6日（土）の授業

- テーマ：ホテルマンになってわかったこと
- 講師：野本哲平さん（ホテルプラザ神戸シニアデレクター）
- 場所：三星温泉B1交流室「楽塾」
- 時間：6時30分～10時00分（給食タイムを含む）

<はじめに>

先週半ば、授業打ち合わせのため、電話で野本さんと話をしました。いつもの元気な声がややくもりがちに感じたので「健康はいかが？」と尋ねると「大丈夫です」と返答があったので安心していましたが、土曜日の授業のなかで「実は体調を崩していました」との話がありました。ホテルマンにとっては、見知らぬ顧客（もちろんお馴染みさんも含め）を相手に、いわば毎日が初舞台のような作業現場を想像します。中には金さえ出せばというような傍若無人や無神経な連中も跋扈（ばっこ）し、緊張感やストレスも相当ではと考えるのです。そんな現場を持つ野本さんは、しかし自然体です。サービスを唯一の宝とし、ホテルの日常を語っていただきました。



<1時限：「おてんとう様」という思想>

「おてんとう様に申しわけない」という言葉は、太陽を浴びて健康な一日を送れるようにするという意味で、人はいつも太陽に見られているという素晴らしい思想だといえます。だからおてんとう様に背を向け人生を送る人は、ウラ街道を歩むことになるのだそうです（ちょっとドッキリ）。

「さようなら」という意味も同様で、「左様であるならば安心をした」ということで、安心を確かめ合う挨拶ではないかという、これらはかみしめたい言葉だと話します。

野本さんは「ホテルマン」という言葉を引用し、「〇〇マン」と称される名前のついた職業が、この社会にどれくらいあるだろうと塾生に質問しました。

〇〇マン

ホテルマン・ポリスマン・ガードマン・サンドイッチマン・カメラマン・サラリーマン……。だんだん興に乗ってきてヤッターマン・スーパーマン・アンパンマン・ウルトラマンとフィクションの世界に侵入していきます。

野本さんの論では「〇〇マン」というように、マンと名がつく職業は人助けをする仕事だといえます。なるほど、フィクションの主人公たちも皆身体を張って（誰に頼まれるでもなく）“世のため人のため”に動き回ります。授業後ちょっと調べてみたのですがスタントマン、スポーツマン・セールスマン、ドアマン、ビジネスマン、ボイラーマン、マラソンマン、ショーマン、ガンマンなどなど、全て自ら汗をかき奉仕の精神で働いているというイメージにつながる職業ばかりなんですね。

野本さんの実践

- 有名なコンノートホテルのマネージャーから、「早朝出勤しスタッフの元気か否かの顔色を見て対応することを試みている」ということを直接聞いたことから、自身従業員を家族とみなし、民宿の感覚で仕事を始めた。自殺願望の青年から「ホテルマンが自分のような男に声をかけてくれ、自殺をとどまった」と話してくれたことで、一人のお客の命を救うこともあって嬉しかった。
- 脳はどんな時でも答えを求めている。唯一「ありがとう」という言葉は答えを求めない言葉である。常に「ありがとう」という言葉を言えるようにしておきたい。
- ホテルマンになった当初、顧客からチップが入る経験をした。新鮮だったが段々それが当たり前になり、浅ましい気持ちになってきた。当時は給料以上のチップ収入があり身を持ち崩した人たちもいた。過分にチップをもらった時は、同僚や後輩たちに配分し、翌朝、その顧客にそれぞれからお礼を言わせて、利益を自分だけのものにしなかったことが後々よかった。そんな実践体験を語ってくれたのです。

なぜ楽塾に來ていますか？

ここで野本さんは質問します。「皆さんはいつも楽しそうに楽塾にいられていますが、なぜ楽塾に來るのですか」。この質問は、実はこれまで塾生に僕が一番聞きたかったことなんですが、野本さん、良くぞ聞いてくれました！

T1君

いろいろな講師の人たちが先生に來られるので楽しいから。

Oさん

毎回授業にバラエティーがあっておもしろい。

Mさん

さまざまな人とつながりを持ちたいと思っている。

K君

一人暮らしで近所に友もない。仕事場での同僚はいるが、ここをとっても楽しみにしている。

I君

暇つぶしと遊びと知的欲求。

M君

一人でいるよりみんなといるのが楽しい。

T2さん

塾長とのかかわりが楽しいので来ている（ありがと→塾長）。

H君

時間つぶしと学びたいことを目的で。

Tさん

何回か来て見て、やっとまじめな授業に出会えてよかった（どんな授業や）。

野本さんは「小にして学ばば壮にして為すことあり、壮にして学ばば老いず、老にして学ばば死して朽ちず」という論語を引用し、塾生諸君はこの言葉にぴったりの生活を送られている、とほめていただき1時限を終了しました。



<2時限：私たちの社会>

「話題になったインフルエンザ発症当時、ホテルはキャンセルの連続で、とくに神戸はさながら感染源と思われていて、市内はマスクマンばかりだった。これは不気味だった。電車に乗っても、ターミナルに出てもマスクばかり。情報操作の怖さ、滑稽ささえ感じた。マスクに過大な安心感を持つこと自体、社会のゆがんだ依存性を感じる事態だった。マスクをしていないと白眼視される怖さを覚えたと同時に、異種、異文化への排除にもつながる危険を感じた」といいます。

野本さんのいう経験は僕も感じていて同感です。事大主義(つまりは“寄らば大樹の陰”)というやつでして、私たちの社会は、保身と疑心暗鬼と悪意がのさばりつつあり、そのストレスが、腐臭ただよう闇のウジ虫のごときネットメディアなどに具現化していくのですね。

うじ虫からみえる社会？！

その“うじ虫”ですが、野本さんの話は50年前のトイレ事情に移ります。

「その頃の各家庭はまだボットン便所で、汲取り屋さんが家庭の汲取り口から排泄物を肥え桶に入れ、それを運んで運搬車に取り付けた肥料槽に集約するのです。だから便所には常にウジ虫が湧いていました。しかも、それが田畑の天然肥料として使われていたため、堆肥の中には回虫や寄生虫が繁殖し、商品化した際、それらの野菜や果物を食する際に回虫・寄生虫を飲み込んでしまうことがあるわけです。当時はそんな寄生

虫を体内に“養っている人”たちが多かったのですが、最近の研究では、一定の回虫・寄生虫を体内に取り込むことで、アレルギーや悪質な感染症になりにくいということがわかってきています。当時おそらくアレルギーなどは少なかったんですね。その後、衛生観念の普及で水洗便所になり、無駄、無要のものが排除され無菌・潔癖状態にされていく。大切なことを論議していかなければならない時だと思います。

「資本主義とは体のいい言葉だが、自己中心主義と変わらない思想で、環境を台無しにし続けてきた。土に返し自然に感謝すること、おてんとう様の存在に気づくことを大事な思想としたい」。

「今の親たちは泥遊びを拒否し、危険な遊びと判断して冒険をさせない。泥遊びはいろいろな雑菌を取り込みながら、抗体作りに役立っていたと考えられる。だから親の生活スタイル自体が問題だと思います。動物たちは天敵から身を守ろうとします。人だけが天敵を持ちません。おてんとう様に感謝し人本来のありようを考えましょう」。

野本さんは、これまで人が失ってきたことを再考する時期に来ているのではないかと問いかけていました。



6月13日(土)の予定

- テーマ：極楽浄土 ー吉野・熊野からー
- 講師：前山村雄さん(僧侶)
- 場所：三星温泉B1交流室「楽塾」
- 時間：6時30分～9時30分

人間の天敵は自分だ。僕は野本さんの話をそのように結論してしまいました。野本さん！体調の悪い時にご苦労様でした。感謝いたします。

Happy Birthday!!

楽しい給食後、4月生まれのI君、5月生まれのM君に楽塾から少し遅めの誕生日プレゼントを渡しました。

誕生日おめでとう I 君。

誕生日おめでとう M 君。

今週の講師はおなじみの前山僧侶です。野本さんが過去に勤務していたホテルプラザ大阪に、僧侶も多少の関わりがあったため、授業終了後、大いに盛り上がっていたお二人でした。いつも現地から送られてくるおいしい「こしひかり」をご寄付してもらい、給食が豊かになりました。自らの人生と心の問題を重ねながら話してくれる予定です。お楽しみに。

●現在計画中…近大生の特別企画授業

塾生常連の近畿大学生山崎・本田両君が秋以降、授業を担ってくれることになりました。内容の一部を聞いていますが個人情報(?)であるため、ここでの開示はやめておきます。秋まで楽しみに待ちましょう。山崎君・本田君期待してますよ～!

お風呂に入れます

お風呂を希望の方は最低用具を持参してください。ただし温泉にもミニセットで販売しています。楽塾にお風呂用具一式を置いてもらってもいいですよ。入浴割引券を楽塾で購入しています。ご利用ください。

第10回目の授業が終了しました。

科学から空想へ

僕のカンは見事にはずれ、梅雨は例年を10日以上も遅れて北上している模様です。天気予報の官式(あるいは科学的?)ステイトメントは、有無を言わさない正義を感じます。僕にとって、今年の入梅以前の降雨の多さは、すでに梅雨入りしていたのだと今も強く思っているのです。

「日本のマスメディアは1チャンネルしかない」とは楽塾講師Wアネゴの至言ですが、まさに横並び、統制され好き国民としては、多様で自由なチャンネルは不得手なのです。僕自身、毎日飽くなき同じ戯れごとを垂れ流す「数だけ多チャンネルメディア」からは遠く離れて久しくなりますが、万国のロードー者諸君!“科学から空想へ”、“常識から妄想へ”が我らの合言葉です。くれぐれも大きなものを信じてはなりません。自分のカンを信じましょう。

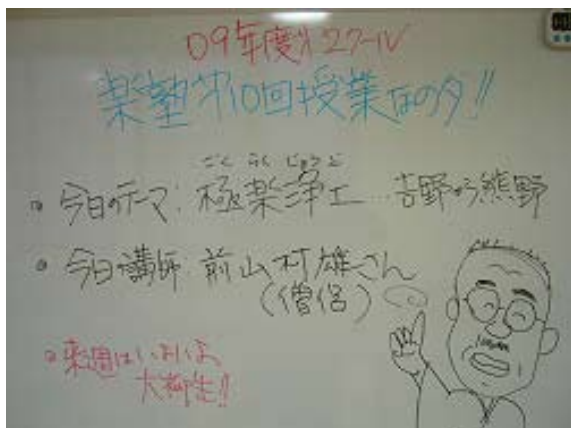
09年6月15日 塾長

6月13日(土)の授業

- テーマ：極楽浄土 —吉野・熊野から—
- 講師：前山村雄さん(僧侶)
- 場所：三星温泉 B1 交流室=楽塾
- 時間：6時30分～9時50分
- 参加者：塾生12名、スタッフ2名、講師1名(総数15名)

<はじめに>

前山さんとはずいぶん前からのおつきあいです。とくに、僕が西成の街に来てからは公私ともどもお世話になっている坊さんでして、主として「楽塾」授業の中核となる<こころの回復>のテーマ講座を受け持ってくれています。前山さんには、本年2月に実施した熊野三山への修了旅行を背景とし、なぜ熊野信仰なのか、その歴史とは何なのか、そして「再生の地」としての熊野を語っていただきました。但し、時間の関係上、吉野の話は出来ずに終わりました。次の機会に予定しています。



<1時限：神話の世界>

記紀

「みんなでいった修了旅行でおなじみの熊野を中心に、自分たちの先祖がどのように神仏に手を合わせてきたのかを辿ってみたいと思います。とくに熊野は<再生から復活>の聖地という観点で話していきたいと思います」。前山さんは、塾生諸君たちのまだ記憶に新しい熊野詣での歴史的意義について、記紀=「日本

書紀」「古事記」を引用しながら以下の解説をしてくれます。

「イザナキは、死んだ妻イザナミを追って黄泉の国へと向かう。その後黄泉の穢れを払うため日向の国で禊を行い、そこでアマテラス、スサノオらを生む。母に会いたいスサノオはイザナギに勘当され、根の堅洲^{かたす}国（黄泉の国）大齋原（旧熊野本宮大社のこと。旅行では最初に参拝した場所であった）に向かう。その後、姉アマテラスとの諍いからスサノオの行状は荒れ狂い、アマテラスは天岩屋戸にこもってしまう。

熊野神の原型

熊野本宮大社の権現※はスサノオであり、仏心は阿弥陀仏。熊野速玉大社の権現は速玉^{はやたまのかみ}神で、仏心は薬師如来。熊野那智大社は夫須美^{むすびのかみ}神、仏心は千住観音である。

※仏や菩薩が衆生救済のために、種々の権（かり）の姿をとって現れること。権化とも言われ本地垂迹の思想。仏の化身が神の姿として現れる。熊野三山の権現は有名である。又熊野は3つの神が合流している。海洋の神、天上の神、黄泉の神である」。

これらはそれぞれが熊野の国をつかさどる全く違った神々ではなかったか。ヤマト王権を統一した国家が、融和政策として宗教の親和をはかっていったのではないかと、塾長は勝手に思っています。

熊野スピリッツ

このほか、「花山院的那智青岸渡寺から始まる霊場めぐりの発案は、熊野を宣伝するスタンプラリーの元祖のような存在であったし、フィクションとして架空の人物をでっち上げ、大蛇の化身と交わり、しかし地獄からも蘇り、永遠の照手姫と再会する熊野神話の主人公小栗判官の話は、当時の熊野観光アピールそのものである」という話は興味深かったです。つまりは人生の再生・回復のストーリーを、熊野というスピリッツゾーンを設定することで、人々の熊野に至る移動を可能にしたのですからね。

さて心霊スポットとしてのお話が挿入されました。「熊野から吉野にかけては地理的に一直線の距離にあり、このあたりは大きな自然の磁場があると考えられる。人間のDNAはらせんを描いており、電気が流れている。きっとこのエリアは人に反応を与える場所だと思う」という。「この辺りは身体がジンジンする、いわば霊気を感じる場所が多い。太古から（現在の人たちにはない）予知能力を鋭敏にする場所として、あるいは人間本来の力を貯える場所として讃えられていたところだと考える」と話していました。



<2時限；熊野は浄不浄を問わず>

再生と回復

「高野山は女人禁制の思想であるが、熊野は、古くから障害者や現在のハンセン病、不浄とされた女人の排除を一切しない場所として名高い。人の再生や回復を願う大きなより所となっていたに違いない」。

「新宮市内のゴトビキ岩のある神倉神社は、あの石段を登ってみて分ったようにかなりの急勾配だ。しかし、お灯まつりの時、氏子たちが松明を掲げて猛スピードで駆け下りて行く際も、それほど大きな事故を起こさないという。それは、あの石段が人間の降りていく歩幅にフィットしているためではないか。太古、海洋から夜の神倉神事を眺めたら、火が滝のように流れて見えたに違いない。火を介し人間の再生を信じるまつりであったのだろう」。

「熊野には火山がないのに温泉がたくさんある。どうしてなのか。実は熊野沖にはカルデラ(噴火口)があり、それが鉱泉となっている」

「高野街道などには空海の聖水伝説の祠が多い。それらは仏教振興のための啓発であり教宣活動(プロパガンダ)であったろう」。

よみがえりのイメージ

「さて、今の自分をよみがえらせるとすれば、皆さんは何をしたいと思いますか?」。ということで、もし自分が何か別物になりたいなら、それをみんなの前で発表してみようということになりました。

Kさん：親孝行をしたい。反省をこめて。

Iさん：今後こそまじめに、それから勉強したい。

Mさん：生まれ変わったら女になりたい。

川井：楽器を弾けるようになりたい。ギターがいいな。

T2さん：子どものままでいたい。

佐々木：このままでいい。人生の永い間に何回かの転機を迎えた経験があるが、そのたび新しい価値観を得ることが出来た。それが素晴らしい。

H2さん：(もう一度生まれ変わるなら)25歳までに結婚したい。

Oさん：ジンジンする場所を知りたい。男を惑わせたい。

Tさん：風邪のようにジョッキーか、モーターボートの選手になりたい。勝利者になりたい。

津島：友人を大切にしたい。物事をしっかり身に着けたい。

Sさん：好きなことをし続けたい。嫁さんは今のままでよい。

前山僧侶の感想は「風になりたいという話がすごくいい感性だと思いました。自分にないものを求めるということが突出している」。「なぜ熊野なのかを話してきました。霊的なスポットが数多くあるが、心の回復に役立つ場所であると思います」と話してくれました。

<寄付がいっぱい！>

久しぶりにSさんが来られました。奥さんが作ったおいなりさんを大量に持ってきてくれ、給食時、みんな頬ばりながら食べていました。ご馳走さんでしたSさん。Sさんは、以前「釜のブルース」を作詩しCDを持参されたのですが、この日、その曲を歌い作曲したライブハウス経営者の津島さんを連れてこられました。給食時、津島さんはギター演奏しながら、塾生の前で「釜のブルース」を歌ってくれました。津島さんご苦労様でした。それから講師の前山さん、デザートのパナナの差し入れサンキューでした。

この日は色々なご寄付があってリッチな気分で給食を楽しみました。



6月20日(土)～21日(日)の予定

- テーマ : 田植えに行こう!
- 講師 : 南垣内貞史さん(大柳生農場主)
- 場所 : 奈良市青少年野外活動センター
- 待合時間 : 12時00分
- 待合場所 : ビアン前
- 会費 : 6000円
- 参加者 : 現在、参加希望者は14名です。直前まで受付いたします

今週は、いよいよ大柳生での田植え作業を行ないます。雨天でも決行しますので、雨具や作業着の用意をお願いいたします。夜は夕食を作り、ホタルの観賞を予定しています(さてホタルは出現するか?)

第11回目の授業が終了しました。

<夏到来>

太陽が天球上で最も北に位置する日が夏至（げし）にあたります。北半球ではこの日に太陽の南中高度が最も高くなり、昼が最高に長く、夜が短くなるのが夏至の特徴です。入梅時期の6月21日または22日ごろで、この頃、太陽の恩恵が薄く、長い冬が続く北欧では白夜といわれ、さまざまなお祝いのお祭りが催されるそうです。

私たちは夏至の候、奈良へ田植えに行ってきました。予想に反し素晴らしいお天気に恵まれ、前々回の講師である野本さんのお話にもあった、お天道様のありがたさを実感してきました。夏至が過ぎれば本格的な夏が到来です。

09年6月22日 塾長

6月20日（土）～21日（日）の授業

- テーマ：田植えに行こう！
- 講師：南垣内貞史さん（大柳生農場主）
- 作業場所：南垣内さん農場
- 宿泊：奈良市青少年野外活動センター
- 集合時間：20日（土）12時00分
- 解散：21日（日）13:00
- 集合場所：ピアン前
- 会費：6000円
- 参加者：174名（塾長・事務局長含む）

<はじめに>

昨年6月28日、「楽塾」の開校直前イベントとして、奈良市大柳生町へ田植え体験をしに行きました。あれからちょうど1年になります。もともとは5年前、僕の小学校時代にお世話になった椋代先生を通じ、大柳生の南垣内（みなみがいと）さんの稲田を借りて実習を始めたのが最初でした。その頃から、一緒に田植え作業をしてきた元(株)ナイスの黒田さん、(株)ナイスの沖田さん家族がともに楽塾授業に参加してくれました。また本年6回目の講師としてお世話になった川崎那恵さん、そしてアマゾン先生もサンファちゃんを連れて参加してくれ大所帯、大賑わいの作業になりました。

南垣内さん、今年もありがとう！今度は草刈作業に行きます。



<1日目>

まずは田植えの作業を楽しみました

20日の12時ちょうどに西成を出発しました。田岡事務局長の車には食料品などの荷物を乗せK君が同乗。僕は8人乗りワゴン車を運転。2台の車は阪神高速湊町入口から第二阪奈を經由し、一路奈良市内へ進路をとります。大柳生に向かう道筋の木々は緑を増し、太陽の光に導かれた若葉たちが風にそよいでいました。見慣れた大柳生の里が眼前に広がってくると、川崎さんが「こんなところで住んでみた〜い!」と声を上げます。「青少年野外活動センター」には13時30分ぐらいに到着し、ここでアマゾン先生、黒田、沖田組と合流しました。

「青少年野外活動センター」は、これまで奈良市行政の直営でしたが、本年から指定管理者制度が導入され、大柳生でNPOを立ち上げた南垣内さんたちのグループが、センター経営をするという経緯があります。以前と比べ部屋や寝具類、風呂やトイレなどが気持ちよいほど美しくなり、現在整備進行中というエリアもあって、民間経営の意気込みを感じました。

センターに荷物を置いたあとは、南垣内さんの水田に全員直行します。300㎡の水田は増水していて、一部に雑草が繁茂していました。みんなで自己紹介をしたあと、南垣内さんは水田の水を抜きつつ、苗植え機で一部分田植えをします。そのあと全員が水田に入り植え付けを始めました（しかし子どもたちのほとんどは田植え作業を拒否し、人気はもう一つでした）。

たくさんの蛙たちが泥田の付近に生息していて、僕らが移動するたび、泥まみれの蛙たちがぴょんぴょん逃げ回る姿がユーモラスでした。作業する員数も一定確保できていたので植え付けはスムーズに進み、しかも以前より苗の並びが大変きれいなには感動しました。田植え作業とはいえ上手くなっているのですね。2時間そこそこで植え付け作業は完了し、疎水で汚れた手足を洗いに行きました。



続いてサツマイモの植え付けを完了しました

さて次なる計画は、水田から数十メートル下がった竹林前にある畑に集まり、サツマイモの植え付け作業です。去年はサツマイモの大豊作で、友人知人におすそ分けをして喜んでもらったのですが、今年の収穫祭にはどんな結果が出るのだろうか。

まずは6つの畝にそれぞれマルチシートを被せます。これは雑草などに栄養をとられずサツマイモのみの生長を促すために施すものです。苗床にシートを被せたあと、一定の間隔でマルチシートにカッターナイフで穴を開け、その部分にサツマイモの苗を植えていくのです。植え付け作業はすぐに終わってしまいました。実は南垣内さんがサツマイモを100苗準備してくれたのですが、その苗数が不足していたのです。だから苗床の半分は植え付けできず、後日南垣内さんが植え付けを約束してくれました。いつもと違い、ちょっと消化不良の結果になってしまいました。

喉の渇きをお茶でいやしながらか、畑を背景に記念撮影しセンターに帰館、ここで黒田さん一家は帰還しま

す。30分後には風呂が沸き作業の汗を流しあいました。さあ、風呂から上がり着替えをし、リフレッシュのあとは厨房で食事づくりが待っています。沖田さん一家ともお別れになりました。



夕食も全力投球で

今夜のメインメニューはカレーです。それにポテトサラダ、および焼きなすとウインナーソーセージに野菜、スープつきの豪華なディナーを予定しました。センターの厨房は広くて作業がしやすく道具類も潤沢にあるので、自然に料理の役割分担も決まり、スピーディーに作業が進みます。いつの間にかアマゾン先生がカレーのシェフとして登場していて、アマゾン流のカレーが出来上がっていきます。この間、塾生たちは試食の名のもとにつまみ食いをしたり、食いしん坊を怒られたりしていました。僕はポテトサラダを作ることにしました。すでに館外は真っ暗になっていて、他のグループがキャンプファイヤーを始め、歌声が聞こえ始めました。

まずは乾杯！という予定なのに、何人かはもう飲み始めたり食べ始めようとしていて、「こら、まだ食べたらかん！」と事務局長から怒られていました。カレーやご飯の量はたくさん作っていたので全員が食べ過ぎ状態になり、動くのが大儀になったほどでした。残った食料は朝食にと残しておきます。それにしてもアマゾンカレーはうまかった。ポテトサラダを川崎さんはおいしいと言ってくれました。



いよいよホタルを見にゆく

食後、白砂川に群生するホタルを観賞に行くことにしました。ちょうど20時になるころでしたが、それまで晴れていた空から小雨が降りはじめました。ホタルは河岸を中心に飛び交っていましたが、乱舞というには程遠い状態でした。それでもホタルを追っかけ捕まえて、みんなは感激していました。このツアーはホタルを見ることで、いつも豊かな気持ちを持って安らぐことが出来るのです。この夜も、多くの参加者が幸せな気分を味わえたことは間違いないと思います。

<2日目>

のんびり柳生を探索しました

前日に作業の全てを終了してしまい、2日目をフリーな柳生探索ツアーに切り替えました。アマゾン先生とはセンター玄関口で別れました。国道369号を柳生方面に走り、市営駐車場に車を置いて山を登り始めます。しかし途中でM君がリタイアし、彼を残し、上り坂を登りながら巨石が並ぶ天乃石立神社、そして柳生石舟斎が斬ったといわれている一刀石までの約1キロを歩きました。途中可憐なガクアジサイが林の中に咲いていたり、茶畑の緑がフレッシュでした。帰りはM君と合流し、芳徳寺の坂を登り、正木坂道場では少女剣士たちの発する気合を聞きながら下山をしたのです。途中「草もち」を買い車上でおいしくいただきました。

車が西成に到着したのは13時ごろでした。



6月27日(土)の授業予定

- テーマ : 「人生は紙芝居！」
- 講師 : 石橋友美さんと「紙芝居劇むすびの会」のみなさん
- 場所 : 三星温泉B1交流室=楽塾
- 日時 : 6月27日(土) 18:30～21:00

今週は、太子を拠点に紙芝居の活動を続ける、石橋友美さんと「紙芝居劇むすびの会」の皆さんに、自作紙芝居の公演と「人生は紙芝居」をテーマに語っていただくことになりました。様々な起伏や変化を体験してきた人たちが、紙芝居に至る人生をゆったり聞かせてくれる、興味深い授業となりそうです。

第12回目の授業が終了しました。

<寿命>

人生の終幕を死とするなら寿命とは何か。生のあらん限り生命を存続させうる力が寿命だとすると、1週間前に26歳で逝ってしまったAさんの寿命は、はなはだしく理不尽な死ではなかったか。そもそも彼女の自害は寿命といえるものだったのか。死の直前まで元気だと話していたAさんの生命を絶つ動機とは何だったのだろう。それをさかのぼる1ヶ月前、30歳のK君も、命を取りとめたものの寿命を操作しようとした。最近、道半ばにして寿命をあきらめてしまう若者たちの存在がたいへん気にかかる。

09年6月28日 塾長

6月27日(土)の授業

- テーマ：「人生は紙芝居！」
- 講師：石橋友美さんと「紙芝居劇むすびの会」のみなさん
- 場所：三星温泉B1交流室＝楽塾
- 日時：6月27日(土) 18:30～21:30
- 参加者：20名（塾長・事務局長含む）

<はじめに>

平均年齢が70歳以上というおじさんたちが、紙芝居活動を続けていると以前から聞いてはいましたが、本年3月末、「都市プラザ阿倍野」で催されたお花見会で、初めておじさんたちと会うことが出来ました。これまでの長い間、西成の町でさまざまな仕事や辛苦を経験してきた人生途上で、しかしあきらめることより楽しむことを選んだおじさんたちの紙芝居人生はきっと興味深いと思い、何よりも楽塾塾生たちの共感を呼ぶこと間違いなしと感じ、マネージャー石橋さんの理解のもと、今夜の授業につながりました。

「紙芝居劇むすび」のおじさんたちありがとう！ 石橋さんお世話になりました。



<1時限：ドキュメント「心をむすぶ紙芝居」の上映>

むすびとは

18時前には6名のむすびスタッフたちが、紙芝居や小道具を持ち到着しました。むすび応援団は3名で、総勢9名の陣容です。授業開始の前に、むすび代表の浅田さんが全員の自己紹介を取りまとめ、最後に、会のマネジメントを担う石橋さんが、紙芝居活動の経過を解説してくれました。以下簡単に記述します。

「おじさんたちのアシスタントをしている。魅力的なおじさんたちが語るユニークなアイデアを聞きながら、紙芝居活動を続けてきた。2005年、「ココルーム」がむすびプロジェクトを立ち上げた段階で私に依頼された経緯がある。2007年にはロンドンへ海外公演をしている。日常的には幼稚園や福祉施設などに幅広く活動を続けている」。



ドキュメント「心をむすぶ紙芝居」の上映

昨年12月に朝日放送が製作放映したレギュラー番組「生きる」から、むすびの日常をドキュメントした「心をむすぶ紙芝居」(約30分)を上映し、塾生たちに見てもらいました。「都市プラザ西成」の公演状況や、紙芝居+演劇的要素を取り込んで<紙芝居劇>と名付けたこと、運営費は支援者たちからの浄財であること、伝統的なお話からオリジナルなお話までなんでも挑戦することなどが語られていきます。

「自分たちで作って、自分たちで演じる。それが自分たちの一番やりやすいやり方だ」画面上の浅田さんは語っています。

むすび事務所での本所さんのショットです。「野宿歴8年くらいかな」「そんな短いな」などと野宿歴の多さを競う話や、「結婚は2,3年でやめた」「ほんまにやめたんか」、実は「逃げられた」という逸話が大笑いしてしまいます。

浅田さんの人生の艱難辛苦(かんなんしんく)を語る場面もいいです。仕事を失いカマで落ち込んでふさいでいたが、「みんなが楽しく生きる場所にしたい」と気持ちの転換をしたことが現在につながったというのです。すごく共感できました。

映画の終盤、オリジナルな作品のストーリーが出来上がるが、イラストレーターの婦木さんが現れず、竹澤さんが代役で絵を描くが技術的に悩んでしまう。そんな中、婦木さんが復帰し作品が仕上がっていく。しかし今度は竹澤さんが突然いなくなってしまう。スタッフが混乱する中、浅田さんは「紙芝居を続けていれば、またここへ帰ってくると信じて活動を続けている」と話し番組は終わります。

おしゃべりが会場をゆったり包み込んだ

浅田さん：子どものころ紙芝居をよく見た。自分自身、この歳になって紙芝居をすとか、公演に行くとかは思いもなかった。歳をとっても声を出し、笑って活動していると歳をとらない。

中井さん：紙芝居をやって元気になった。スタッフの中でも自分が一番うるさいほうだと思うが、元気を出せる源になっている。

塾生 Mさん：みんなが集まっているのが楽しそうだ。私も週1回ここ(楽塾)に来て楽しんでいる。

石橋さん：自分自身しんどい時があるが、おじさんたちの笑顔を見ていると元気になる。

菊田さん：大阪に来て有り金全部盗られてしまった。死に場所を探している時みんなに助けられ、むすびに来て最高です。

中田さん：40年間カマにいる。

塾生 Tさん：僕は西成を特別視していない。大阪の中のひとつの場所という感じやね。だから西成とかカマという特別な思いはない。

中井さん：西成は初めてきた頃はこわいところだと思ったが、今はやさしい町だと思う。りぶらの山口さんが質問しました。

山口さん：浅田さんはお話を作るとき、どんなことを考えてつくられるんですか？

浅田さん：オリジナルは、自分の記憶にある昔の友をキャラクターに、その人が今どうしているんだろうと考えながらつくります。「ぶんちゃんの冥土めぐり」(近作)はそんな風にしてつくりました。(なるほど妄想の大切さですね)。



<2時限：紙芝居「おむすびころり」の上演>

塾生が突然役者に！

後半は紙芝居劇「おむすびころりん」の顔見世狂言「はじまりはじまり～」です。舞台ではなにやらハーサルが行われているのですが、どうもスタッフが2名不足しているようです。そこで芸達者のTさんと楽塾最高齢者 T 2さんが舞台に乱入、にわか役者に早代わりしました。舞台上ではシナリオを囲んで、新米芸人2人にスタッフたちがあだこうだとアドバイスしています。「コロリコロリ…」と歌を合唱しながら。

むか～し むか～し

「おむすびころりん」のあらすじは昔々の枕から始まります。

おじいさんがおばあさんの作ったおむすびを大きな穴に落としてしまいます。穴の中から「コロリコロリ」と歌が聞こえてくるので、おじいさんは穴の中へ入っていくと、ネズミたちがモチをついて歌を歌っていたのです。(ねずみ役のT 1君がモチつきのパフォーマンスをするのですが、彼の芸が大いに受け観客は大喜びでした)。

おじいさんはネズミたちのもてなしで大満足でしたが、家で待つおばあさんが心配で帰ります。お土産にもらった大きな包みを開けると、たくさんの宝物が入っていて二人は感動し、一晩中ネズミの国の話をし続けました。

これを隣のおじいさんおばあさんが聞いていて、自分たちも宝物を頂こうと考えましたが、その悪事をネズミたちに見破られ、散々な目に合って何もいいことがなく退散してしまいました…とさ。



「街のおどけもの」

塾生2人の乱入が会場の余韻を引き継ぎながら、このあと、本所さんが昔ミナミでサンドイッチマンをしていたということで、当時鶴田浩二が歌った「街のサンドイッチマン」をみんなで合唱しました。本所さんがサンドイッチマンの格好でパフォーマンスしていたのがユーモラスで、しかし、僕はちょっぴり悲しい気分になりました。小さい頃、よく親父に連れられミナミに遊びましたが、たくさんのサンドイッチマンたちが街路にいて、その風景を思い出したからでした。「街のおどけもの」というフレーズが、人生の光と闇を端的に歌っていると子どもごろごろに感じていたのです。



このあと給食を頂きました。僕はお米の調合を間違え、皆さんに少しばかり固いご飯を食べさせてしまいました。開塾以来初めての事件でした。ごめんなさい。賑やかな給食時間の中で、今夜は誰もがコルい感覚を味わったことだと思います。石橋さんとは、これからも協働で何かを始めていこうという話も生まれました。

7月4日（土）の授業予定

- テーマ：「空手でメタボ追放3」
- 講師：藤原敦子さん（長橋空手サークル育勇会代表）
- 場所：長橋小学校2F教室（練習後、三星温泉B1交流室＝楽塾で風呂＆給食）
- 日時：7月4日（土） 19:00～21:00

いよいよ7月です。3ヶ月ぶりに空手の練習をします。真夏の格闘技で体内の汗を大いにふきだし、身体を燃焼させましょう。出来れば毎日でも練習をして、お腹をへこませたい人たちもいるようですが、空手練習後はお風呂に入り、おいしいご飯を楽しみます。楽塾応援団の女性にわか拳士も参加してください。

第 13 回目の授業が終了しました。

<近くでただひとつの本屋さん>

全行程 1 km もある西成区鶴見橋商店街ですが、本屋さんは小さな S 書店一軒だけ。僕は以前からそこで購入するようにしていて、しかし自分の欲しい本が店頭には並んでいることは先ずありません。そこで急がない限り、必要な書籍を予約し手に入れるようにしていました。先月末予約に行くと、今月一杯で廃業するといひます。地元の購買層が少なく、自分たちが読みたいと思う書籍が全く売れず、大きなお店に流れていくのだろうと主人は話していました。

昨日、梅田に出たついでに大規模店舗をはしごしてしまいました。欲しい本はすぐに見つかりました。しかし、あまりの書籍量の多さに、あれも欲しいこれも欲しいと目移りし購買欲を刺激します。買わずともいい商品までをも消費させる経済原理は書籍業界も同じです。地域で最後まで踏ん張っていた S 書店も、弱肉強食の渦にのみこまれてしまったようです。S 書店の撤退は、商店街の書店を遂に皆無にしてしまいました。

09 年 7 月 6 日 塾長

<はじめに>

体調を崩したり、用事の出来た塾生がお休みし、今回の授業の参加者は少し寂しい集まりでしたが、前半 S さんや、後半 O 2 さんの参加もありました。空手の授業は今回で 3 回目ですが、いつもの T 先生の配慮ある指導と、藤原先生や 3 人の息子さんたちの練習協力で、にぎやかな“実践”空手講座を体験できました。

7 月 4 日 (土) の授業

- テーマ：「空手でメタボ追放 3」
- 講師：藤原敦子さん（長橋空手サークル育勇会代表）
- 場所：長橋小学校 2 F 教室（練習後、三星温泉 B 1 交流室＝楽塾で風呂 & 給食）
- 日時：7 月 4 日 (土) 19:30～21:30
- 参加者：12 名（スタッフ 2 名含む）



<空手>

突き・フック・廻し蹴り

長橋小学校への途上、M君が体調を崩し見学をすることになりました。教室ではT先生、藤原先生とご子息3兄弟が待っててくれました。「こんばんは!」、今夜も大声で塾生たちの空手入門です。

まずは突きの練習から始まりました。そのあとはフック（側面突き）の練習です。フックは、正面からの攻撃を予測している相手に、意表をついて横から突きを入れる技です。この技は、正面に突きを入れるよりも少しばかり力が入ります。フック実践のため、先生にミットを持ってもらい全員でそのミットをめがけてフックを入れました。

突きの練習のあとは廻し蹴りです。左右の足で廻し蹴りの練習をします。利き脚はすんなり回りますが、反対の脚はやはり迫力が鈍いと実感しました。蹴りについても先生にバッグを持ってもらい、左右交互に廻し蹴りをおこないました。廻し蹴りが決まると「バシーン」と強烈な音が響いてなかなか気持ちが良いのです。T君が突然「どのくらいの高さで蹴りを入れたらよろしいか」とたずねます。T先生は「足が上がらないなら低い位置で回してもらって結構ですよ」と説明しています。



ワンツーパーチ

それぞれのメニューの合間に水分を補給しながら、次はミットにワンツーパーチを打つ練習です。左手で先生の左ミットを、右手で右ミットをワンツーパーチで狙います。これも同じく、まともにミットに当たると強烈な音が反響します。そんな時は「すごい」とみんなが大きく反応するのです。

最後は柔軟体操で仕上げです。両脚をできるだけ広げ、上体をゆっくり両足の中に入らずめていきそのまま静止します。これは股がすごく痛い。

練習後、T先生は実践空手のプロであり、試合などがあれば一度見せてほしいとお願いしておきました。約1時間の練習が終わり、又の練習の希望を伝え三星温泉=楽塾に戻りました。



お風呂で快適

このあと給食前にお風呂に入り、大汗をかいた身体を流したのでした。練習の爽快さに加え、温泉のたっぷりなお湯で包まれとても気持ちがよかったです。これなら毎日でも練習OKです！湯上り後の給食はすごく贅沢で、小川さんがたくさんのデザートを持参してくれました。ごちそうさま。



7月11日（土）の授業予定

- テーマ：ドーナツの秘密
- 講師：久保 晶（ひかる）さん（あたりきしゃりき店主）
- 場所：三星温泉B1交流室＝楽塾
- 日時：7月11日（土） 18：30～21：30

阿倍野区にある王子神社前の民家で、小さなドーナツ屋さん「あたりきしゃりき堂」を営む久保さんをゲストに招へいします。久保さんとの出会いは偶然の重なりでした。以前からりづらスタッフ山口さんが楽塾講師にと推薦してくれていたのですが、話を進める中で、我が田岡事務局長の古い知り合いでもあったことがわかりました。また、川浪さんもよくお店に出没しているということも聞きました。それぞれ相互につながりはないようですが、それ以来、僕は時折おいしいドーナツを食べに行きます。今週の授業では、「あたりきしゃりき堂」のドーナツを食べながら授業を楽しみたいと思います。



第14回目の授業が終了しました。

<盛者必衰のことわり>

東京都議選挙では民主党が第一党となりました。何よりも、この選挙は迫り来る衆院選の代理戦争みたいな様相を帯びていて、本来、地方自治を要とした都議選が、いつのまにか国政という容器に取り込まれてしまった印象です。しかし、都議選とはいえこれは小泉元首相が当時「自民党をぶつつぶす」と宣言した通りの結果になったわけだから、自民党としては麻生首相に責任を転化する筋合いのものではなく、自民党そのものの責任なのです。もともと小粒な首相たちが4代で寄ってたかって自民という屋台を腐らせてきたのですから、「おごるもの久しからず」なのです。ちょっと思ったのですが中間政党の存在感がなくなってきていると思いませんか？ 僕は中間政党が一杯あったほうが面白いと思っているので（体制に寄生する政党は不要ですが）、自民に対する民主というような事大主義はちょっとどうかという気がします。

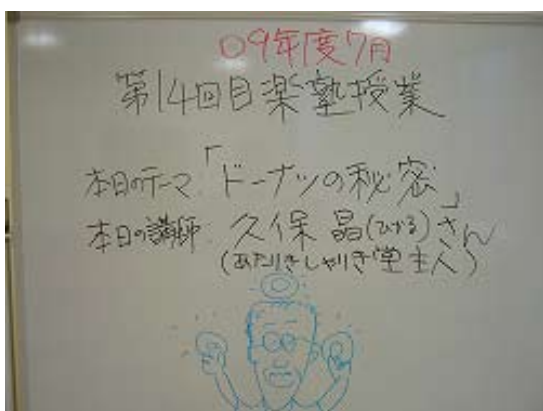
09年7月14日 塾長

7月11日（土）の授業

- テーマ：ドーナツの秘密
- 講師：久保 晶（ひかる）さん（あたりきしゃりき堂店主）
- 場所：三星温泉B1交流室＝楽塾
- 日時：7月11日（土）18：30～21：30
- 参加者：12名（スタッフ2名含む）

<はじめに>

「アタリキシャリキ、ケツノアナブリキ」とは、小さい時、友だちどうしでよくはやし立てていた意味不明の言葉遊びです。おそらく関西圏ではやったものだと思います。普段「当たり前やん」というところを、「アタリキ」と発し、「シャリキ」「ブリキ」の「キ」で韻を踏んで遊んだのです。そんな名前（「ケツノアナブリキ」は除外してありますが）をドーナツ店のネーミングにした久保さんが今夜の講師です。僕と同じく身代をつぶし、家族とも離れてしまった男の話は絶対面白いと思っていたので、今夜のゲストに招き、マイナスをプラスに転換する男のエネルギーを覗いてみました。



<1時限目 なぜドーナツなのか>

ドーナツの秘密

「久保といいます。アベノで小さなお店をしています。開店して満6年になりますが、なぜドーナツ屋になったのかを話してみたいと思います」。飄々とした久保さんが語りだしました。「平成9年3月会社を破算し、家族子どもとも別れました。借金もたくさんあったが裁判で免責となり、しかし、生活のためにすぐに仕事をしなければならなかったんです」。

気張らず、飾らず、自然な風貌で語る久保さんの雰囲気、塾生たちは静かに吞まれていきました。「友人からは『おやつ屋やったらどや』と提案され、僕の師匠となるドーナツ製造屋さんからドーナツを仕入れることにしました。本町・北浜・淀屋橋などへ売りに出かけました。夏まではよく売れていたのが、暑くなって売れにくくなってきました」。「その後ドーナツを仕入れるより、その場でいい匂いをさせて作るほうがよいて考えて、機械を持ち歩いて販売していたが、身体がついてこなくなり、そのうちにお店を借りて場所を確保することが出来ました」。

保証金を安くしてもらって代わり、店舗のリニューアルは自分で改造していったそうです。久保さんの宝はたくさんの友人たちであり、店の普請はそれら専門家の友人たちが協力してくれたといいます。1年をかけてお店をリニューアルしたそうですが、店は今も仮オープンのままの状態です。なんせ、この前お店に立ち寄ると、店の前に廃材がごっそり置いてあったりして、まだ建設中かいなという状態。しかし「ドーナツ屋は匂いでお客を呼んでくれる」と話し「アベノを拠点に、夏の季節以外はおかげさまでうまくいっている」そうです。



気持ちをお店の名前に込めて

「『おいしいドーナツ』というフレーズを看板にしています。これは友人のデザイナーが描いてくれました。スーパーなどでドーナツを販売していた頃から、この名称を続けているが、不思議なことにお客さんが「おいしいドーナツを頂戴」といって買いに来てくれます。自分がおいしいと思う気持ちを名前に込めたのです。「現在市販されている油は70～80%が絞らず薬品で処理されている。僕は良質な油を使ってドーナツを作りたいと思っているので、絞った油を使用しています。現在、小麦粉もほとんどが輸入されていて食への不安がある。地元の人たちで作出した香川県の讃岐うどんの小麦粉を使っています。お砂糖も多少茶色がかかった吉備和糖という、徳島でできたものを使用し、昭和30年代の懐かしい味を出したいと思っています。添加物は膨らし粉くらいで、バニラやレモンを入れて香りを出します。店舗も未完成、商品もそんなわけでやはりまだまだ未完成です」。

ドーナツの食べ方は、ナイフとフォークで食べる世代が最初だったが、現在はミスタードーナツにみられる油紙に包んで食べるスタイルになってきたようです。僕（佐々木）は平野屋のドーナツをナイフとフォークで食べた記憶があります。T2さんが質問をしました。

T2：油はどんなのを使用していますか？

久保さん：なたね油を使っています。

佐々木：ドーナツを商品にした動機は？「あたりきしゃりき堂」の由来は？

久保さん：ドーナツは、友人の提案を単純にそのまま受け入れてやり始めました。店舗名は、大阪の人がよく知っている言葉の面白さから覚えてもらえと思った。

Sさん：ドーナツはどこで生まれましたか

久保さん：よく聞いてくれました。オランダ産で、アメリカに渡って穴のあるドーナツになっただけ。

「これからもドーナツを作りたいという人たちがいれば、味や技術を引き継ぐ若い人たちのお役に立てたい」と話し一時限を終りました。



<2時限目 人生を遊ぶ>

自然が持つ不思議

「二部ではドーナツを離れ、日ごろ楽しく遊んでいるお話をしたいと思います。明日は『100年先の森づくり』というテーマで高野山に行く予定です。4年ぐらい前、店を手伝ってくれる友人が連れて行ってくれたんですが、本来いろいろな種類の雑木で成立しているのが森なんですが、今は杉・ヒノキが主流。実のなる木が無くなってきている。鳥や昆虫類の食べるものが少なく、生物たちが育ちにくくなりつつある」といいます。

「これは食物連鎖のお話です。捕食、被食の関係が自然界を共存させている大きな要素ですが、そんな共生関係が崩れている」と久保さんは言うのです。

「これからは、自然の方向を向いた作業をしていかなければと思う。特に人にとって水は大切だ。杉やヒノキと違い、広葉樹などは根が深く土や水に栄養分を与えて育つ。ひいては田や畑などにも大きな影響を与えそれらを強くする。現実的には栄養分が希薄化してきた。僕らはそんな現場で木を切ったり、道を作ったりしていくのです」。

また、久保さんは数年前から米のドーナツを作りたいと考えて、福井に米づくりをしに行っている話にも触れられました。

Sさん：小麦でなく米でドーナツという理由は？

久保さん：米独特の味わい、サクサク感やモチモチ感となる感触をつくっていきたくて考えている。

Sさん：久保さんがこれまで食べたドーナツでは、どこの商品がおいしかったですか？

久保さん：申し訳ないけれど、自分ところのドーナツです。毎日均等な味でドーナツが出来るわけが無いから、いつも仕上がりに点をつけ作業点検するようにしています。湿度や練り具合、揚げる温度などで仕上がりの味が変化するのです。

中之島祭りについて

「中之島祭りを始めて38年目になります。僕が22歳の時、田岡（事務局長）が生まれる前から、彼の親父さんやお母さんたちと一緒にやっていたのです。当時田岡君はピィピィと泣き虫だった。最近では中之島祭りでドーナツやコーヒーを出している」。

塾生として参加している前山僧侶が、第1回の「中之島祭り」を仕切っていたという話も語られ、久保さんを核として、りぷら、田岡君、川浪さん、前山僧侶らとの縁が浮き上がってきました。

「『中之島祭り』は、官製ではない祭りとしては日本で初めての祭りです。それだけに街づくりのモデルケースとして、行政など全国各地から視察に来ていた。自分には借金があったが、これまでのかかわりの中で友人たちが協力してくれたり、付き合ってくれ宝になっている」。

三島さん：味について客から突っ込まれることは無いか？

久保さん：「味について客から突っ込まれることは無いが、よく食べに来る人からは、『この前とちょっと味が違うなあ』といわれたことがあった。ドーナツの場合比較する店があまり無いので、仕事はやりやすい」。



7月18日（土）の授業予定

●テーマ：人とかかわるお仕事

●講師：三宅喜美さん（大阪府総合福祉協会） 中野悦代さん（介護福祉）

●場所：三星温泉B1交流室＝楽塾

●日時：7月18日（土）18：30～21：00

中野さんは、数年前まで北摂を中心とした、大阪府の野宿者巡回相談員をしていて、おっちゃんたちの聞き取り作業を続けていた人です。介護福祉に転職した今も巡回相談はいい仕事だったと述懐している中野さんに、僕はいつも同感しています。また三宅さんは、「くらし応援室」を開設し仕事づくりに奔走していた僕に、失業者の公園清掃作業を作ってくれた人です。その頃一緒に公園清掃をした仲間たちの幾人かは、今も楽塾塾生として参加してくれています。現在も障害者雇用のサポート役として総合福祉協会で活躍するキャリア・ウーマンです。ともにたくさんの人たちと関わるなかで、失敗や発見を話してもらえたらいいなあと思っています。

第 15 回目の授業が終了しました。

<栗塚旭さんを知っていますか？>

僕がまだティンエイジャーだった頃、TV映画で週1回「新選組血風録」というシリーズが放映されていました。この映画は、新選組という幕末暗殺集団のイメージを大きく塗り替え、しかもそれまで常に脇役でしかなかった土方歳三という副長にスポットをあて、新選組隊士それぞれを毎回ドキュメント手法で描いて新鮮な時代劇でした。とくに栗塚旭（あさひ）さんという当時無名の俳優が扮した土方副長の存在感はずば抜けていて、友人同士の間では毎週評判になったほどでした。僕は、強烈な土方歳三のイメージを作ってしまった栗塚さんを超える土方役は今もないと思っています。その栗塚さんが、昨年京都シネマで行われた「未来世紀ニシナリ」を見にこられていて、短い時間でしたが歓談しました。そして、その縁もあって、最近あつかましくも楽塾の講師をお願いしたところ好意的に了解を頂きました。実は、これまで栗塚さん招へいをリクエストしてくれていた塾生もいたのです。具体的になればまたお知らせいたします。



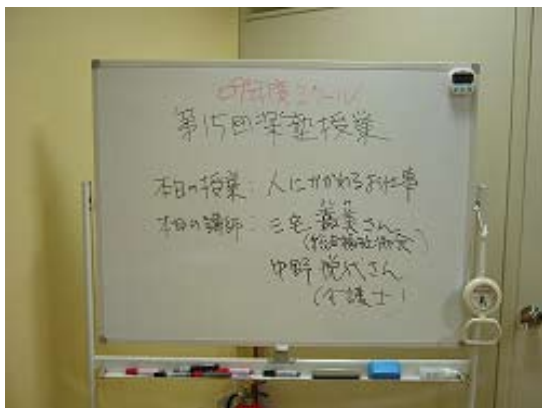
09年7月20日 塾長

7月18日（土）の授業

- テーマ：人とかわるお仕事
- 講師：三宅嘉美さん（大阪府総合福祉協会） 中野悦代さん（介護福祉士）
- 場所：三星温泉B1交流室＝楽塾
- 日時：7月18日（土）18：30～21：30
- 参加者：12名（スタッフ2名含む）

<はじめに>

今夜のゲストは、僕の作業を進めるうえで共に縁の深い人たちです。三宅さんは障害者のための仕事づくりを進める中で、期間限定ではあったけれど、初めて野宿者雇用実現に協力してくれた人です。今夜は、障害者雇用についての経験体験を話してくれました。中野さんは、現在介護士として活躍していますが、大阪府の巡回相談員として僕と同じように方々を回り、現場のおっちゃんたちの苦悩を分かち合い、しかし、施設など人のためといいながら、実は非人間的行為が横行する現実に、大きな怒りをもって闘っている話を聞かせてくれました。



<1時限目：三宅さんのおしごと>

自己紹介

「これまで佐々木さんとも協力しながら仕事をしてきました」。冒頭、6年ほど前、エル・チャレンジでの障害者雇用の中に野宿者枠を作ってくれ、三宅さんたちと二人三脚をはじめた経緯から話が始まりました。そして三宅さんの自己紹介に移ります。三宅さんは滋賀県の旧家で生まれたこと、武村知事の頃、もともと汚染された川を美しく整備し、自分たちの家にそれらの水を呼び込んで再利用した川端（かばた）をつくり

*各家々では夏は冷たくスイカや野菜などを冷やすのに最適で、冬暖かく顔を洗うのにはもってこいの水温であること、最近の自然環境保全への関心の中で、全国からこのまちを参考にする観光団が多くなったことなど、パワーポイントの映像を使いながら語ってくれました。

エル・チャレンジとの出会い

「若い頃は、家を出たくて仕方なかったが、大学に入って部落解放を知った。社会における、同和地区や在日の人たちへの差別意識を知るようになった」という三宅さんは、その後、議員事務所や現在のエル・チャレンジへと自らの働く位置を定めて行きます。エル・チャレンジでの知的障害者雇用における清掃作業の奥深さ、それは<清掃＝汚れ仕事>と定義することではなく、清掃は<きれいにする仕事>だとする発想から始まったといいます。汚れたものを美しくすることは人をやさしくすることだといいます。また作業は「手仕事の基本だから、作業の分解や組み立てがしやすい」のだそうです。

知的障害者の就労訓練を通し感じたこと

1. 知的障害者は身辺自立が出来にくく、たとえばタオルが絞れない、ゴミ袋が結べない、挨拶がまともに出来ない、目上の人にも友だち言葉などでしゃべってしまうなど。
2. 社会的経験が少なく、選択肢が狭い。
3. そこで発見・感動を大切にしたい。たとえば出来ないのではなく、やった経験がないだけのことなので、出来るやり方を工夫する。出来たらほめる。人は必要とされている時に誇りを感じるはずだ。選べる楽しさを感じてもらおうようにしている、など三宅さんたちの発見は、彼ら障害者の喜びであり感動であることを感じた。
4. 障害者の親たちに感じたことは、案外就職に対して後ろ向きであること、二人三脚で生きてきた母子関係で、子離れできない母親たちが多いこと、極端に子どもを守ろうとしてしまう親たちがいることなどを印象として感じている。
5. 10年前、企業は知的障害者に無理解だった。それまでは障害者というと身体障害者が一般的だった。しかし、企業の知的障害者の取り組みが始まると、企業から教えられることが多くなっていく。たとえば、「障害者を雇い入れる時、その人の出来ることをまず考えて、全体を組み立て直すことが大切」と教えられた。また、現場でのトラブルに対しては「ぐずぐずせずすぐに報告が欲しい。そして適切な対応が大切だ」と教えられ、「ここで働く人たちは、みな大切な仲間、あなたたちとはパートナーだ。だから一緒に手を組んでやりましょう」といわれたこと。トラブルに対する言い訳ばかりを考えていた自分たちにとって苦い経験であり、このことは今も役立っていると三宅さんは話していました。また、ある企業開拓の際、雇用担当者が「自分の娘が精神障害者2級だ」とカミングアウトしてくれたこと、そして「娘が働いて欲しい」と切実に話してくれたことは、企業の中で話せない人たち、そんな経験を背負った人たちが多いのではないかと三宅さんは感じたそうです。
6. 「障害者が働きやすい職場とは、人（従業員）を大切にすると考えます」。最後に三宅さんはそう結論づけました。

トークで賑やかに

I君：職場での障害者はそれぞれが違うので、どう対応していいのかがわからない。

三宅さん：一定のルールを作って、悪いものは悪いといい続けることも必要。

Oさん：三宅さんがつきあう障害者は、年齢的にいろいろな人たちがいるんですか？

三宅さん：年齢的にはもうさまざまです。

Tさん：給料はどうなんですか？

三宅さん：最低賃金を守っています。

Yさん：友だち言葉に関して、それらに対応していく必要があるのですか？

三宅さん：必要です。言葉の訓練をします。やれないではなく出来る方向でやること。

T君：職場の雰囲気が大切やね。

こうして三宅さんの授業は終わり10分間の休憩後、中野さんにバトンタッチ。



<2時限目：中野さんのおしごと>

人の因縁

和歌山県かつらぎ町で生まれ、高校卒業まで和歌山で過ごしました。これから何をしたらよいのか迷っている時、和歌山市内の服屋さんに勤めはじめました。勤務先から帰宅する車中の四人がけシートのひとつに座っている時、ビールとするめを肴にした中年サラリーマンから声をかけられました。そして名刺交換をしたのですが、その時はそれでおしまいと思っていました。

それでも、自分に実になる仕事をしたいと考えていて、介護の仕事を意識し、どんな仕事なのか興味を持ち勉強を始めました。試験を受けるためアルバイトの仕事に変えていました。大分してから電車で合ったおじさんが連絡してきたのです。おじさんは竹中工務店という企業で勤務していて現場で求人をしているということらしいのです。ヘルパーの仕事をしたと考えていましたが、ひとまずおじさんのいる建築会社に受け入れてもらい、早朝和歌山を出て堺市内の勤務地まで通勤しました。

現場での認識

現場のおっちゃんたちとのかかわりで揉まれながら、あられちゃんと呼ばれて工事現場の彼らと仲良くなっていきました。おっちゃんたちが日雇いだということがわかってきたのはその後です。それまでは現場仕事とはいえ、ちゃんと給料で会社勤めをしているとばかり思っていたのが、そうではなく、その日その日の生活をしている人たちだということを理解したんです。社会には、親戚や親兄弟、知人からも縁を切って飛び出してきた人たちがいることを学んだんですね。私は、そんな人たちに関わる仕事をしたいと思ったので、その仕事をやめ介護専門学校に入学、卒業し、福祉法人施設に勤め介護士として新しい仕事を始めました。

介護のおしごとから巡回相談

その後、施設の仕事に疑問を抱き、大阪府委託の野宿者巡回相談事業の仕事をする事になりました。私は北河内（枚方・寝屋川など）の担当をしました。その頃、河川敷のテント群を見て立派やなあと思いました。そして、おっちゃんたちと積極的に話をするようにしました。九州・四国からの人たちが比較的多く、70年に開催された千里万博の頃に大阪に来た人たちが多かったと思います。おっちゃんたちの生活を不安のない状態にしたいと思っていました。長らく付き合っていた野宿者であるおっちゃんが入院をしました。そして生活保護の手続きをして独立しました。その頃、「息子が結婚する。」という風の噂を耳にしたおっちゃんから連絡が入ったので、家族と連絡をとったらとアドバイスしました。「いまさら苦勞をかけ別れた嫁はんとは会おうとは思わん。連絡を取りたい気持ちはあるけど、これを辛抱するのも大切や」と言い、嫁さんではなく息子さんと連絡を取り、「なんで一度も連絡してくれへんかったのか」とおっちゃんは言われたようです。その後、嫁さんとも連絡がつき、最初は怒りをもった会話だったようですが、そうこうしているうちに現在、再び家族の関係が回復しかけているようなのです。

再び介護職を得て

『幸福』とは何かと考えます。巡回後、再びヘルパーをしている中で今後の希望（たとえば生老病死にかかわること）などを聞いておこうと思い、聞き取りの中でそんな話を聴くようにつとめたが、ほとんどの人は畳の上で死にたいという希望を持っていました。そんな中で、人として扱われない怒りを聞きました。患者さんが介護を受け車椅子に乗っていると、看護師が別の看護師に「そこに置いといて」とか「(エレベーターで)上げといて」「下げといて」などモノ扱いするんですね。なるほど看護師は車椅子を対象にして指示しているのかもしれないけれど、「オレは人間や」と叫んだ患者に、私は大変共感しました。だって車椅子に乗っているのは人ですよ。人を人として認めない施設のあり方も疑問に思ったんです。人の行動にはそれぞれに理由があるはずだ。昼夜逆転になる人もあれば、徘徊する人、意見を聞かない人もある。人を均一な状態のものとするのはやりやすいし、経済効率もよいが、人への視線を見失った施設のあり方では何も創っていけないと思う。

まずは行動から

そんな時、同僚間でのミーティングを行った。「仕事が多い」「これ以上無理」など介護職から出てくる話が多かった。そこで一人ひとりの利用者の生活を見てもようということになりました。手始めに全てに紙おむつをはかせず、排尿時トイレに連れて行くことにしました。すると、(当たり前ながら)排尿感覚がそれぞれ違うことを発見しました。個人の欲求に根ざした介護作業の大切さを実感したのです。聞き取りたい人の言葉はわかりづらい場合もあるが、ちゃんと付き合いながら言葉のやり取りを続けていくうちに、その人の言葉がよくわかるようになっていきました。それが大変嬉しいことだった。これからも、自分が楽しいと思う仕事を続けていきたいと思っています。

中野さんの仕事の基本は、人と関わることの大切さでした。



7月25日（土）の授業予定

- テーマ：最果てのひとびと2
- 講師：稲田七海さん（大阪市立大学都市研究プラザ研究員）
- 場所：三星温泉B1交流室＝楽塾
- 日時：7月25日（土）18：30～21：00

稲田さんは、本年1月31日に、「最果ての人々」というテーマで、日本の辺境地『悪石島』への旅の紀行を語ってくれました。映像を活用し民俗誌としても大変興味のある授業となりましたが、限られた時間の中で、『悪石島』に暮らす人たちの話が残ってしまいました。今回の授業は、前回語りえなかった魅力ある島の人たちの話題に焦点が当てられることと思います。そこで今回のテーマを前回同様「最果ての人々2」とし、前回に続く2部編としました。

第16回目の授業が終了しました。

<魂はどこに>

昨年母が入院したことで、福祉とか地域医療など高齢者サービスに注目せざるを得なくなります。そんな中で、必ずしも患者が快適な介護や療養サービスを受けているわけではないことを知りました。退院後、紹介先の医院の想像を絶する横暴さ、そこから生じた再入院再手術の事態、不必要な出費と大きな時間的損失、急性期後の病院の患者への非人間的な扱いなど、信じられない事態を西成に来て始めて経験しました。評判の悪い救急病院に入院したことが因縁とはいえ、これに関わる地域総括支援センターの“福祉”という、法律に縛られた（幸福という言葉のない）サービスに声を無くしました。

「あんただけの面倒を見てるわけちゃうやで!」。面会人さえない隣のおばあちゃんが、介護士に大きな声で怒鳴られているのを聞き本当に凍ってしまいました。どの場面を切り取っても“魂”という言葉を見つけれない日常です。

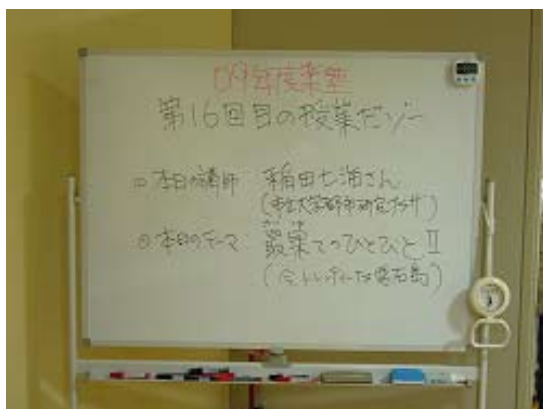
09年7月28日 塾長

7月25日（土）の授業

- テーマ：最果てのひとつと2
- 講師：稲田七海先生（大阪市立大学都市研究プラザ研究員）
- 場所：三星温泉B1交流室＝楽塾
- 日時：7月25日（土）18：30～21：30
- 参加者：14名（講師・スタッフ2名含む）

<はじめに>

今夜は岐阜経済大学の中村先生が宮町さんと共に参加してくれました。いくつかのシンポや研究会でお知り合いになった方です。また稲田さんの話に興味集中し、給食の時間にまで及びました。塾を解散したのは10時30分を回っていました。



<1時限目：悪石島の人々>

悪石島序論

「最果てのひとつと」は本年1月に行われました。しかし時間の都合で「島民の暮らし」が残され、I2さんに「最果てのひとつと2」をお願いすることにしたのです。

旧盆の8～9月初めの頃、ボゼが1日だけ島に現れること。島の唯一の産業が畜産であり、子牛の状態で

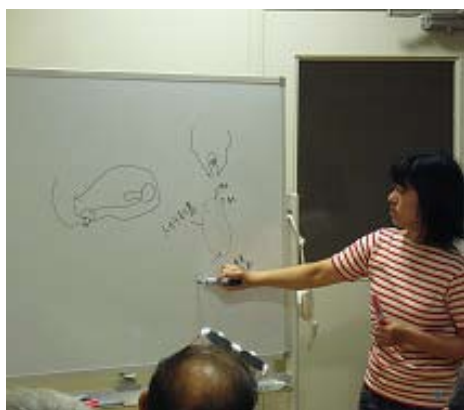
市場に売りさばくということ。島民70人の人たちの集落があることなどなど、映像を使って前回のおさらいをし、島民の生活サイクルを観察し、同時に私たちの生活サイクルについても確認しようという珍しい授業になりました。

「鹿児島県のトカラ列島は7つの島からなり、悪石島は最南端に位置します。日本の領土を守るという意識がトカラ列島にはあり、一方他国（北朝鮮？中国？）などの船舶が様子を伺いに来ているという場所でもあります」。稲田さんは、ホワイトボードに地図を描き、塾生の質問には丁寧に図解で応じていました。「実は鹿児島県内からトカラ列島にかけて国道58号が走っているのです」稲田さんが言うと、みんな「ウン？」といった顔つきになり次の説明を待ちます。「もちろん島ごとに走っていて海上にあるというのではないのですが」という説明で納得。

皆既日食

「7月22日、今世紀最大の皆既日食はインド、上海を經由し、南東諸島、とりわけ悪石島に話題が集中、島の人口が4、5倍にも膨れ上がったことなどで、島そのものが大きな影響を受けたことが話題となりました。最大6分間の日食が見られる場所と位置づけられ、世界的にも日食ハンターたちが注目していたところです」。ということで、皆既日食の話題から始まりました。「多くの人たちが人口70人という島に押し付けてきたらどうなるのか、島中が戦々恐々となりました。自分が島民ならこんな時どんな気持ちか、皆さんにお聞きします」。

T君：今村昌平監督の「神々たちの深き欲望」をイメージした。島で生きる人間たちの生々しい暮らしがよかった（少々ずれた答えでしたが、反応はT君だけでした）。



悪石島一名前の由来

なぜ悪石島などというイメージの悪い名前をつけたのだろう。「素晴らしい環境を持つ島であるので、島外から来て欲しくないという意味を持たせたのではないか」。また「砂浜が無く、悪石というとおりに耕作が難しい場所であったということでは」という考え方もあると言います。「島民自身もそれぞれ感慨があり、島の名称を改めようと動いた時期もあったのですが、結局は悪石島で落ち着いた」そうです。

港湾荷役の島

「悪石島は、これまで大きな船が港に入港できなくて（海底が浅い）、沖に着いた時点で小さな船に乗り継いできた」といいます。「荷役作業を任せ、はしけ作業をしていたんですね」。つまり悪石島にとっては、男が受け持つ港湾作業は現在も大きな労働産業であるらしい。「港湾労働といい、日雇い労働といい、釜ヶ崎のおじさんたちを思い出します」と稲田さんは話していました。

稲田さんの調査

稲田さんは2001年、悪石島への調査の直前、より南西の宝島や子宝島にも入島していて、そのあと悪石島には1週間滞在します。1月および今回の講義の内容は、当時の調査をベースに話してもらっているもの

です。この調査では、稲田さんが島民に密着して作ったスケジュール表（メモ）が残されており、そのコピーが配られました。島民が忙しいスケジュールで作業をしているのがわかって興味深いのです。茂さんという島民の生活を中心に話してくれました。

茂さんのこと

稲田さんが調査した年、島民の茂さんが初めてボゼになった。35歳の年齢としては遅いほうだといいます。「島民に認められなければボゼになれないが、やさしい茂さんは男として認められなかったのかも。33歳の時、フェリー会社の仕事をしていた女性と結婚。島民から祝福されました。奥さんはたくましく、しっかりしていた」。稲田さんの印象です。「島では、発電所のメンテナンスや宿直作業を島民が交代でしなければならず、その年のボゼ役は茂さんでしたが、宿直役をこなし、本業（民宿）をしながら荷役作業もしなければなりませんでした」。

稲田さんのメモでは、民宿の朝食を作ったあと神社広場でボゼの準備をし、その後民宿の昼食作りでいったん帰宅、再び神社広場にとって返し、この間発電所と荷役作業をこなしながら、再び神社でボゼになり、ようやく人前に現れるのです。祭りが終わりボゼを脱ぎ、急いで民宿で夕食の準備をし、後片付けなどをこなし、あとボゼの会場へ宴会に出かけ、途中発電所にメンテに行き帰宅、少しお酒を飲んだ後、深夜に発電所へ宿直です。明け方帰宅というものすごいスケジュールなのです（ボゼ役の分、多忙になってしまった）。このほか郵便配達や、宅急便、役所（出張所）などの役割を、島では1人で担う必要があるらしい。自給経済と協力の大切さが伝わってきます。ボゼという神になりきるためには、作業を忙しくこなさなければならないという現実がありました。



<2時限目：ワークショップ「君の1日は？」>

塾生の1日のスケジュール

悪石島の日常に習い、自分たちの1日の時間割りを作りました。悪石島の作業と比べ、大阪での生活はいかがなものか？というワークショップです。それぞれが発表しました。

T1：公園清掃を昼間で終わり、お酒をたしなみ、花屋さんに行き、図書館や運試しのギャンブルをする。

市営のフリーパスを購入し、地下鉄、バスなどを乗り継ぎ楽しむ。

M1：5時起床、朝食、そのあとTV。12:00ごろ昼食、そのあとTV。夜食のあとTV。病院は月に1回通院。

T2：5時頃起床。1日2万歩を歩く。必ず外出をする。

S：6:30起床、先ず嫁さんにマッサージをする。そのあとはパソコンで相場を検討。11:30昼食。

そのあと相場。寝る前は嫁さんにマッサージ。

I：土日は競馬。公園清掃はそれほど変化なく、変化を求めため楽塾へ。

O1：フリーライターですが3パターンあります。1. 仕事が重なった場合はずっと仕事をする。2. 外回りの場合、外で作業をし、買い物なんかもしてしまう。3. 長風呂やフラフープなどリラクゼーションに没入。または帰郷することも。

塾長：7：30 過ぎに起床。本業があるにも関わらず、突発的に会社の企画宣伝作業や、わけのわからない作業を与えられるので、ほとんど不規則。悪石島みたいなモンです。

M2：6：30 起床。娘たちのお弁当を作る。資格（司法試験）をとるための勉強。図書館で勉強する。夜半に冷凍倉庫の作業アルバイトに行く。娘の生活に合わせた暮らしになっている。睡眠時間が少ないのが悩み。

M3：7：30 起床。ネットや新聞を見る。職場に行く時間帯はばらばら。会議と授業が仕事の生活。夜はばらばらに帰宅し、手紙やネットを開いて過ごす。

稲田：結構、大学の生活は自由なイメージでいいなあと思っていたが、自分へのマネージメント、大学運営や授業構成などなかなか苦勞ある職業だと思うようになった。

K：5：30 起床。7：00 出勤。職場で昆虫やメダカを育成。バイクに乗って蓮池の状態を見回る。昼食後、会議や運営企画などをし、18：00 に退社。あちらこちらの飲み屋をぶらつきながら人間関係にいそしむ（という口実を作っている）。24：00 過ぎに就寝。

稲田さんが言うには「悪石島には戦後死亡者がいないのです（全員エー！と驚く）。病院が無いので病気になると鹿児島や奄美のほうに入院し、そこで亡くなるので帰島しない。だから島での死亡者がいない」のだそうです。以下ワークショップの続きです。

O2：施設勤務なので宿直の作業があり、場合によっては24時間拘束という厳しさも経験する。入寮者の食事に見守りや全体の管理など。夜間などはさまざまな人たちに対応しなければならない。朝、申し送りをしても帰宅出来ず、作業を続けてしまうことも多い。

事務局長：労務管理の無い会社で、しかしいざコンペなど作る際は厳しい。9：00 前後に出勤。釜ヶ崎・浪速区芦原橋・事務所が僕のテリトリー。12：00 ごろまでに帰宅。土曜の午前中は子どもの相手。今後の目標は週1回ゆっくりすること。

稲田：私たちと悪石島との違いは何でしょうか。（会場から「買い物が無い」という声）。そうですね。お金を使うことが少ないです。だから修学旅行などの時は、横断歩道の渡り方や、お金の使い方を子どもたちに説明するそうです。買い物はフェリーがきた時、船内で購入するんです。あと、トカラでは「村八分」がないのです。「与えの一町」といって、排除すれば命を落とすことになるからだといひます。





尽きぬ話はごはんと一緒に

話が尽きないので、悪石島の映像を見、給食を食べ話が続けました。日食当日の悪石島はすごい暴風雨で、天体観測は全く出来なかったようです。これはボゼの怒りではないかと思いました。最後に中村先生と宮町さんを紹介しました。

中村先生は、「大学と人との暮らしの間には乖離があり、楽塾のような取り組みが必要と思う」と話し、宮町さんは「シングルマザーが安心して生活できる社会を作るための活動を続けたい」と話してくれました。今回も、稲田さんの授業に塾生たちは堪能していました。稲田さんご苦労様でした。



楽塾は1か月の夏休み

7月25日の授業を最後に、09年度第2クールの全授業が修了しました。8月の1ヶ月間は夏季休暇です。8月9日（日）に、田んぼの草刈りをするため奈良市大柳生の南垣内農場に行きます。応援団の皆さんも希望される方のご連絡ください。

9月5日（土）の授業予定

- テーマ：秋の惣菜
- 講師：平田節子さん（主婦）
- 場所：人文センター5F厨房室
- 日時：9月5日（土）18：30～21：00

9月から第3クールに入ります。秋とはいえまだまだ残暑厳しい候と思われます、食欲増進のために、秋の惣菜を工夫してみようと考え、日常の食と健康を主婦の立場から提案してもらうことにし、平田節子さんに来ていただきます。

野外実習が終わりました

<大柳生へ草刈に>

約1ヵ月半ぶり、田畑周辺の繁茂した雑草を刈り取りに大柳生へ行ってきました。レンタカーで大雨の中を奈良まで疾走し、雨上がりを待ちながら一瞬の晴れ間を逃さず、サツマイモ畑と水田の草刈を完了してきました。10月の収穫を楽しみにします。

8月9日(日)の野外実習

- テーマ:「育てる」を楽しもう
- 講師:南垣内貞史さん(大柳生農場主)
- 場所:南垣内さん農場
- 日時:8月9日(日) 8:00~16:00
- 参加者:5名(講師・スタッフ2名含む)

<大雨のスタート>

朝から雨が降り続き、奈良の天候も気になったので農場の南垣内さんに連絡を入れました。大柳生も雨ということでしたが、何とか草刈をしておきたかったので、これから出発する旨を伝え荷物を車に運び込みました。午前7時30分にはすでに「りぷら」前に塾生が待機していて、予定どおり8時に西成をスタートすることが出来ました。奈良県庁前で田岡事務局長と合流し、9時前大柳生に到着するまで雨勢が変わらず、先ずは南垣内さんのお宅で少し雨宿りをしながら様子を見ます。

南垣内さんも終日他の用事があるため、そのまま南垣内邸を借りながら彼とはお別れをし、約1時間後、天候が定まらないためひとまず「奈良市青少年野外活動センター」に移動します。おなじみの職員さんに施設利用費を払い屋外厨房で待機、ここですますます雨の勢いきつづく、先ず、早めの昼食準備をすることになりました。全員朝食を食べていず空腹だったので、この提案にはみんなが飛びつきました。雨がひどく、もう草刈なんか念頭に無かった塾生もいたかも。

<早めの昼食>

田岡事務局長が持ってきたバーベキューセットを組み立て、備長炭に火をつけます。僕が買い込んだ食材を調理している間、すでに炭火前に座って食べる体勢の塾生もいました。炭火がおこり食材を焼く間に雨脚が急速に衰えてきて、これなら草刈が出来ると確信しました。食材は全てたいらげてしまい、もう少し買い込んでおいたほうがよかったと思いましたが、みんなは満足していました。充分腹ごしらえをし、最後は田岡君のバーナーで立てたコーヒーをデザートとしていただいた頃、雨はすっかり上がっていました。野外センターには利用が終わったことを伝え、12時半過ぎた頃、雨上がりをチャンスに全員田畑に繰り出しました。



<雑草がすごいな！>

水田の稲は青々としっかり根付き、水藻が水面を飾っていてとても豊かな気持ちになりました。しかし水田の周囲は雑草で覆われ、まさに今を盛りと謳歌しています。サツマイモ畑も雑草がすごく、サツマイモのツルと同様伸び茂り、イモヅルを切ってしまうよう注意深く草刈をします。しかしサツマイモの葉っぱが元気モリモリ、ツルはドンドン伸び放題で、今秋は大量収穫になるだろうと実感しました。田岡君は、おもに水田周辺の雑草を草刈機で整備してくれ、塾生諸君と僕は、サツマイモ畑の雑草を丁寧に手と鎌で刈り込みました。作業中湿度はあったものの気温は低く、雨も降らず、ラッキーな作業日和となったのです。刈り取ったあとは全員で記念写真を撮って農場を後にしたのです。



<またまた雨が>

南垣内さんのハウス農園に道具類を返却するため現場を離れ、4時ごろ大柳生をあとに出発した頃から、しょぼしょぼ雨が降り落ちてきました。僕らが農作業をしていた瞬間が天の恵みであり、グッドタイミングであったと感激しました。振り続ける雨に、「これはきっと大阪から来た雨だ」とわかった振りをしながらドライブを続け、生駒前で田岡君とも別れ、生駒山トンネルを超えて大阪に入ったとたん大雨が降っていました。湊町で高速を降り、西成のブランコート前に到着したのは5時過ぎだったかな。またまた長靴や清掃道具類などを降ろし、ここで塾生たちと解散しました。あとはレンタカーを返却するだけ。雨は止まず、全ての作業を終えたのは7時前でした。それにしても、今回の草刈への執念は、天に通じたと確信しています。



第17回目の授業が終わりました

<民主党唯一の魅力>

“投票による革命”市民の誕生“などあいも変わらず評論家たちの威勢のいい言葉が飛び交って、総選挙後の喧騒の余韻がまだ続いています。雪崩を打っての民主党の一人勝ちは、しかし見ていると大変不安な気持ちにもなりました。戦後、政官業一体の蜜月を続けてきた自民党への大きな不満はあったものの、利権・権益政治の終えんを約束されたわけではありません。自民党と民主党との本質的違いが何かはまだ見えない。どの党も、マルクスの共産党宣言に習い「マニフェスト」が大流行で、いわば“貧困選挙民”の金返せ選挙であり、カネ大切に価値を置いた逆転劇にしか見えませんでした。

僕の貧乏時代、労働組合や、左翼議員からひどいピンはねをされた経験があり、そう簡単に与野党二項できれいに政治が変わるわけがないと思っています。民主党には、カネ大切だけではない新しい価値の創造をうたう議員が出てきて欲しいものです。

そんな中、長崎の福田さんや東京の青木さんなど、笑顔の美しい素敵な女性議員たちが誕生しました。自らの負の遺産をバネに、既成の議員には無い、自分の言葉で語る魅力的な女性たちだと思いました。今回の選挙で最大の印象は彼女たちの登場だったと思います。4年前の小泉ナントカと呼ばれたおばちゃん議員たちとはケタ違いな、志ある新鮮な存在が民主党の中核になればと、はかない期待を抱いています。

09年9月5日 塾長

9月5日(土)の授業

- テーマ：秋の惣菜
- 講師：平田節子さん(主婦)
- 場所：人文センター5F 厨房室
- 日時：9月5日(土) 18:30~20:30
- 参加者：7名(スタッフ・講師含む)

<1ヶ月ぶりの楽塾>

ご無沙汰の9月です。楽塾の第3クールの第1回目(09年通算17回目)の授業が始まりました。残暑が厳しい中でたくさんの具を使った「筑前煮」をメインデッシュとし、にぎやかに料理を楽しみました。当夜の料理講師は平田さんです。実は佐々木の実妹であり、塾生たちとおしゃべりには調理中にも負けずに応戦していました。



<とにかく自分で料理をつくること>

楽塾の料理教室は、とくにオリジナルな料理や珍しい食材を使って調理をする場ではありません。従来から親しまれてきた家庭料理や、市井で安くすぐ手に入る食材を利用し、簡単に調理が出来るおかずづくりを実践したいと始めたものです。塾生たちの中には単身者も多いので、出来る限り日常的に、自分たちで食事を作る習慣を続けたいと考えた授業でした。当夜のメインは「筑前煮」で、そのほかに「冷やしソーメン」を作りました。暑い日が続くので、ソーメンを氷で冷やすイメージは大層食欲をそそりました。当夜は塾生が少なく、2グループ（3～4名）に食材を分け、筑前煮の調理にかかります。当夜の食材は以下のとおり。

今日の献立

- 筑前煮：ごぼう・にんじん・インゲン・鶏肉・椎茸・レンコン・こんにゃく・砂糖・醤油・料理酒など。
- 冷やしソーメン：ソーメン・しょうが・ねぎ・ソーメンだし。
- 副菜：野沢菜のお漬け物
- デザート：幸水梨

「乱切り」からのスタート宣言

「それぞれの材料を全て乱切りにして用意してください」という平田さんのスタート宣言で調理が始まりました。こんにゃくは大き目のスプーンですくうようにしてちぎります。椎茸は4等分に切りました。中鍋に油を注ぎ、鍋を熱します。調理のすんだ食材をごっそりなべにほうり込み炒めます。最後にインゲンを入れました。よく炒めながら柔らかくなると調味料を入れていきます。試食と称し、M君はもう鍋に手を入れこんにゃくをムシャムシャ食べはじめていました。

「そのまま中火にしておいて、次にソーメンをゆでましょう」と講師の第二の宣言。「鍋にたっぷりの水を入れ熱湯にして、ソーメンを湯がきます」。熱湯にソーメンを落とし、一定時間湯がいた後ザルに移し水でソーメンをよく洗ってから、氷をぶっ掛けて冷やします。

「ソーメンをそのまま冷やしておいて、筑前煮の味付けを確認します」。第2グループである僕の班は、少々甘味だったので醤油を入れました。それにしてもごぼうとレンコンが思ったより柔らかくなく、少々筋っぼいのです。それでももう少し鍋のふたをして蒸らしてやることにしました。第1グループは順調に調理が進んでいるようで、時折塾生の大きな歓声が聞こえていました。



<いっただきま〜す！>

ソーメンだし汁を用意し、しょうがとおねぎを添え冷やしソーメンの出来上がり。「筑前煮」の最後の味付けを試みて火を落とし、各器に盛りつけていきました。ご飯もうまく炊き上がっていました。お漬物を切つて、T君が「いただきます！」の宣誓を發し食事を頂くことにしました。温かいご飯と、出来立ての筑前煮の取り合わせは抜群でした。ただ僕の印象では、やはりレンコンとごぼうが少し筋っぽかったのです。平田さんに言わせると「レンコンとごぼうは特価料金だったので、きっと商品価値が低かったに違いない」という解釈。僕も同感。確かに安すぎました。筑前煮の味は全体に濃い味でした。田岡事務局長が言うには「第1班はあっさり味」だったようです。食事の後は幸水梨をデザートに、贅沢な晩さんが終わりました。

来た時よりも美しく！？

食事後の食器や道具類の後片付けを全員で済ませ、厨房は気持ちよいほどきれいに片付きます。ごみを集めてセンターを後にしました。来週から再び三星温泉で授業が始まります。



9月12日（土）の授業予定

- テーマ：<日本語の迷路へようこそ> 怪しい“ことのは”探検①
- 講師：大谷浩子さん（フリーライター）
- 場所：三星温泉
- 日時：9月12日（土）18：30～21：30

今週は言葉遊びをしてみます。とくにカタカナや外来語などを中心に、日常的な言葉の語源や使われ方などを多面的に学んでみたいと思っています。講師は今回で3回目の登壇となるフリーライターの大谷浩子さんです。すでに予約も増えつつあります。ふるってご参加ください。

第18回目の授業が終わりました

<不易流行>

先日、「伝説岡林信康」(白夜書房)を発見し買ってしまいました。若い人たちにはなじみが薄いかもしれませんが、僕にとっては、日本の音楽シーンの上で特別なミュージシャンといえる人です。この本は、岡林の自伝に加え、彼の活動を追いながら、70年代後半若くして逝った川仁(かわに) 忍というカメラマンの作品を集めたものです。

68年「山谷ブルース/友よ」でデビューし、70年、3枚目のアルバムである「おいらいちぬけた」をプレスしてドロップアウト。多くのファンにとってはプロテスト歌手、反体制歌手としての岡林をイメージしたまま、その後の活動を知らずの40年だったと思うのです。僕もそうでした。

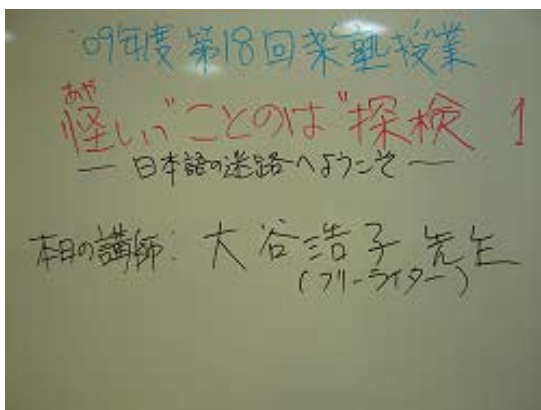
この本で岡林は、やっと最近のコンサートで、封印していた初期の作品を解放し始めたこと、「フォークの神様」というイメージを追うファンとのギャップに悩みながら、新しい音楽への挑戦や夢などを吐露しています。ごく最近見たNHKでの「青春のフォーク」で、年齢を重ねた岡林の音楽は他の歌手を圧倒しています。ごく最近見たNHKでの「青春のフォーク」で、年齢を重ねた岡林の音楽は他の歌手を圧倒しています。

「不易流行」((永遠性と一時的熱狂))とは芭蕉の言葉で、詩において不易と流行はともに大切という意味らしいのですが、岡林に不安を見ていた従来のファンたちや、若い人たちが徐々に岡林に帰還してきているようです。それにしても新しい価値を作る者と、それを享受する側とは常に大きな落差があり、アバンギャルドとは、常に孤独に耐え、理解されず、どこかで自分の存在を訴え続けている存在であるのかもしれませんが。

09年9月15日 塾長

9月12日(土)の授業

- テーマ：怪しい"ことのは"探検1——日本語の迷路へようこそ——
- 講師：大谷浩子さん(フリーライター)
- 場所：楽塾(三星温泉B1交流室)
- 日時：9月12日(土) 18:30~22:00
- 参加者：12名(スタッフ・講師含む)



1. 前半／頼もしい援軍

テーマ「怪しい」ことのは「探検」のうしろに1が加えられています。「今後シリーズとして続けられる授業と解釈してもいいですか」という質問に、大谷さんは優しく「そうですね」と答えてくれました。毎回授業のプログラムに頭を痛める中で、こんな応援は、私にとって強力なエンジンとなります。

2. カタカナ語ってなんやろ？

「新しい言葉には時代感覚があって興味深いものです。どこか怪しく、胡散臭い言葉をツッコミながら、そんな新しい言葉をネタにします。今夜はカタカナの言葉からはじめます。カタカナ職業は、私たちの頃は大変新鮮でした（大谷さんはコピーライター、僕はデザイナーとかイラストレーターといわれていました）。しかし現在、アルバイト情報誌などを見ると全ての職業はカタカナの名称になっていますね」。

「たとえばクリーン・スタッフ、ファクトリー・クルー、テレ・マーケッターなど全てはカタカナ語。語源的にはヨーロッパから発生していると思われるけれど、少しインチキくさい」。そうですね、いや職業の中身ではなく名称そのものがですよ。でも「デザイナー」や「コピーライター」などもちっとばかりインチキなイメージを感じさせる職業ではありますね、大谷さん（と同意を求める）。

『カタカナ語』は、日本語生まれか外国語生まれに分かれます。日本語生まれは和語といわれおもに訓読みで話され、外国語のおもなものは漢語といわれ、音読みが多いのです。欧米からの言葉を外来語といい、カタカナが使われます。この範疇（はんちゅう）に新しい中国語なども入ります」。つまり漢語を除いた外来語のことをカタカナ語といいます。さて和語クイズです。この中に和語が2つあります。それはどれでしょうか？」

- ① トマト、タマネギ、ニンジン、タマゴ、リンゴ、ピーマン
 - ② 鉛筆、紙、ノート、定規、ホチキス、はさみ
- ブログを見ている皆さん。一緒に考えてください（解答は以下に）

【解答】①タネギ・タマゴ ②紙・はさみ

3. どうして外来語がこんなに多いの？

「日本という国は、最も外来語の氾濫率が高い国です。それはなぜなのか。塾生と考えます」。Iさんからは「無節操な国民だから」という意見が出ました。「外国への憧れ」という意見もありました。大谷さんは「日本の言葉はもともと変わりやすい性質があり、それに言葉が豊富な国。表音的にも使いやすい」といいます。なんせ表意の漢字に、表音のひらがなやカタカナを持つ国ですからね。

その上でいくつかの理由を考えてくれました。

- ① 日本に無い考え方が伝えられる（新しい考え方を伝える・利便性）
 - ② 深刻なこと、タブーなこともソフトに伝わる（たとえばセクハラやドメスティック・バイオレンスなど、いいにくい言葉も言いやすくなる）
 - ③ ダサいイメージを新鮮にし、かっこよくする（イメージの転換）。
 - ④ 欧米への憧れ（コンプレックス）
 - ⑤ 日本語は外国語を取り入れやすい特性を持つ
 - ⑥ 日本人は合理的（アレンジが得意な民族性なので何でも自家薬籠（やうろう）してしまう）
- みなさんも一緒に考えてください。

4. 和製語

「和製語は、米英に加え、ヨーロッパの言葉を使って、新語を作ってしまった言葉です」。いくつかの用例

を見てみます。これらは外国でほとんど通用しないものだと思います」。

①英語を使って、英語に無い言葉を作り出す

ナイター（ナイトゲーム）・フリーター（フリー＋アルバイト）・ペーパードライバー・チャイナドレス（チャイニーズ・ドレス）

②元の言葉を借り、新語を作る

ワイシャツ（Tシャツを变形しホワイトシャツに造語）

③英語とは違うイメージで言葉を組み合わせ

ガソリンスタンド（ガステーション）

④英語の言葉を省略

リストラ（リストラクチャリング）

⑤省略した言葉が、和語や漢語とくっついた混種語

着メロ・モー娘・おしんどローム・ゆるキャラ・アラ還

ゆるキャラの話題では、Yさん（21）とM2さん（60）両者の携帯キャラクターが同じ「ひこニャン」だったためみんなが大笑いしてしまいました。最後の「アラ還」は僕にはわからず、僕の子ども時代のヒーロー嵐寛寿郎（アラカン）と関係があるのかを聞いてみました。すると、アラカンという語源をベースにしていることは間違いなく、しかし「アラウンド還暦」という新しい言葉に焼きなおしているという、つまり言葉の二重性というか、元の言葉を知っていればより興味深い言葉になることがわかりました。僕は念のためホワイトボードに「嵐寛寿郎」と書き、若い人たちにおせっかいの説明をして笑われました。



5. 後半／声に出して読みたいカタカナ流行語

後半は、大谷さんが作成した1950年～2008年までにはやったカタカナ流行語資料を参考に、「あの日、あの時、あの頃」の思い出を呼び覚ます試みをしました。1950年代は、どちらかといえば活字的発想、つまり新聞・雑誌を中心とした活字メディアにラジオ文化の音メディアがあったような印象があります。1960年代以降はやはりTVやCMの台頭が著しく映像文化からの発信となり、1990年代以降はさまざまなメディアに加えて、デジタル・携帯・パソコンなどIT産業の急進による新メディアからの流行語が増えていくように感じました。しかし共通する言葉はカタカナ語なんですね。

「とんでもハッパン」「BG」「李ライン」「ビキニマグロ」（マグロがビキニを着ていると思った人もいたりして大笑い）「スクスク」、そして「ベ平連」「ゲバ棒」「エンブラ」などは前山さんや佐々木が説明する羽目になったりしてしまい…。「一生全力でお守りします」は皇太子成婚時の言葉だが、最近の女天皇への旗色の悪さから応援したいという声も上がりました。いい感じですよあの皇太子さんは。

6. ルーキーの登場

川崎那恵さんが武田緑さんを連れてきてくれました。武田さんは11月に講義してくれる予定です。具体的内容は近日中に公表されます。近大の山崎君も参加してくれました。10月には同大の本田君と楽塾でコラボしてくれます。



9月19日（土）の授業予定

- テーマ：ALL OF DADDIES —おトンについて考える—
- 講師：Wさん（NPOワークレッシュ代表）
- 場所：三星温泉B1交流室
- 日時：9月19日（土）18：30～21：30（予定）

昨年11月以来、久しぶりの和久貴子先生です。和久貴子さんが主宰する子どもたち支援のNPO活動を通じ、現在の親子のありようを語りながら、自らの親子の愛憎をも話してくれたことが新鮮でした。昨年の続きをお願いしました。

※ご予約が無い場合、給食が不足する恐れがあります。必ず予約をお願いいたします。

第19回目の授業が終わりました

<連休は連勤で>

わが日本列島はすべて連休に突入しているようです。連休を満喫する小市民の歡喜の顔が浮かんでくるようです。私もちょいと別の意味で連休を待っていたのです。日ごろの要領悪さがここに来て、休日出勤する羽目に陥ったわけですね。つまり残っている仕事をこの連休で解消するために利用しようという魂胆なのです。19回目の授業参観記録に影響してしまい、和久さんの授業の新鮮さを早くレポートするつもりが、遅れてしまいました。皆さん遅くなってごめんなさい。

09年9月22日塾長



9月19日(土)の授業

- テーマ：ALL OF DADDIES—おとんのこと—
- 講師：和久貴子さん(NPO法人ワークレッシュ代表)
- 日時：9月19日(土) 18:30～22:30
- 場所：楽塾(三星温泉B1交流室)
- 参加者：12名(スタッフ・講師含む)

<今日の1日は「おとん」に続く>

「自己紹介として、今日の一日を話します」。和久さんはそう言って、塾生たちが期待するテーマをすり抜け、本日ここに至るエピソードを語り始めました。

「今日は朝から学童保育で子どもと遊び、見守りをしていました。昼はミートソース・スパゲティを作って、みんなでワイワイ大騒ぎをしてきました。親たちは忙しく、簡単なミートソース一つとっても缶詰やレトルトに頼りがちで、みんな手作りのいろんな醍醐味を知ることは少ないのです。学童保育に来ている子たちは、だいたい小学1年生から4年生ですが、今日は3才から18才までの児童(他部門の利用者)も一緒でした。彼らをサポートするスタッフは18才から85才。今日のミートソースと同じぐらい、人間もごちゃまぜです。そういうのが本当だと思うし、好きです。その後も落ち葉で焼き芋をしたり、近所の専門学校の学園祭にも行ったりと、忙しくも面白い時間を過ごしました。子どもたちものびのびしていました。私はそんな組織の代表をしています。

こんな私たちの日常を、内外から気長に見守ってくれる人がいて、10年近くやってこれたのです。今日は、うちの経理担当の方も来てくれました。」。そう言って、初参加の森さんを紹介してくれました。「前回は、主に子どもと母の話でした。(佐々木の)記録によれば、私は『大人が解放されていなければ、子どもも危うい』というようなことを言っていました。ところで皆さんと旅行に行った時は、森や林や自然に身をおい

て本当に気分が良く回復できました。日ごろはIT機器のコードが足元でごちゃごちゃして、私にまとわりつく静電気を落とすことが出来ません。今日も静電気を落とそうと思って、この部屋の電気も消したいと思います。それはあとで・・・」ということで、キャンドルが準備されていました。

<さておとんという“ことのは”は？>

「平安時代の頃は、今のように録音する機器がなかったので、書物として残っているものとしては『源氏物語』や『枕草子』などに代表される、超上流階層の文化に限られていたのですね。実際はどんな話し言葉、どんな発音など、どんなカタチで話されていたのかは残っていない。顔や体躯など骨格も違っていただろうし、発音などは今とずいぶん違っていたと想像できます」（さて、おとんはどこへ行ったのだろう？）

「平安の近畿圏では、お母さんのことは、はは（母）と表記しますが、なんと発音はパパ [P A P A]（父は [T E T E]）だった、という研究もあります。歴史ドラマなんかでは、『わらわは〜〜じゃった』などと、いかにも古色蒼然とした喋り方をしているけれど、あんな話し言葉では多分無いでしょうね」（さすが！こうしていよいよおとんがあらわれ始めました。同時に昨週のテーマ<ことのは>とも共通の話になり、和久さんも話題に飛び入りしていました。このようにしてプライベートな話題に突入していくのです）。

「私の父は佐々木さんと同年代で、私は父が30歳のときに生まれました。今の私の歳（36）で、10歳年上の妻を亡くしました。1年後に10歳年下の女性と再婚し、私は継母と暮らすようになりました。父が再婚する際、私を車に呼び寄せ『新しいお母さんは要らないか？』と言ったんですね。自分の生活の世話がまだ出来ない自分に嫌気がさして、すぐ『ウン』と応えたけれど、納得はしていなかった。

自分が好きな女と一緒にになりたいのに、私（子ども）を理由にして再婚しようとしたことに反発していたんですね。私にとって、母は死んだ母一人だけです。新しいお母さんであろうとして、継母もしんどかったと思います」（この話題に先立ち、Tさんから和久さんに「お父さんが再婚される時、Wさんにどんな相談がありましたか」という質問があったことで、この話が膨らんでいったことを記しておきます）。

その後、日本人は子どもを大切に育てる独特の文化がある話、キャラクターなどが異常に子どもっぽいにもかかわらず大人も熱狂していることなどが話題になりました。中でも、家族間では一番年下の子どもに合わせて言葉（人間関係）が選ばれていて、他の国には見られない独特の家族の関係性（依存や甘え）があるということ。例えば、他の言語で一人称は「私（I）」しかないが、日本の家族間では「（自分のことを）ママは」とか「（舅を指して）おじいちゃんはね」などという言い方をして、子どもとの関係が他の家族間のコミュニケーションや役割をも基準化している。また、このベタとした文化や精神性の特徴を知っておくことで、個別の恨めしい親子関係も少し楽になるのではとも話し、そのあといきなり佐々木を指名し「父親のイメージを出し合いたいのですが、まずは佐々木さんから父親としての佐々木さんを語ってもらい、皆さんでダディーの本題に入っていきますよ」ということになりました。なるほどここまでがイントロだったのですね。



<そして全員がカミングアウトした>

●基調報告／佐々木のこと

家族と別離した後も、子どもたちとは時折会ってはいたが、最近元嫁さんが亡くなったのをきっかけに疎遠となり、(息子、娘とも)結婚したはずがその連絡も無かった。以前、Wさんから「母から受けた夫への恨みが、子の恨みになって伝播してるんや」という話を聞かされていましたが、僕はそれもあるけれど、家族を捨てた父が、なぜ他人のための仕事をしているのか、という疑問が彼らにあるのではないのかとも思っている。しかし本当のところは何もわからない。これが私と子どもたちにある隙間のあらすじでした。



●基調報告を参考に、以下塾生のカミングアウト

- T1君**：あまりお父ちゃんとしてのイメージが無い。夜遅く、朝はいつも寝ている。でも遊び友だちだ。一度だけ姉を殴って父に殴られたことがある。父を越えようとしないう僕を見て母は不思議に思っている(オイディプス・コンプレックスが無いんや、との和久さんからの突っ込みあり)。
- T2君**：父は初めからいなかったのイメージがつかめない。父親は悪党みたいやと思っていた。母親はイコール父親やね。父親のイメージは本とか映画の中のようなもの。
- N君**：父は厳しかった。酒を飲むと暴力を振っているというイメージ。しかし正義感は強く自分の意見は曲げなかった。自分たちが食べられなくとも、子どもにはおいしいものを食べさせていた。
- T3君**：厳しかった。軍人だったせいもあるが、こんなひどいことを子どもによくやるなあと思っていた。とにかく「こうしろああしろ」とうるさかった。
- Oさん**：父(母も)は公務員で、父の上司たちをよく家に連れて接待していた。酔っ払いの人たちの実態をよく観察した。父は酒は弱かったが趣味人だったと思う。盆栽なんかをしてね。反発は無いが、娘としてはもっと別の生き方もあると思っている。父とは元気な内に(今は入院中)、どこかに行ったり、話しをしたいと今では思っている。
- M1君**：父は議員をしていて、葬式のとき兄という人が来た。母が違う兄だった。また結婚式の時は母を式場にそのまま残し、自らはどこかへ泊まっていたり。しかし尺八が好きで趣味人だった。父としての自分については、人に対し結構面白いパフォーマンスをするので、娘は恥ずかしがっているが、彼女の友人たちからは人気がある。
- Kさん**：ひどい父親だと思っていた。授業参観などで幸せそうな友人たちを見て、そんな家族がいるんやと思っていた。大学で部落問題をやりだして、父親のことがわかってきた。今は父親と同世代の人たちとお酒を飲むのが大好き。ファザコンといわれる。
- M2君**：長男が死んで家業である農業を継いだのが18才のとき。21歳の時、86歳の父が亡くなった。22歳の時、死んだ兄貴の嫁さんと結婚した。その1年後母が死んだ。不良をしていたので、親父が生きていた時はよく折檻された。

Y君：殺してやろうと思っていた頃に死んだが、それまでは物は買うは、ギャンブルはするは、借金するは、浮気はするは、拳銃の果てにヤミ金が夜中に取り立てに来るはで、子ども心に親父は家にいなかった記憶がある。まれにどこかへ連れて行ってくれたり、野球をしてくれたがいつもいなかった。母親は父と仲良くして欲しくなかったのだと思う。父親と母親の側につく自分がいて二重人格。家族仲のよい彼女と付き合い、そんな家族のある事が信じられなかった。中2の時借金の末に父が死に、母親も精神を病み入院。まだ3歳の弟がいたので弟のために生きようとした。弟に力をもらったと思う。

Mさん：父はよく物を買った。電化製品が次から次へと我が家にやってきて、いわば「オールウェイズ3丁目の夕日」みたいな家族像だった。しかし自分の母親（姑）を大切にし、妻である私の母から「しょうもない男」と愚痴を聞かされてきたので敵愾心を抱いていた。今となってはもっと気を配ってあげればよかったと思っている。自分自身離婚し、父不在の子どもにとっては、父はやはり必要ではないかと思うこともあり、子どもと2人で話し合ってみたことがある。離婚の事情などを話すと、そんな話は聴きたくないといわれた。ただ子どもにとって、父親の不在とは何なのかを考えている。



<父へ>

いよいよここで部屋の電気を消し、キャンドルライトにして、不思議なムードのなかで父へのメッセージをそれぞれが語りました。

消灯前、和久さんから「うらみ、つらみ、尊敬、憧れ、何でもよいので父親のことを用意した千代紙の裏に書いてください」と課題を与えられていたので、全員の語りが終わった後、みんなの前でローソクの光を頼りに、自分が書いた作品を順番に朗読し始めたのです。これまで書くことを嫌がっていた塾生も、懸命に鉛筆の音を鳴らして筆記していたのが印象的でした。本日の授業の最も秀逸な時間でもあったと思いました。闇の中で、少し辛く、少し恥ずかしくもあり、少し誇らしく、ちょっと涙しながら、しかし父親を全く知らない塾生もいて、それぞれが詩や手紙、語りなどの手法を用い、自分の父に呼びかけたのでした。それは至福の時間でもありました。全員を抱擁したくなるほどいとしい瞬間でもあったと思います。なによりも、ネ

ガティブな父への言葉がなかったことが嬉しいことでした。作品は各自が持ち帰ることにしていたので私の手元にはありませんがDVDには記録されています。その時の言葉はいまだ頭脳の中で飛び交っています。塾生諸君の創作した時間に感謝し、神秘的授業を演出してくれた和久さんにありがとう！を伝えます。給食は授業以上にありがとうございました。



9月26日(土)の授業予定

- テーマ：韓国の祈り
- 講師：ジョン・ホンギョ先生（大阪市立大学准教授）
- 場所：三星温泉B1交流室
- 日時：9月26日(土) 18:30～21:30(予定)

ジョンさんは、2月の塾生修了記念旅行に同行、応援団の中にはおなじみの方も多と思います。韓国ではさまざまな活動を経験し、現在、大阪市立大学の准教として活躍されています。宗教について造詣が深く、韓国の宗教を中心に話していただく予定です。

<WELCOME TO 大柳生!!>

さて、みなさんにお知らせです。10月25日(日)に予定していた収穫祭ですが、10月11日(日)に早まりました。予定より早く私たちの植えた稲が穂をたれ、刈り取りを待っています。またサツマイモたちがツルを伸ばして私たちを呼んでいます。ご一緒に大柳生へ収穫に行きませんか?詳細は近日中にブログでお知らせします。予約を待っています。

第20回目の授業が終わりました

27日の日曜日、芦原橋にあるA´（ダッシュ）ワーク創造館で「Aダッシュ祭り」が催されました。「A´ワーク創造館」とは、地域就労を促し、青年たちの仕事づくりや職業研修・訓練などを実践する仕事創出拠点です。今年も祭りを通じ、受講者や講師、地域の人たちを巻き込んでワークショップ、芝居、フリーマーケットなど数々の出店があり、たくさんの参加者が集まりました。田岡事務局長が「A´ワーク創造館」のスタッフをしている関係で「楽塾」も出店協力をしました。

私たちの出店名は「仮面をつくらう」でした。このテーマは昨年暮れ「楽塾」で行った「仮面舞踏会」をイメージしたのですが、今回は仮面づくりだけを中心に作業しました。当日直前まで道具類や準備であわてていましたが、親子づれ、单身の中・高齢者、若人たちなど20組以上が参加してくれ、多忙なイベントになりました。子どもたちが楽しみ、高齢者のおばさんたちに感謝され、「楽塾」の実践がここでもちよっと活かされた気がしています。もちろん塾生たち数人も来てくれましたよ。

09年9月28日 塾長



9月26日（土）の授業

- テーマ：韓国のごころ
- 講師：全泓奎（ジョン・ホンギョ）先生（大阪市立大学准教授）
- 場所：楽塾（三星温泉B1交流室）
- 日時：9月26日（土）18：30～22：00
- 参加者：14名（スタッフ・講師含む）



前半——全さんの経歴

全先生と私は個人的には様々な催しの場でお会いしますが、「楽塾」では今年の2月、塾生の修了旅行にご一緒だったことが記憶に残っています。あの頃から講師の予約をお願いしていて、今回の授業となりました。先生の授業の前半の主テーマは、全さんが来日するまでの韓国での学生生活や、セツルメント（貧困救済活動）の実践が中心になりました。授業後半はそれを踏まえ、来日以降の実践や研究者としての課題テーマを語っていただきました。

<居住へのたたかい>

画像に<居住へのたたかい>というタイトルが映し出され、「(佐々木から) 頂いた内容は『韓国の祈り』でしたが、本日のテーマはこれです」というところから始まりました。「私は大阪に来て1年、日本は99年以来11年になります。東京で学位を取りました。韓国では身体剛健なら軍隊に行かなければならず、私は幸いにして宗教兵（注：軍隊の中で宗教行事を専門的に担当する兵隊さんのこと。韓国ではほとんどの人々がプロテスタント、カトリック、仏教という宗教をもっているため、兵隊さんの中でも宗教へのニーズが非常に高く、それに答えるため特別に設けた兵隊さんのことを言う）として入隊しました」。

【韓国に関する基本データ】という表題では、日帝時代、朝鮮戦争時代の歴史が語られます。

「大阪は8割がたチェジュド（済州島）からの移動が多い。日帝時代の戦前の1920～30年代は土地を奪われ続けた時代で、多くの人たちが満州やロシア、日本へと渡ってきた。とくに日本へは140万人もの人たちが徴用（佐々木注：韓国民を強制的に日本の軍務や雑務などに従事させた）も含めて渡ってきた。韓国の北方地方からの日本への移動は少なかった」と話しました。「50年代に朝鮮戦争が勃発し、北と南に分かれてしまった。韓国は日本の国の4分の1くらいの面積で、人口4,800万人強で、北の人口を合わせても日本の人口のほうが多い」。おもわず私は地図を出して国の大きさを確認してしまいました。へえ～日本って意外と大きいんだ。

韓国では19歳以上が軍隊に入隊しなければならない義務兵役制がある。その兵役年数も大統領の権利と意思で変えられる」といい、現在では短くなっていて「24ヶ月くらいだ」そうです。全先生は「宗教兵として勤めました」。



【私の軌跡 89年3月～93年6月（学生運動・軍隊の宗教兵）】 という表題では、全先生が後に思想的影響を受ける事件から語られました。

「80年に5.18事件（佐々木注：韓国光州市で起きた学生や市民の軍部への反乱。多数の死傷者が出た）があり、韓国全土が反軍闘争運動のうねりの中にあった。当時の大統領は全斗煥（チョン・ドウファン）であり、次代の大統領は盧泰愚（ノ・テウ）で、この二人は陸軍士官学校の同期生であった」そうです。「大学に入るまでは受験に向けた厳しい生活があり、大学に入ると80年の光州事件や、チェジュドで起こった4.3事件（48年4月3日、チェジュドで行われた韓国の単独選挙に反対し武装蜂起する島民を虐殺した事件）など悲惨な国家的犯罪を先輩を通して教えられ、恋も遊びもしたかったが、この頃社会への目覚めを覚えた」と述懐します。「自分自身、学生運動に関わり警官に捕まったこともあったが、自分に信念が持てず、運動への総括も出来ないまま、91年軍隊に入隊。仲間からは裏切り者といわれたが宗教兵として勤務した」のだそうです。



【私の原点 94年8月～98年11月】 では除隊後の全さんが語られます。

「93年除隊になり、革新的なジャーナリストになりたくて勉強していた。この頃、多くの若者たちが都市に流入し、そのため農村が疲弊し農村の支援活動が盛んになった時期である。再開発事業が盛んになり、私は貧困地への支援活動を始めた（貧活隊）」。

全先生は800世帯ぐらいの再開発地域で民間主導のまちづくりに関わっていったそうです。

【貧困活動の具体的取り組み】 では全さんが関わってきた活動について語られます。

「94年8月から貧活隊として地域に住み込み、住民会議を開いたり、地上げ屋などの暴力にも抵抗してきた。公共住宅などの立ち上げを提案したり、協同組合を組織してきた。その結果、大学生生活を9年間続けたことになる」と話します。全先生は韓国都市研究所というところで4ヶ月間のトレーニングを受けたそうです。「ここは貧困層のための研究をするところ。なぜ貧困層への略奪が起きるのか。日本のまちづくりの取り組みに興味を持ち、99年来日した」。先生は「立地条件の悪い地域はまちづくりもうまくいけてない」と話していました。

この頃、日本のホームレス支援にも興味を抱き、東京の支援団体と関わり、当事者のアクションを大切にするワークショップをしてきた。渋谷宮下公園で、当事者が当事者を訪ねて聞き取りし公園自治会を組織した」といいます。「これら一連の作業が私の研究である。居住の問題、再開発の問題、そこから立ち退きを強制される状況は、ホームレス問題に近づいてくると考える」。この頃、先生がホームレス問題に直面したことがよくわかりました。

その後名古屋のホームレス支援、フィリピンのスラム問題なども研究し続けます。「07年、韓国のノ・ムヒョン大統領が居住福祉課を創設し、住宅の器だけではなく居住と生活福祉をプラスした政策を具体化していく。私はその行政担当者として赴任した。しかし、イ・ミョンパクが大統領が就任するなど先行きが不透明となった。そして08年、大阪市立大学に勤務することになった」、というのが私たちとのつながりの初めでもあつ

たのです。

【**祈りの場**】では、桜ノ宮にある在日の人たちの祈りの場について語ります。

「大阪は同和地区、在日などが集まる移民社会、多元社会である。桜ノ宮のスラムにある廃品回収の人たちは、現在不法占拠の問題に立ちあっていて、ここで『コリアン・コミュニティ研究会』を開いている」と話していました。大川沿いに建つバラック小屋はチェジュドから渡ってきた人たちの〈祈りの場—龍王宮〉であると聞き、私は幼い頃、省線（環状線）に乗るたび窓からあの場所を眺め知っているだけに、認識を新たにしました。



後半——貧困層と住宅

後半は、先生の現在の研究活動が中心となるトークとなりました。

＜韓国における貧困層コミュニティの形成と、踏みにじられた居住へのニーズ＞

【**都市低所得層集住地（スクォッター）の形式**】では、韓国における20～60年代にかけてのスラムの変遷を語ります。

【**住民はどのようにして自分たちの居住と福祉を築いてきたのか**】では、50～70年代は、スラムなどを強行に開発する国家への反射的対応であったけれど、80～90年代にかけては自らの居住と言う社会的権利意識の向上へと展開していく経過を説明。

【**開発することへの自由、自助開発型コミュニティ福祉システムの創出**】では、住居と同時に縫製業など仕事作りや文化活動、お祭りなどまちづくりを実践し、地域中心の信用協同組合や文化センターの創出など韓国での関りが語られます。ここではオーガナイザーと住民とがコラボレートし、資格や会社設立などの教育・研修などが盛んになってきた経過があることなどの解説がありました。

＜未来に向けた戦略＞

協同組合型コミュニティワークや生産協同組合活動、エンパワーメント・パートナーシップ型のコミュニティワーク展開など未来に向けた活動の状況が語られましたが、いまだ残っている課題についても指摘していました。

【**残された課題：不安定・不適切住居**】では、ビニールハウスやスクォッター地区が取り残され、また寄せ場など住環境の問題が解決していないこと。

【**誰のための再開発**】という表題では、再開発事業で住居を追われた人たちがビルを占拠して戦い、警察権力の暴力を写した映像を見せ、一体誰のための開発なのか、という疑問で授業が終了しました。

<給食時間は韓国タイム>

給食を楽しみながら、全さんへの質問が集中しました。主に韓国歴史、暮らし、映画、芸能など多岐にわたるディナータイムとなりました。



10月3日（土）の授業予定

- テーマ：私のポートレート
- 講師：山崎安敦君×本田真大君
- 場所：三星温泉B1交流室
- 日時：10月3日（土）18：30～21：30

今週の講師は、近畿大学熊本先生の紹介を契機に、昨年来「楽塾」の取組みに興味をもち、塾生として参加してくれている山崎、本田両君が講師となってくれることになりました。自分たちも何かやってみたくて提案があり今回の授業として実現しました。記憶の中の自分と再会するという試みです。「楽塾」は今後も青年たちの登場を応援します。

<WELCOME TO 大柳生!!>

10月11日（日）大柳生へ収穫祭に行きます。

- 集合時間＝午前9時
- 集合場所＝ビアン・リぷら前
- 費用＝3,000円
- 参加希望の方は、10月4日までにご連絡下さい。

第21回目の授業が終わりました

<変身>

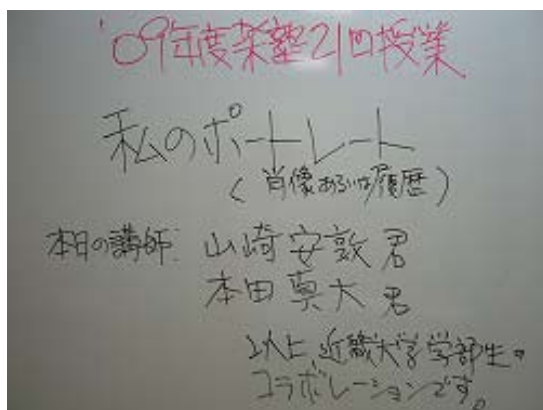
ある朝、ザムザが起きると一匹の巨大な虫になっていた、という有名な一節を思い出していました。梅田に所用の折、偶然阪神百貨店側から大阪駅方面を眺めて驚きました。大阪駅改修工事の正面はクレーンが林立し、北側にはさらに高層ビルが築かれ、ヨドバシカメラの不細工な景観も影が薄くなりつつあります。また、阪急百貨店がいつの間にか天を突く摩天楼に早がわりし、隣のナビオが小さくなってしまいびっくりしました。ほんのちょっと見ないうちに、都市の風景とスケールが加速度的に変化していきます。人のリズムとは関わりなく、都市がザムザのごとくアツという間の変容を繰り返すのです。ここではイエローカードやレッドカードなどは無効で、わがままな欲望の化身だけが君臨しているように見えるだけです。

広島県福山市の景勝地「鞆の浦（ともうら）」を埋立て、港湾に橋を架ける計画に反対する訴訟に対し、地裁は「景観の恵みを享受している人は、景観侵害に密接な利害関係を持つ」と認め、「法的保護」を必要とした判決を出しました。永らくの景観論争はまちを二分してきたといいます。でも現実に事業として大きく動いていず、ゆっくり裁判などを通じて考えていこうとすることで、何とか踏みとどまったという印象です。群馬県のハツ場（やんば）ダムみたいな事態になってしまうともう元に戻らないですからね。何でもかんでも急いでやると、ロクでもないモンスターを生む結果となるのです。

09年10月5日塾長

10月3日（土）の授業

- テーマ：私のポートレート
- 講師：山崎安敦君×本田真大君—コラボレーション
- 日時：10月3日（土）18：30～22：30
- 場所：楽塾（三星温泉B1交流室）
- 参加者：12名（スタッフ・講師含む）



—前半—

<自分史を確認する>

山崎君は本年1月初頭から参加。その後、友人の本田君も参加してくれました。大学生活だけではなく、アルバイトなどにも多忙なか楽塾授業を楽しんでもらい、「自分たちが企画する授業をやってみよう」と話してくれていました。2人の塾生が講師となり大変興味深い授業になりました。このレポートが、その楽しさを反映できているといいのですが。

授業冒頭、本田君は「農学部に学んでいます。とくに現在は環境問題が注目されていますが、僕は大学の環境管理学科で学んでいます」と自己紹介をします。山崎君も「経営学部で学んでいます。高校では商業科で学んだ動機があり近大の経営に来ました。発展途上国の教育問題に興味があり、公共経営をゼミで取りたい。現在教職課程を取っています」と自己紹介をしてくれました。

2人が作成した年表があります。この年表は1935年から2008年(元号つき)まで記され、「年齢」「自分史」という空欄がそれらのうしろ一列に並び、最後に「時代背景」としてそれぞれの時代の主要なトピックが記されています。2人は各塾生たちに誕生年月を聞きながら、塾生が生まれた年の時代背景を話してくれます。

そして誕生年を0とし、以下2008年まで順番に年齢を加算していくのです。たとえば僕なら1944年(S.19)を0とします。45年は1、46年は2…というように。2008年では64となりました。そうするとその人の各年の年齢に合わせてのトピックがわかりやすくなるのです。そして自分史の欄にそれぞれが自らのエピソードを年ごとに記入していきました。僕が7才で小学校に入学していた年なら、プロレスの力道山がデビューした年であったとか、29才で結婚した年は「燃えよドラゴン」が上映されたとかがわかるわけです。

自分史を記入する参考として「私のポートレート」というシートがあります。このシートには25項目の質問項目があり、後半で行う、塾生に質問をするツールにもなっているのですが、この質問表を参考にして自分史のトピックを埋めていこうというものです。「初恋の年」「20歳の頃のあなた」はまだ可愛いのですが、「初体験の年と相手の名前」「史上最大の失恋」などは自分史に記入する分にはいいけれど、なんとなくヤバそうで、スキャンダルな事態になる予感がありました。

塾長の高年齢をあそんだそのあと、山崎君から彼の誕生した89年には、彼のおじいさんはもとより曾(ひい)、および曾々おじいさんが存命であったという話を聞かされました。こうして塾生それぞれのエピソードを聞きながら前半を終わります。



—後半—

<3分間のポートレート>

「鳩山由紀夫、麻生太郎、福田康夫…」というように歴代の首相の名前を塾生にたずねながら、「それでは、みなさんの誕生した年の首相は誰だったかわかりますか」といきなりな質問に入りました。本田君が誕生した88年は竹下首相、山崎君の89年は海部首相だそうで、僕にとってはこの前の出来事なんですね。ちなみに僕が生まれた年の首相は東条英機だった。大日本帝国万歳！がドツぽにはまり込んでいく時代ですよ。

さていよいよ前出「私のポートレート」シートの25項目中からピックアップし、塾生が一人の塾生に、3分間限定の質疑応答をします。教壇前の椅子に座わり、各自何を質問されるのかわからず緊張していました。以下は全員の“調書”です。

M君 Q：ギャンブルで一番儲けた年と金額(T1君からの質問)

A：6万円張って4点張りで142万6千円の配当があった。後先これが最高。

- T 2 君** Q：一番輝いていた年（T 1 君から）
 A：19歳の時、交通事故により瀕死の重態を負い、「3日間ずっと眠り続けてたやんか」と隣のおばさんから言われた。生きて生まれ変わったというイメージで、最初病院で吸ったタバコがハイライトだった。改めて生きたという実感を。
- I 1 君** Q：大人であると実感した年（I 2 君から）
 A：まだ大人を実感していない。
 Q：初恋の年（M君から）
 A：小学校の頃
 Q：今までに一番大きな買い物（T 1 君から）
 A：ギターです。
 Q：初めて働いた仕事（Oさんから）
 A：パン屋さん。
- N 君** Q：初恋の年（Sから）
 A：中学2年ごろ同じクラスの女の子に思いを寄せる。
 Q：佐々木に出会った日（T 2 君から）
 A：2006年、巡回のMさんと同行しくらし応援室の事務所に行き、仕事を紹介してくれた。
 Q：実家を出た時（T 1 君から）
 A：87年。トヨタの期間工として働き始め、愛知県豊橋市、安城市など場所を転々。



- I 2 君** Q：忘れられない思い出（Aさんから）
 A：小3の時、近所の海水浴場にたくさんコンドームが落ちていた。男女が海水浴場でエッチをした名残だが、僕らは100個も集めて友だちに配った。校長に呼ばれて怒られたが、なぜ怒られるのかわからず悲しかった。中2の時それがわかった。校長が怒るはずだとわかった。
- O さん** Q：大人であると実感した年（T 2 君から）
 A：中学生の頃、彼氏が出来て嬉しかったが自意識過剰で、彼とはうまくいかなかった。大人になった気がしていた。でも最近その人とお付き合いがあります（ソーですか）。
- A さん** Q：私にとってのアイドルとの出会い（T 2 君から）
 A：3才の頃、郷ひろみを見てお尻を振っていたようです。でも今はキンキキッズです。
 Q：忘れられない思い出（Sから）
 A：9年間の猫との暮らしが忘れられない。



T 3 君 Q：好きな場所との出会い（T 2 君から）

A：若い頃、松島、尼崎、初島の遊郭通いが忘れられない。25才過ぎても行っていた。印象に残っている女性は美穂ちゃんだった。

T 1 君 Q：結婚した年。子どもが生まれた年（M君から）

A：07年結婚、08年子どもが出来た。

Q：人生のターニングポイントとなった年と出来事（M君から）

A：大学に入ったこと。北海道まで行ってええ加減な選び方で入学したが、いい人たちに会え「夢は無理に持つものではない」と感じた。



H 君 Q：40才の頃のあなたは（T 1 君）

A：とりあえず結婚したい。子どももいてPTA会長とかして（塾生たちがエ〜？）なにか？

Q：今までに経験した大病とその年（M君）

A：幼稚園の頃、目の辺りを打ちつけて意識不明となったこと。

Y 君 Q：一番輝いていた年（T 2 君）

A：これからが一番輝いて欲しいと思う。現在水泳のアルバイトで子どもたちを相手にしているが、その時が一番楽しい。高1の時バイクを買ったが、16才の時ローン返済のため、年齢詐称でパチンコ屋でアルバイトをして全額返した。

「塾長をトリにして始めます」と山崎君が言った時から、なんだか不安だったのですが、僕の番ではいきなり質問⑩が降りかかってきました。おそらくこんなことではと予測していたことが大当たりでした。塾生諸君には聞いてもらいましたが、ここではオフレコにしておきます。

山崎君や本田君は、いかに親しい友だちであっても、互いに知らないこと、わからないこともあるけれどそれが面白い、というようなことを話していましたが、僕もそれには大変興味を感じました。終始丁々発止

の賑やかでユニークな授業になったと思う。いい授業をありがとう。山崎君、本田君に敬意を表します。
この後の給食は、授業がそのまま突入しておなかの消化がよかったです。



10月10日（土）の授業予定

- テーマ：極私的少女マンガのすすめ
- 講師：柴田 剛さん
- 場所：三星温泉B1交流室
- 日時：10月10日（土）18：30～21：30（予定）
- 授業料：1000円（給食代を含む）

コーラの大好きな柴田さんは市大の地理学博士課程で学び、最近は西成人権協会では仕事をしています。これまでいろいろな調査や催しで一緒したこともあります。大の漫画愛好家で、それも少女マンガにかけては半端ではない！楽塾には是非と思っていたので、やっと念願が叶いました。柴田さん、コーラを用意して待っています。

大柳生へ！いよいよ収穫祭

10月11日（日）大柳生へ収穫祭に行きます。

- 集合時間＝午前9時
- 集合場所＝ビアン・リぷら前
- 費用＝3000円

第22回目の授業が終わりました

<2人の柴田さん>

柴田さんは、最近まで住吉公園の管理業務や清掃作業をしていたので、住吉公園で働く塾生諸君は全て柴田さんを知っているわけなのですが、本日の講義の柴田さんとはつながらず、TさんやIさんは顔を合わせて「今日の先生はあんたやったんかいな」と挨拶していました。柴田さんの自己紹介は、毎号購入する少女マンガ雑誌の話題から始まりました。一般的に流通している漫画雑誌すら私たちにはわからないのに、いっそうマニアックな少女雑誌名を上げながら話は進みました。

09年10月15日塾長

10月10日(土)の授業

- テーマ：極私的少女マンガのすすめ
- 講師：柴田 剛先生(大阪市立大学大学院博士課程)
- 場所：三ツ星温泉B1交流室<楽塾>
- 日時：10月10日(土) 18:40~21:30
- 参加者：10名(講師スタッフ含む)



<柴田流マンガワールド1>

少女マンガは小説が源流？

「少女漫画の定義は、『何らかの形で恋愛を扱ったものが主流であり、絵柄としては可愛らしく綺麗な印象を与えるものが多い。作品世界の情趣を大切に背景をリアルに描きこむことは避け、心象を具象化した背景、コマ割りなどを駆使し、人物の感情の流れを重視した演出に優れる』らしいとウィキペディアには書いてあるのですが、はっきりした定義はないのです。まあそれなりの表現なんでしょうが」。

「雰囲気的に少女小説を引き継いだと思われるのが少女マンガです。初期は男性作家が多く描いていますが、50～60年代初めに出てきた貸し本屋時代に始まる漫画家の貧乏時代も反映していると思います。この時代の作家のちばてつや、つのだじろう、石ノ森章太郎、横山光輝、椋津かずおなどが描いた少女マンガは、現在の彼らの作風とは信じられないぐらいタッチが違う」と配られた資料を見ながら説明します。私は貸し本屋世代で育ち、ほとんどが男中心の劇画を読んでいて、当時の漫画家には親しみがあるのですが、この資料を見る限り記憶の中にその画像の片鱗があります。

「戦前には少女マンガのジャンルはなかったが、戦後花が開き、70年代に少女マンガがクローズアップされてきます。『花とゆめ』(74年)『別冊少女コミック』(70年代)、『ぶ〜け』(79年)などで、『りぼん』、『マーガレット』は元祖みたいなものです。80年代に入り、少女マンガはよりマニアックになっていくのです」。

「ジャンルとしては、狭義の少女マンガは中高生向けなんです。中高生以降、物足りなくなった大学生から20代の社会人が『コーラス』『クッキー』『プチコミック』などの「ヤング・レディース」系とされるジャンルの雑誌に移行し、「レディス・コミック」系の雑誌は30代以上の購読層の女性が対象だと言われます」。



「同性に愛を」テーマに

ボーイズ・ラブ(BL)といわれる“やまなし・おちなし・いみなし”つまり「やおい」系は、男同士の愛を描くジャンルを指すらしく、雑誌では『ジュネ』が最初に出たらしい。しかし、ゲイを意識したり啓発するものではないという。80年代以降、「宇宙戦艦ヤマト」など男社会の漫画を全く、異訳・異化し男同士の友情、恋愛として解釈する層があるという。「これらの源流は三島由紀夫・栗本薫・森茉莉などの小説家たちが描く美少年系に影響を受けたもので、80年代後半の『キャプテン翼』などは、男同士の関係を描くマンガが大好きな女性たちの中で一気に広がってブレイクした」のだといいます。竹宮恵子や萩尾望都などの作家はこのジャンルに親近性があるらしい。

「90年代オリジナルな雑誌が続々発刊され、単行本や雑誌類が本屋の単独コーナーで整備されてきました。最初に角川書店が参入し(ルビー文庫、94年)、徳間書店やフランス書院などの出版社がその後参入して来ました(柴田補足:この時は失念していましたが、白泉社がいち早くレーベルを立ち上げています)。また集英社のコバルト文庫(少女小説の老舗)では、男子恋愛を基本にした小説を女性たちが読むという現象を活かし、BLマンガの普及を押し上げ、最近では『ダ・ヴィンチ』あたりもそんな作品の特集を掲載している」と言います。

「ティーンズ・ラブ系の雑誌は10代向けに編集されたもので、カジュアルな表現で、直球勝負の性的表現を駆使しました。『デザート』(90年代中ごろ)、『チーズ』(94年)などの雑誌によって過激さを競うようになっていきます。90年代後半見られるようになったガールズ・ラブ(G L)系(「百合」系)の火付け役になったのが少女小説の『 MARIA様が見ている』(集英社コバルト文庫)でした」。

このように、私にとってはほとんど知らない世界が柴田さんの日常であったのです。かなり重厚です。このあと後半につながります。



<柴田流マンガワールド2>

マンガはサブカルはたまたカウンターカルチャー

柴田資料「少女マンガの現在形?」を参考に、「少女マンガというメディア自体は消費文化であり、マンガがアートになってはいけない。あくまでサブカルとして存在すべき」と言う柴田さんの意見には賛成です。私自身中学生の半ばまでマンガを読み、マンガを描き、そしてマンガを卒業した者としては、マンガをカウンターカルチャーと位置づけ、アートへの橋渡しをする役目を持つものと思うのです。

「恋愛だけではなく、仕事、友情、家族、社会派的なテーマを扱う作品も多く、それらを自らのテーマとする作家もいる」そうです。「マンガはアニメやドラマ化、映画化、ゲーム化、ノベライズ、コミック化など広範囲にメディアミックス化されてきており、男性読者を広げる元にもなっている。たとえば『ハチミツとクローバー』などの実写は、普段マンガを読まない層が映画に影響を受けマンガに回帰することになった。ただアニメ化や実写映画化などでは原作のイメージからずれる作品もあり、個人的には見たくない作品もある」と言います。

柴田的動機

「姉が少女マンガを読んでいたのが私のマンガへの動機である。小学校高学年の時に少年マンガを読むことになる。大学に入って少女マンガに逆戻りし、その後ずっと足抜けできずにいる。この頃、男子寮を背景にした『ここはグリーンウッド』という全寮制の男子校が舞台の作品に影響を受けた。また、小学校の時に読んでいた『生徒諸君』の影響で教職課程を取ろうと決意した」。

さて今夜の柴田氏最後のメッセージは「とにかく少女マンガは面白い、と言うのが結論」であるそうです。このあと少女マンガという枠組みをはずし、印象深かったマンガのタイトルを塾生に語ってもらいました。

Iさん：鉄腕アトム、鉄人28号

T2さん：のらくろ(かなり古い!)

Aさん：ガラスの仮面。須藤真澄を読んでいます。

柴田さん、少しばかり貴君にフェティシズムを感じてしまいました。しかし全く異界のマンガ世界を発見したのも事実です。違った世界同士が結び合うのが共生社会といいますが、マンガワールドだけでいえば幻想だということもわかりました。2時間の長いあいだご苦勞様でした。



おまけ 講師のいない給食・・・

「勉強の後はみんなで給食。講師と一緒にわいわいがやがや」のはずが、事務局の連絡ミスで柴田さんは次の予定があり、残念ながら塾生のための給食となってしまいました。塾生も柴田さんにマンガの質問ができると考えていたようで、申し訳ないことをしてしまいました。これからはこのようなことがないように気をつけます。

10月11日（日）の授業予定

- テーマ：収穫祭
- 講師：南垣内貞史氏
- 場所：奈良県大柳生
- 集合場所：ピアン・リぶら前
- 日時：10月11日（日）9：00～17：00（予定）
- 授業料：3000円（交通費・食事代を含む）

放送禁止用語ならぬ「投稿禁止用語」

さて、今回の授業参観ですが、原稿をブログにアップしようとしたら、「ブログに投稿できない文字列が含まれています。」とアップを拒否されました。Yahoo! のホームページには、<http://help.yahoo.co.jp/help/jp/blog/blog-71.html>

- ・表示の乱れをおこす可能性のある連続文字記号
- ・コントロールコードの一部
- ・迷惑行為などの問題があったURL、ドメインなど
- ・ガイドライン違反の疑いのある言葉

が投稿できないとありますが、個別の言葉については回答できないとのこと。そこで原稿を読み返し、怪しい言葉を探し、3つの単語を修正したところ、なんとか投稿できました。

- ・ボーイズ・ラブ（BL）→B（Boys）L（Love）
- ・ティーンズ・ラブ（TL）→T（Teens）L（Love）
- ・ガールズ・ラブ（GL）→G（Girls）L（Love）

少年・少女を犯罪から防ぐ意味で「ガイドライン違反の疑いのある言葉」に触れていたのかもしれませんが、真相は不明です。少し時間はかかりましたが、「放送禁止用語」ならぬ「投稿禁止用語」があることを知ることが出来た貴重な時間でした。

第23回目の授業が終わりました

<天晴れ秋晴れ！>

11日は大柳生に行ってきました。楽塾の収穫祭です。朝8時前、天下茶屋のレンタカー店で予約の車を借り、9時に塾生を乗せてビアン前を出発しました。参加者は6月の田植え参加者と同じ5名。奈良からは事務局長ファミリーの6名が大柳生で合流します。シャキッと晴れた秋空の第二阪奈道路は、奈良市内で往復路とも少々渋滞でしたが、好天候のもとお米とサツマイモを収穫してきました。

ところで12日がなぜ祝日なのかかわからず、稲刈りの帰宅後カレンダーを確認すると「体育の日」と書かれていて、なるほど、他人に体育なる祝日を作ってもらわずとも、楽塾は身体にも気持ちにも常にほどよいプログラムを提供していることよ、と自画自賛しながら納得したのでした。

10月11日（日）の授業

- テーマ：収穫祭
- 講師：南垣内貞史氏
- 場所：奈良県大柳生
- 集合場所：ビアン・リぷら前
- 日時：10月11日（日）9：00～18：40
- 授業料：3000円（交通費・食事代を含む）



<稲刈りはおなかが減る>

青少年野外活動センターに着いたのは10時を半ば回っていました。ほどなく田岡君たちも到着し、ここで野良着に着替え南垣内さんの田んぼへと向かいます。田んぼでは南垣内さんのほか、娘さんとそのパートナーがすでに刈り取られた稲穂を束にする作業をしていました。去年の畑は泥田化していて、稲を刈りながら泥田から脚を引き抜くのに苦勞をしましたが、今回は田んぼがかなり乾燥していて刈り取りは大変楽でした。ただ、水草が繁茂していたとみえ、稲にはたくさんの雑草がからまって稲と雑草の区別が見えにくい場所もありました。

参加者の川崎さんはのっけから「おなかがすいた」の連続で、休憩時に南垣内さんの娘さんから全員に渡されたおにぎりに大歓声を上げ、さながら炊き出し風景でした。田んぼにはたくさんの生物が生息していてクモ、カエル、イナゴ、カマキリなど稲を刈り取るたびに、これらの生物たちは何事が起こったのかとばかり、驚いて四散していきます。また赤とんぼが好奇心に誘われ寄ってきました。この1反（300坪）に満たない面積での収穫高は大体、家族2人が1年間消費する分量であるといいます。ちょうど2時間ほどをかけ刈り取りが完了しました。昼食のためいったん活動センターに戻ります。



<BBQで昼食>

昼食はバーベキューです。活動センター野外炊事場で調理の準備を始めました。すでに事務局長が火吹き竹で備長炭(上等らしい!)に火を起こしており、みんな火吹き竹を奪い合って炭火に勢いをつけました。ソーセージ、タマネギ、肉、豚肉、かぼちゃ、トウモロコシ、おくら、しし唐、ジャガイモ、そして秋刀魚まで。いつもどおり、焼きあがってくる食べ物を誰より早くお皿に盛って、一足先に食べているMさんがいました。「みんなが席についてから一緒に食べようや。自分だけ先に食べたらかん！」と塾長にしかられていました。それでも黙々食べ続けるMさんで、全く自分のことしか考えていないんだから。

田岡家の子どもたちはいつの間にかセンターのあちこちまで遊びに出かけています。おなかをしっかりと満足にした後は「甘いものが欲しい」とは川崎さんでした。確かにデザートかなにか買っておいたほうがよかったかも。私たち甘党は、食後のデザートがおなかを整える最良の定番なのです。食後は残飯やごみ類をまとめて自動車に詰め込みます。後半はお米の田んぼから 100メートル離れたサツマイモ畑に移動します。



<今年は不作?>

畑の全面がイモの葉とツルに覆われていました。それだけならサツマイモの大豊作と見えがちなのですが、マルチを剥がし、いよいよ畝にシャベルを入れて掘り起こしていくと出てくるイモたちが小さいのです。たまには大きなイモたちも現れるものの全体が小粒です。しかもシャベルを土に突っ込む角度によって、折角の作物を切断してしまい元も子もなくしてしまうこともあるのです。そんな時は「下手くそ」などと情け容赦のないヤジが飛んでくるのです。土の中の作物がどこにあるのかのカンを働かせる、かなりのキャリアが必要なようです。いずれにしても大きさ、収穫量ともに不作の印象を抱きました。

時折見上げる大柳生の空は素晴らしかった。青空を背景に、幾筋もの白雲が刷毛で描かれたように天空の全視野を飾っていました。このように、自然が見せるわずかな一瞬を目撃できることが、都会から離れた私たちの幸福といえるでしょう。

お米は南垣内さんが脱穀し、改めて取りにくることになりました。おイモさんは全てを車に乗せて持ち帰ります。今回の収穫祭の特徴は、田岡君の家族や肉親たち、とくに3人の子どもたちおよび1匹の犬の登場で、いつもと違うファミリーな雰囲気の中和やかな作業が出来ました。塾生たちも子どもたちとの交流でリラックスし、かなり満足していたようです。帰阪時は6時半。もう真っ暗になっていました。8時前にレンタカーを返し、やっと落ち着くことが出来ました。前日の授業に続く課外授業でもあり、帰宅後の睡魔はすぐにやってきたのでした。



10月17日(土)の授業予定

- テーマ：メタボ追放4
- 講師：藤原敦子先生(空手サークル長橋育勇会代表)
- 集合時間：19:00 三星温泉B1交流室にて
- 練習場所：もと西成青少年会館剣道場

空手は、たくさんの授業の中では珍しく、サークルとして楽塾に協力してもらっている団体で、今回で4度目の練習となる楽塾唯一のスポーツ授業です。空手は格闘技ですが、わが塾生たちは未だ実践格闘はしていません。いわば体力づくりの段階とっていいでしょう。そのうち組手などが出来たらいいなあと思っています。涼しくなってきた秋のひとつき、一緒に汗をかきませんか。出来ればお風呂もね。

★お願い

24日の大柳生への収穫祭が11日に繰り上がったため、17日の空手授業を最後に第3クールは終了となります。第4クールの楽塾は、11月7日から始まります。お間違いのないように願います。

第24回目の授業が終わりました

<あの素晴らしい音楽をもういちど>

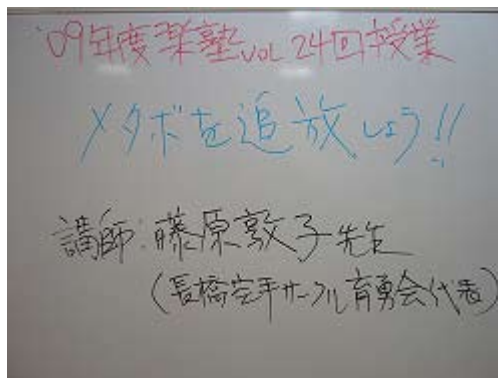
楽塾授業準備中のお昼過ぎ、インターネット・ニュースで加藤和彦の死を知りました。68年、僕が20代前半だった頃、フォークルことザ・フォーク・クルセダーズというアマチュアバンドが衝撃的に登場して以来、加藤の都会的モダンセンスに注目していたのですが、このニュースにはちょっとショックを受けました。

私事です、「なび」という定刊紙に連載中の「この逸曲」（11月1日発行予定）に、偶然加藤がリーダーをつとめる「サディスティック・ミカ・バンド」のことを書きました。ちょうど脱稿したあとだったのでなおさら苦い余韻に陥っています。そういえば同紙7月号で忌野清志郎の記事を書き上げた直後、清志郎君が亡くなってしまったということがあります。僕に責任はないと思うのですが、なにやら因縁めいていて気持ちが悪く落ち着きません。それにしても「帰ってきたヨッパライ」は命を大切にしようと言うメッセージも込められていたはずですが、ご本人が自殺とは。世も人も常ならずなのだ。

和彦さんのご冥福を祈ります。あの素晴らしい音楽たちをありがとう

<10月17日(土)の授業>

- テーマ：メタボ追放4
- 講師：藤原敦子先生（空手サークル長橋育勇会代表）
- 練習場：長橋青少年会館剣道場
- 給食：三ツ星温泉B1交流室<楽塾>
- 日時：10月17日(土) 19:00～19:50
20:00～21:30(給食)
- 参加者：7名(スタッフ2名を含む)ないように願います。



<剣道場で空手練習>

いつもの三星温泉で集合したあと、今回初めて青少年会館での練習となりました。藤原さんたちが日常練習に使っている長橋小学校では、現在学校の耐震改良工事がすすめられていて、練習場所の使用が難しくなっています。今後一定期間は、長橋の青少年会館を利用して練習が続けられる予定です。その練習場は剣道場で1階にあります。かなり広い練習場の床にはマットが敷かれていて、大変練習がしやすいと思いました。

<館内に響きわたる蹴りの迫力>

今夜もM先生の指揮で空手の練習が始まりました。藤原先生の息子さんが、ウォーミングアップのための柔軟体操をリードしてくれました。時折「もっと大きな声を出して!」とM先生から檄が飛びます。ウォーミングアップが終わるといよいよ練習です。

いつものように顔面を両腕で守り、半ば体勢を半身に構えながら左拳、右拳の上段打ちを順番に開始しました。10回のセットですがもう汗が滲み出してきます。このあとは脚蹴りを練習しました。左右の脚で相手のみぞおちを想定し蹴り上げするのです。塾生たちの声がなかなか出ず先生から再三檄が飛んできます。練習の合間に休憩をはさみ、水分の補給をするのですが、今回はその水分であるお茶を三星温泉に忘れ、練習途中で教室へ取りに帰るといったアクシデントもありました。

今回もミットを利用して廻し蹴りの練習をしました。昨年初めての練習日、T君のミットへの迫力ある快音が印象的だったのですが、今回も重量ある廻し蹴りを見せ、大きな音を立てる元気なT君に安心しました。藤原3兄弟の模範演習ではさすがミットにヒットする音が剣道場に気持ちよいぐらいに響いていました。今回、私は少しばかり息切れしてしまい、不本意な練習になったと実感しています。やはり日常的に身体を痛めつけておかないと、とくに瞬発力などが必要な格闘技についていくことが難しいでしょう。こうして私たちは藤原兄弟の空手演舞を見せてもらいました。



<移動稽古>

この日ははじめての移動稽古をしました。広い館内なので、この日練習した技を取混ぜ移動しながら前進していきます。振り突き、左右の上段突き、左右の足蹴りなどを前進しながら練習を続けました。このあと、突きや蹴りを入れながら後退していくスタイルで行う、というバリエーションで移動稽古をしました。これは自分の身体を移動するぶん、視野が変化していくため新鮮な感じがします。

最後は円形になって上段突きの練習をし、終了しました。以前、M先生に組み手要素のある練習をお願いしたことがあったのですが、もう少し様子を見ながらということで保留されていました。しかし、今回M先生は、今後はもっと実践的要素のあるメニューを作って進めていきたいと話され、これからの空手に期待をしてしまいました。

教室に戻ると今度は給食です。前山僧侶から頂いた新米をいつもどおりの水配分で炊いたものだから、でき上がりが少々おかゆ状態になってみんなに笑われてしまいました。しかし元々おいしいお米なので、今回は人数以上に炊いていたのですが、残らず全部平らげてしまいました。唯一の女性であるAさんは「空手は初めて」といいながら楽しんでいたのが印象的でした。



★お願い

10月24日の大柳生への収穫祭が11日に繰り上がったため、第3クールは17日の空手授業を最後に全4週を終了しました。次回楽塾は、第4クール11月7日(土)から始まります。お間違いのないようお願いします。

11月7日(土)の授業予定

- テーマ：ちがうから面白い
—違いから魅力へ～生活スタイル、言語、習慣の違いから「おもしろみ」発掘
2時間の旅～(行き先：日本——ヨーロッパの旅) —
- 講師：蓬莱梨乃さん(大阪市立大学都市研究プラザ)
- 時間：18:30～21:00
- 場所：三星温泉B1交流室にて
- 費用：1000円(給食代を含む)

蓬莱さんは、06年から始まった民間による「ホームレス全国調査」でご一緒したのが縁でした。稲田さん(09. 1. 31 / 7. 24 授業)とともに新宮調査などでもお世話になり、以前から楽塾講師のお願いをしてきました。10月10日の近畿大学生山崎君・本田君ら最年少組を筆頭に、川崎さん(09. 5. 9 授業)、蓬莱さんと、楽塾では若い先生の活躍が顕著です。海外生活での体験を通し異文化、異風土でのさまざまな発見を、「違いの魅力」という観点から話していただく予定です。

第25回目の授業が終わりました

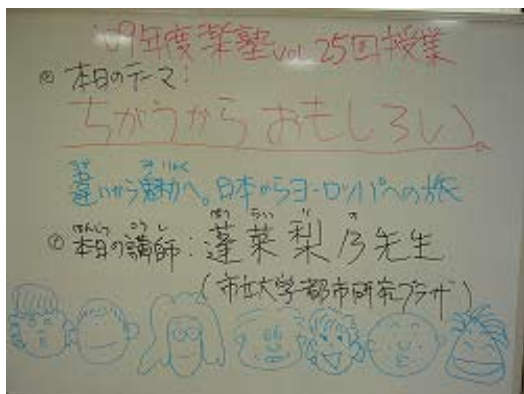
<カウンターカルチャー>

「パイレーツ・ロック」という映画を見ました。60年代、英国BBCが1日に流すロックのDJ番組を45分に制限していた頃（NHKもそんなものだった）、ロック愛好家たちに違法電波を送って対抗し、海賊放送局を実践していた連中がいたという話です。海賊放送の話題は当時聞いたことがありますが、背景は国家の傲慢な規制なのですね。

この海賊たちを退治するために、政府はあの手この手を使って絶滅をはかるのですが、聴衆の支持をバックに海賊DJたちはますます意気盛ん。海上に浮かぶ海賊船に少年が乗り込んできて不良DJたちと生活を共にします。ここで彼の成長物語も描かれているのですがそれは刺身の具。いよいよ海賊船がタイタニック化に直面し絶望的な場面を迎えます。この結末は幸福なのですが、海賊船という文化が消滅していくという悲劇も描かれます。対抗文化を寓話にしたハチャメチャ映画になっていて楽しめました。最近サブカルチャーという言葉に取って代われ従属文化が主流です。私はカウンターカルチャーにこだわりたいと思っています。楽塾はまさにカウンターカルチャーです！

<11月7日（土）の授業>

- テーマ：ちがうから面白い
- 講師：蓬莱梨乃先生（大阪市立大学都市研究プラザ研究員）
- 場所：三星温泉B1交流室<楽塾>
- 日時：11月7日（土）19:00～22:00
20:00～22:00（給食）
- 参加者：18名（スタッフ2名、講師1名を含む）



<大阪→イタリア——前半>

出発の前に

先月17日以来、3週間ぶりの授業です。今回の参加者は多様でした。蓬莱さんのパートナーであるルツィさんがスイスから参加。また住之江から初参加の松本さん母子やりぷらスタッフたちも駆けつけてくれ、総勢18人で部屋がいっぱいになりました。

「世界中にはいろいろな人がいて、多様な文化や習慣など、互いに比べられないから面白いのだと思う。今日はイタリア、スイス、日本を旅したいと思います。皆さんと一緒に三星温泉から出発しましょう」と蓬莱さんは話し、まずは4年前イタリアで13ヶ月間滞在し研究(?)生活していたベニスでの暮らしからスタートしました。

「大阪からイタリアまで13時間の旅です。出発前に確認しておきましょう」ということで、先ず世界地図をプロジェクターで投影しました。さてここで塾生への確認。「今まで自分の生まれ育ったところ以外の場所で、生活をしたことがありますか。新しい生活の中で言葉や習慣、食事生活スタイルなどの違いを感じたことがありますか」という質問に手が挙がります。

- **T君** (小学3年生) : 「小学校に入る前、引越したことがあります。団地に引越しをしたので、周りに公園がありました。前(に住んでいたところ)は、川があったくらいでした」。蓬莱さんの質問がはいます。「大阪は好き？」T君「ハイ好きです」。「何が好き？」「異常(な人)でも入っていけるから」。う〜ん これは深い。ちなみにT君のIQはかなり高いらしい。
- **Mさん** : 奈良から大阪に移り住んだ時、奈良の御所はのんびりしていた。大阪は人間の多いところ。そしていろんなことができるところ」。
- **Aさん** : 兵庫県川西から阿倍野区に移ってきた。大阪は自転車が多いけれど、言葉は変わらない。
- **Yさん** : タイに短期間いた。英語の通じないローカルな場所で、指先会話帳を利用した。バイクはヘルメットを被らず、トイレにはペーパーが無い。子供の頭をなげない習慣がある。その地方の水かけ祭りが面白かった。

「それでは確認2です。イタリアのイメージを書いてみましょう。合わせてスイスのイメージもネ」。先生の質問にイタリアの印象が話題になります。スパゲティーが本場とか、ギャング(ゴッドファーザー)で有名とか、オペラで有名、ボローニャの絵本展もあるなどとイメージを話していきます。T君は「スイスは雪国だから風邪を引かない。なぜなら冷たさがウイルスを殺してしまうから」と発言し、みんな「なるほど」と納得してしまいました。このほかアンリ・デュナン(実業家であり、戦争の現実を知り赤十字社を設立。晩年は孤独な生涯であったと伝えられるスイス人)、アニメで有名になったハイジなどの名も登場しました。ハイジにはモデルがあったそうです。



さあイタリアへ出発

「それでは第一の行き先イタリアに向けてスタートします」。蓬莱さんが滞在したのは水の都ヴェネツィア(ベニス)でした。

T君がヴェネツィアの一部地図を指差し人工島ですかと質問します。蓬莱さんは「すごい! 実はヴェネツィア自体が人工島なのです」と応えます。「海が浅いので砂が堆積しやすいので島を作ったそうです。島内は自転車や自動車の乗り入れが禁止されていて、歩くだけの島です。生活必需品はすべて船で運搬するので物価は高く観光の街ですが、人口は6000人」だといいます。

それでは蓬莱さんが住んだイタリアの現実とはどんなものだったのか。自らの体験経験したケースを話してくれました。「ある日水が止まってそのまま外出した。水道管が破裂したのが原因だったが、自分の家の中の問題でありながら自分に関係ないというスタイルで、しかも修理屋に頼んでも2~3週間は来ない。私

たちの国では便利に慣れすぎてしまって、このことではちょっと考えさせられた」そうです。ゴンドラや水上バス、サンマルコ広場、ヴェネツィアの橋や路地の写真を見ながら、しかしここも高齢者が多いこと、ベランダが無いので、屋上に花壇や植栽を作ったり、洗濯物を他のビルに渡して干したりする習慣を話してくれました。また水かさが増え、町中が水害のようになる現象は深刻な問題であり、漁師さんのような長靴が必需品であることなどを話してくれました。

<イタリア→スイス——後半>

イタリアの習慣

「イタリア人はあまり物を捨てない習慣を持っている」「服なども最後の最後まで来て、それでボロになると端切れの布で服の一部にして利用します」。「また機械なども捨てないでヘタウマに関わり無く、自分で修理をしたりします」。ともかく自分たちで工夫する習慣があるということでしょう。「だから日本であるような質がよく何でも揃っている100円ショップは無いのです。自分でまかなってしまうからです。私たちにとっての不便は、イタリアでは不便と感じないのかもしれない」。

「食事はやはりパスタが多かったです。それからお酒はワインで、1本100円からある。なぜ昼間からワインを飲むのかというと、パスタは水などでは消化しにくく、ワインには消化を助ける効果があるという理由らしい」。でもこれってワインを飲むためのイタリア的屁理屈ですよ。パスタやめればいいのと言ってしまう。「日本では、朝食はお味噌汁、お漬物など辛いものが多いけれど、イタリアの朝は甘いものを食べます」。

イタリアは“いい加減”か

蓬莱さんが役所の人と仲良くなりヒアリングに行ったとき、その友人（役所の人）が蓬莱さんを日本の超有名大学出身者だと、役所幹部が同僚や職員たちにウソの紹介をし、「彼女は日本からこの職場にインターシップに来たと言っているが誰が彼女を呼んだのか」、とこれまたウソの呼びかけをし、職場一同、彼女を日本から呼んだ犯人を探すことで大騒ぎをしあった、といいます。また転居した人をダシに仕事をホッポリ出し、全員で新居へ押しかけたりしたこともあった。「ほんとイタリア人は仕事よりも遊ぶのが大好きなのです」といいます。なるほど日本よりもいい加減な国があるんだ。

イタリアでは日本と違い、大学の卒業が難しいといいます。だからそのための勉強を一生懸命するそうです。日本のようにアルバイトと学生を両立させているのがよくわからず不思議だといいます。とにかく一つずつゆっくりやったらどうだといわれたそうです。滞在も10ヶ月ちかくなり毎日毎日悩んでいるときには「今日を楽しく生きなければ明日は来ない」と言われ「そりゃそうだ」と納得したそうです。

スイスから日本へ

スイスには「スイス語」というのは無く、周辺国のフランス・ドイツ・イタリアの言語とロマンシュ語の4言語が公用語とされているのです。「スイスの勤務形態なのですが残業は無いです。時間から時間までの勤務が基本。バカンスは年間通して平均1ヶ月間（日本のような祝日などは少なく、純粋な休日）」といいます。給料が高く保障制度も整っておりその分税率も相当なことだと思われます。ここで蓬莱さんのパートナーであるスイス人ルツィさんから意見を聞きました。

・ルツィ：「2006年に初来日しました。街の中にたくさんの看板があることが気になった。鼻が高いのは好きではない。食べ物が豊富だが得体の知れない、たとえば納豆などがある。挨拶の種類も複雑だと思いました。Lost in Translationの世界でした」と。

そこでルツィさんに聞いてみました。

Q. 日本の場合、階層、年齢、序列などの格差関係に従って言葉が変化するが、スイスではどうなのか

A. 2つのパターンしかない。敬語と普段の言葉だけです。敬語は年齢や階層などではなく、相手との距離

や関係性であり、気持ちの差や心の距離ともいえます。

つまり敬語で話したい人には敬語になるし、普段の言葉で話したい人には普段語で話すということなのでしょう。

「そろそろ大阪に帰える時間となりました。「ちがう」というのはどちらがいい悪いではなく、むしろ良し悪しが魅力になるということではないか」というのが、Hさんのお話の主旨であったと思います。蓬萊さん、

ルツィ
様でし

さん
た。

ご苦勞



<感謝>

とくに小3のT君がたくさん質問をしてくれて楽しい時間を過ごせました。母子ともどもまた楽塾にきたいと言っています。ぜひまたいい時間を過ごしましょう。給食時も大賑わいとなり、少々おかずが少なかったけれどうまく分け合えることができました。そこでお願いです。少なくとも1日前までに必ず参加の予約をしてください。

前山僧正から参加者全員に新潟の新米を頂きました。いつもながらの寄進をありがとうございます。また塾生のT2さんから楽塾へ寄付を頂きました。T2さんいつもありがとう。楽塾という電車は、みなさんの応援と協力、そして参加のおかげで貧しいけれどゆっくり順調に走っています。線路や特定の駅も無く、誰でもいつでもどこからでも途中乗下車できる小さな電車。車掌と乗客がいつの間にか入れ替わり、自由な進路に舵をとって進む電車です。あなたの駅が次の停車駅です。ご乗車を待っています。



< 11月14日（土）の授業予定 >

- テーマ：わが青春の歳三
- 講師：栗塚 旭先生（俳優）
- 時間：18：30～21：00
- 場所：三星温泉B1交流室にて
- 費用：1000円（給食代を含む）

私の青春時代、そしてテレビがメディアの寵児となりつつある時期の、時代劇最大のエポックを築いた「新選組血風録」（昭和40年）で土方歳三役を演じてデビュー。原作者司馬遼太郎が激賞し、後世この人のあとに歳三なしと言われ、新選組副長として強烈なプロトタイプを確立した栗塚旭氏をお迎えします。「楽塾」ではすでに同世代の人たちだけではなく、多くの塾生たちの期待が膨れ上がりつつあります。参加される方はご予約をお願いいたします。

第 26 回目の授業が終わりました

<歳三よもう一度！>

今から 45 年も前の 1965 年、TV 創世記の頃に時代劇のエポックを築いた「新選組血風録」がシリーズでオンエアされました。土方歳三役を演じてデビューされたのが栗塚旭さんでした。26 回目の授業は、原作者司馬遼太郎が激賞し、世評もこの人のあとに歳三なしと言われしめ、新選組副長として新しいキャラクターを造形した栗塚旭先生をお迎えしました。栗塚さんと私との出会いは、昨年夏、京都シネマでドキュメント「未来世紀ニシナリ」が上映され私が解説者として出演した折、「未来世紀ニシナリ」のプロデューサーであり、今回栗塚さんとご同行の山田哲夫氏から、観客としてこられていた栗塚さんを紹介いただいたのが最初でした。偶然とはいえ、当時「新選組血風録」や「燃えよ剣」などで熱狂していた私は今も栗塚さんはアイドルであり、いつかは「楽塾」にと考えていたのですが、著名人であり、貧乏楽塾などにはとてもとあきらめもしていました。しかし「未来世紀ニシナリ」に共鳴していただいていたことと、山田プロデューサーのご尽力があり、思いがけず早々に実現することが出来たのでした。そして当時の栗塚さんを知るわが塾生たちの熱い要望もあったことを追記しておきます。

2009 年 11 月 17 日 塾長

< 11 月 14 日 (土) の授業 >

- テーマ：わが青春の歳三
- 講師：栗塚 旭先生 (俳優)
- 場所：三星温泉 B 1 交流室 <楽塾>
- 日時：11 月 14 日 (土) 19:00 ~ 22:30
21:10 ~ 22:30 (給食)
- 参加者：21 名 (スタッフ 2 名、講師 1 名を含む)



<前半——楽塾に土方歳三が来た！>

「新撰組血風録」の上映

栗塚先生が塾生たちにお土産を持参され、しかも一人ひとりにそのお土産を直接手渡しして頂き、そのため授業開始からもう教室は加熱していました。今回の授業実現にお世話になった山田プロデューサーも一緒にでした。

始めに私から、塾生諸君や私の青春時代の記念碑的映画である「新選組血風録」誕生のあらましと、今回の授業に至る経過を簡単に解説し、前半のDVD上映を開始しました。上映する映画は65年当時、シリーズで26本放映されています(各50分)。全作品よく出来ていて、この日の1本をどの作品で上映するのかわざと迷っていました。そこで、土方歳三とおみねという女性との淡い恋を描き、しかも土方歳三にスポットを当てた作品として「鴨千鳥」がシリーズ中でも出色なので、この作品に決定したのでした。

この日のために、新選組ファンである事務局川井君が調達してくれたスクリーンに映写し、スピーカーもBoseということで大画面、大音量の上映会になりましたが、音量、映像、位置の検討など川井君と遅くまで調整したことがこの日の上映にうまく活かされたと思います。

「鴨千鳥」の内容は、料亭で働くおみねに偶然遭遇した土方と、おみねの同僚幾松、その情人桂小五郎ら4人の出会いから始まり、おみねと幾松の優しい交情が描かれます。勤皇、佐幕に引き裂かれた男女の心のひだを、佐々木康監督（東映全盛時代の名監督）が京都の風光を背景に叙情的手法で描いた佳品です。映画が終わると大きな拍手が起こり、「久しぶりに見ました。若いねえ」と土方副長は懐かしげでした。



<後半——盛況なサイン会から盛大な給食まで>

栗塚さんを囲んで

上映後休憩に入り、サインを希望する人たちが栗塚さんを囲み、一大サイン会に発展しはじめます。先生は、「誠」の文字を織り込みながら、自らの名前を1枚1枚丁寧にサインし、塾生たちは嬉しそうに書かれた後のサインを私に見せてくれました。ゆったりとしたサイン会だったために、授業時間も予定より遅れて始まりましたが、みんなは満足げで、私も所蔵の「新撰組血風録」VHSビデオのボックス数点にサインを頂きました。

映画のこと

塾生や応援団の人たちが先生を囲んで談話を楽しみました。

まずは、栗塚さんが京都で経営されている喫茶店にも行ったことがあるという泰代さんが質問しました（「楽塾」では意外と栗塚さんのお店に行った人が多かった）。

泰代さん：今は何をされていますか？

栗塚さん：現在も俳優をやっています。最近坊さんの役があり、ちょうど僕の頭が丸坊主なので引き受けました（笑）。ドイツのフランクフルト映画祭で出会った日本の監督から、「天使つきぬけ6丁目」というタイトルの映画を撮るために出演依頼がありました。「天使つきぬけ6丁目」という場所が京都にあるというのですが、そんな名前を聞いたことがなく何度か足で調べてみて、実際にある場所がわかりました。刑事役というので引き受けました。ちょっと変な名前なので、皆さん見に行ってください。

Mさん：今日、時代劇チャンネルで「暴れん坊将軍」やとった。

栗塚さん：初期の「暴れん坊将軍」では、結束信二さんの脚色（「血風録」の脚本家）で、当時23歳だった松平健さんの脇を固めるために出演しましたが、今では彼も有名になりました。

佐々木：順番として「血風録」のあと土方歳三の「燃えよ剣」が放映されたのですでしたか？

栗塚さん：「血風録」のあとは柴田錬三郎原作の「われら9人の戦鬼」に続いて「俺は用心棒」、その後松竹と契約をし、それまで契約関係のあった東映と仲たがいをしました。その後東映とよりを戻してテレビ映画「帰ってきた用心棒」、そして「天を斬る」という遂に天下相手の恐るべき映画を撮った後、「燃えよ剣」のシリーズとなります。

スターたちのこと

このほか、新選組の敵役であった鞍馬天狗役の嵐寛寿郎や、近藤勇を当たり役とした片岡千恵蔵、「血風録」にも共演していた往年の美形俳優徳大寺伸や美しかった淡島千景、栗塚さんとよく話をした岩下志麻のこと、そして「帝国劇場で2ヶ月間の公演を長谷川一夫さんから呼ばれ『宮本武蔵』で共演しました。私は佐々木小次郎をやりました。メイキャップでは私の厚塗り化粧に対し、シンプルで短時間のメイキャップアドバイスをしてくれました」。そんなキラ星のようなスターたちとの交流や逸話を、私はドキドキしながら聞いていました。「先人の意思を引き継ぎ、今も諸先輩の映画をよく見て勉強します。それにしても、もっと若い時に勉強しておけばよかったと、今では悔やんでいます」と反省も。

「(NHK大河ドラマ)『新選組!』では香取伸吾君や山本耕史君は28歳。若いねえ。僕が歳三をやった時も28歳だったが、40歳ぐらいの土方をイメージして撮っていた。彼らを見ていると、僕は大変頑張っていたのだなあと思いました」。



給食のにぎわい

給食時にはたくさんの人で大賑わいだったため、いつもの食卓のレイアウトを全員が座りやすく配置しなおし、「くらし食堂」で作られたサービス満点、ボリューム満点の給食を頂きました。最近、みんなが分担して食事の用意や食後のあと片付けなどをしてくれるので、「楽塾」はファミリーな雰囲気です。先生は野菜が好きで、惣菜の中の肉片が残っていると、「猫を飼っているので、お肉を頂戴します」といって紙に包んでおられました。もっとたくさん持って帰ってもらえばよかったと、あとで後悔しました。

食事中、塾生たちに質問やおしゃべりをされ、先生は落ち着いた食事時間を過ごされたことでしょうか、終始笑顔で対応して頂き私たちも安心しました。「これからもいろいろな役に挑戦したいし、悪役にも魅力を感じているが、かつて悪役で評判だった山形勲さんや進藤英太郎さんみたいな先輩諸氏を考えると、僕は中途半端な悪人になっちゃうかも」と謙遜されていました。いや苦労人と見える栗塚さんなら、多様な役割を演じきる人だと思います。これからもご活躍をお祈りし、またいつの日か「楽塾」で再会できることを折っています。

最後に

あの頃の歳三がここにいるんだ、という昂ぶった気持ちが教室中に満ちていた反面、私は、何よりもおしゃべり好きで偉ぶらず、優しい語りで接してくれた栗塚さんを見ていると、映画の冷酷寡黙な土方とは当たり前ながらやはり違うんだと、なんだか複雑な気持ちになってしまいました。それでも時空を超えた歳三は、確実に私たちの眼前に現れてくれたのです。これは塾生たちにとっても、私にとってもありがたき貴重な一夜でした。忘却の向こうにある記憶や体験を、あるいは失った片割れの自分をひととき連れ戻してくれた瞬間だったと考えます。



感謝

多くの塾生、応援団の皆さんが参加して頂き、満足な授業を体験できました。先週から参加の松本さんは、参加者全員にクッキーを焼いてプレゼントしてくれました。おいしかったよ松本さん！ また息子さんを連れてきてください。初めて参加の竹田さんも食後の後片付けをご苦労様でした。映画監督の田中さんの顔も見えました。私の2人の妹たちや下川さん、鈴木さんたちにも協力いただきありがとうございます。そしていつも講師をして頂く皆さんありがとうございます。今年最大の企画授業が終わりました。



< 11月21日（土）の授業予定 >

- テーマ：学校とは何だ？
- 講師：武田緑さん（CORE+代表）
- 時間：18：30～21：00
- 場所：三星温泉B1交流室にて
- 費用：1000円（給食代を含む）

去る5月9日、「私のたくさんの“父たち母たち”」で講師をお願いした、川崎那恵さんのお友だちである武田緑さんが今週の講師です。武田緑さんは東淀川区を拠点にCORE+という、「子どもたちが多様な人や価値観と出会い、自分の頭で考え、自分なりのものの考え方を築くための」場づくりを実践しておられます。川崎さんから是非武田緑さんを講師にというご推薦があり、今回のゲストをお願いしました。自らのライフヒストリーを核に、学び遊びを語っていただきます。

第27回目の授業が終わりました

<いのちの神秘>

先日NHKスペシャル「立花隆 思索ドキュメント がん 生と死の謎に挑む」を見るとはなしに見てしまいました。これが興味深く今回の巻頭になりました。

ジャーナリストの立花氏は2年前膀胱がんの手術を受け、自らの治療の経過や、がんへの本質的な問を調べ始めます。「人類はなぜがんという病を克服できないのか？」このドキュメントはNHKが長期に渡って立花氏に密着取材した映像でした。

世界のがん最前線の研究者たちをルポする中で、がんという病気は生命誕生の謎に深く結びついているということを知ります。しかも哺乳類をはじめ古代の恐竜に至る、あらゆる生物に見つかっているのが「がん」なのです。がんの免疫体と考えられてきた抗体が、実はがん増殖に大きな役割を果たしていたり、がん転移の誘導を積極的に行います。これらの映像は格段に驚異的でした。

生物の命の誕生、進化に不可欠な遺伝子をもつ人間が、「多細胞生物ゆえに決定づけられた宿命なのではないか」。立花氏は、それゆえどのようにがんに向き合っていかなければならないのかと考えます。近しい友人たちが他界していく中で、自らの死を想像しながら、立花氏はがんという生き物に共感のまなざしを向けはじめます。

私はがんというモンスターを対立軸とせず、生命の伴走者としてとらえてみると、まったく違った世界が見えてくるように思いました。それを自分たちの社会的課題に置き換えてみるとどうなのだろうと想像すると、とても興味が倍加しました。

2009年11月25日 塾長

<11月21日(土)の授業>

- テーマ：学校って何だ？
- 講師：武田緑さん（CORE+代表）
- 場所：三星温泉B1交流室<楽塾>
- 日時：11月21日(土) 18:30～22:00
- 参加者：13名（スタッフ2名、講師1名を含む）



<前半——私のライフヒストリー>

ピースボート体験

武田さんは、まず自ら主催するNPO [CORE+] の話題から話し始めました。「子どもたちが多様な人や価値と出会い、自分なりのものの考え方を養う機会を得られるために、大人が実践し大人が学び合う場所をつくろうと考えました」と言います。

「私が、なぜ教育のことをやり始めたのか。その動機は自分自身が同和地区で生まれ人権教育で育ったことにあります。「『自分のルーツを恥としないで生きてほしい』という教えのなかで、『部落差別のない社会を作っていく人になってほしい』という親や団体が一体となった中で育ってきたので、それを信じることを学んでいったのです」。

大学に入学したけれど面白くないと思っていた武田さんは、NGO [ピースボート] が主催する地球一周の旅を経験し、「その経験が世界と自分のつながりに感じました」と話し、自らの被差別体験が、南アフリカを中心にしたアパルトヘイトに興味を持たせたそうです。現場を歩きながら「祖母や母たちのいた部落の風景はたぶんこんな風景だったのだろう」ということが実感できたそうです。

「ピースボートでは3ヶ月間で世界一周するのですが、そのほとんどは海の上。最初のうちは船酔いがひどく、しかし1週間ぐらいで慣れてしまう。陸に上がると、今度は陸酔いをする」のだそうです。常に揺れている場所から揺れない場所に降り立つと、まったく逆に酔ってしまうのですね。ただ陸上に上がっても1日で船に戻るので、陸にいることは少ないとのこと。「(海上にいることが多いので) 船上ではいろいろな講義が催され、音楽のライブがあったりします。アパルトヘイトの元活動家が乗ってきて話をしたこともありました。」

さまざまな人たちがゲストで登場したが、「自分がこれまで頭で考えていた価値観が、必ずしも正しいとは思えないこともありました」と話します。つまりピースボートに参加して「自分の頭で考える大切さを知った」と実感したそうです。

湧き上がる違和感

「今まで私の意見、私の考え方だと思っていたものは、大人の価値観を吸収し同化していただけで、自分のものではなかったのではないかと感じはじめました。自分が受けてきた学校というのは、いつも正解というかゴールが決まっていて、期待に沿った意見を発表してきたに過ぎないんじゃないか？特に人権教育は顕著だったのです。これまで多様な価値観に触れてこなかったなあと思いました。これまで先生たちは考えろって言うけど、用意された答えに辿りつくために考えろと言われていたのかと感じてしまった」。



CORE+の設立

「共通の友人を介し、今ではCORE+のパートナーである個性的な神野有希さんと出会う。神野さんが登校していた『きのくに子どもの村学園』を見学したことがありました。ここはカリキュラムの半分がプロジェクトという体験学習が主体の学校です」。木工をしたり、家を建てたり、米を作ったりするそうです。週に1度、学校のルールを決めたり問題を解決するための全校ミーティングが行われます。自己決定の原則・体験学習の原則・個性化の原則の3つの原則を大切にしていたと言います。

このほか中高一貫校の『自由の森学園』や、不登校経験者のための『東京シューレ』等も見学しながら、自分たちがこれから作る場所のイメージを考えていったそうです。

武田さんは小学校の先生をしていた時、学校というところに違和感を感じたそうです。集団的しつけ、教師の暴言暴力などがひどく、「そんな状況に段々麻痺していく自分の怖さ、疑問さえ持てないような日常になっていった」と語ってくれました。

「CORE+では、これまでいろいろな学校を体験したり、いろいろな価値観を養いながら来たので、自由な生き方を育て学べる場所を作っていきたいと考えています」と話してくれました。



<後半——塾生の学校時代>

休憩のあと後半では、塾生それぞれが学校への思い出を話してみようという試みをし、談話形式で進めることになりました。

T1：K県で生まれ戦争を経験した。幼稚園のころまではK県でその後大阪へ。小学校3年のころ終戦でK県に帰った。大人から「大きくなったら何になる？」とよく聞かれ「兵隊さん」と答えていた。大根めしや芋飯を食べていた頃だ。

I：先輩後輩の間では、礼儀や年齢などでしつけられたが、いじめのようなものはなかった。また喧嘩が強くとも無意味であった。10人100人でその男をやっつけてしまうからだ。ラグビーの新日鉄釜石が憧れであったがそれも衰退していった。18歳までI県にいたが、その後いろんな都市に移っていった。

M1：中学校入学式の時、中学校同士でチェーンやナイフを持って集団で喧嘩をした。警察が来た。N県G市の一番評判の悪い中学校だった。生徒が先生をよく殴っていた。

(I君：生徒が先生に手を出すなんてわからないなあ)。

S1：O県で生まれたが、中学生の時にK市に来た。卒業の時、必ず先生が生徒をバットで追いかけていた。同和地域だったので何かあったら警察が来た。喧嘩の現場を無責任に見つめていた教師を今でも許せない。

S2：ラジオの話を2題。①小学校4年生の頃、NHKの学校放送があった。社会科の授業の臨場感は今でも強烈に覚えている。②小学校5～6年の頃、NHKの連続ラジオドラマ「お父さんはお人よし」が

大評判だったが、馬場町の録音スタジオでドラマの実況（タレントはシナリオを読むだけ）を見に行き面白さに大爆笑した。

- M2**：小学校の頃は学校が大嫌いだった。行っても面白くなかった。集団とか規則が嫌いだった。ある先生が迎えに来てくれて行くようになった。高校では通学路が男女別で、電車に乗る時、車両も決まっていた。
- S3**：小学校の頃、私のクラスはいつも楽しかったが、隣のクラスは先生が厳しく暗かった。ミルクを飲めない生徒に無理やり飲ませ、その生徒は登校拒否になった。私たちが心配して家を訪ねたが、中・高校とも引きこもったままだった。教師の常識は社会の非常識だと思った。
- Y**：皆さんの話を聞いていて、自分にそんな語る話があるのかと考えた。あるとすれば自分はアホだと感じるくらい。ただ商業高校に行ったことがよかったと思っている。たいした成績ではなかったが、この学校ではユニークな実践研究ができ学べた。皆が同じ授業を受け、同じ単位をとり、成績を残さなければならないという時代に、ユニークな授業を受け皆と同じでない学びが自分にとっては喜びだった。
- T2**：T市T町で生まれた。学校に行くまで道草を食ってよく遅刻した。怒られるのが嫌で、ますます学校に行くのが嫌になった。小3の時、3人の女の子に初恋をした。太いのん、細いのん、普通のをやった。貸し本屋があって、学校に行く前にそこに寄ったりした。2年ごとクラス替えがあり、それが楽しみでもあった。
- N**：O市生まれのH市育ち。OとHの小学校の違いは、O市は学年に関係なく遊んでいたが、H市は学年別に遊んでいたのが特色だった。僕が一番悪い時は小5でタバコをすって先生に正座させられた頃だ。中学校は悪い学校だった。クラスはいやだったが柔道をしてよかった。仕事をしたかったので高校を中退した。鑑別所に入ったこともある。
- K**：小5～6年の頃が面白かった。朝の授業始まりにドッジをするのが楽しかった。中学時代はバレーボールに入部していたが授業は出ず家で寝ていた。先生が放課後「クラブが始まるぞ」といって迎えに来てくれた。バレーボール部はI市では無敗無敵だった。





授業後、武田さんは、「自分の経験が活動の中心になっています。皆さんのいろいろな体験経験を聞いて、またここに寄せてもらおうと思っています」と挨拶されました。授業の半ばでご飯を食べながら語ろうということになり、給食の時間になりました。給食時にもたくさんの発言があり、胃腸の消化に大変よかったです。

社会的に困難を負う人たちへの支援とは何なのか、支援される側の気持ちはいかなるものか。今回の授業を皮切りに、来春以降「支援と被支援」を授業テーマに、救護・厚生施設、ボランティア、教会関係者、ソーシャルワーカーらの協力を得て、シリーズ講座を実施したいと考えています。支援・被支援という関係については、じっくり語り合う機会を作りたいと思っています。

今週は、野宿者の全国調査やさまざまな活動で協力し合い、当事者の入所などにも大変お世話になっている今池平和寮元主任であり、現在伯太寮副施設長の織田隆之さんをお迎えします。織田さんのユニークな活動経験を通し、施設の裏側からの話が聞けるかもしれません。応援団の皆様のご参加をお待ちしています。

第 28 回目の授業が終わりました

<「してあげる」「してもらう」という関係>

支援を“してあげる”、支援を”してもらう”という従来の福祉的対応から、相互の幸福的関係を築くことは可能だろうか。つまり、支援する側も被支援者から勇気をもらい、もちろん被支援者側も支援者から元気を受け取るという水平で双方向の関係である。支援、被支援という言葉には二項対立を煽るニュアンスが潜んでいるようで、落ち着いた悪い言葉である。楽塾では今回授業を手始めに、来年第5クールのスケジュールの中で、しばし「支援・被支援」の課題点をテーマとして実施してみたいと考えた。

2009 年 12 月 1 日 塾長

< 11 月 28 日 (土) の授業 >

- テーマ：施設の光と闇
- 講師：織田隆之さん（ヘレンケラー財団伯太学園副施設長・元今池平和寮主任）
- 場所：三星温泉 B 1 交流室<楽塾>
- 日時：11 月 21 日 (土) 19:00～22:00
- 参加者：13 名（スタッフ 2 名、講師 1 名を含む）



<前半——今池平和寮のこと>

十二楽坊の取り組み

織田さんは、西成にある救護施設今池平和寮で勤務され、「くらし応援室」のケースの相談にも応じてもらったことがあります。今春、和泉市の伯太学園に転勤し、施設の副施設長として奮闘されています。授業の始まる前より、今池平和寮生たちの取り組みである「十二楽坊」のライブ映像を見せてくれました。現在 14 名のメンバーたちで構成され、アルコール・ギャンブル依存症や障害者もいるとのこと。1 年間 200 時間の練習をするそうです。

「練習時間の前には楽器の搬出もあり、また高価な楽器を扱うわけで、当事者に任せてしまうとリスクがあり、職員に任せてしまったほうが安全性は高いと思われがちです。しかし、施設とは何なのか、誰のためにあるのかを考えると、たとえリスクがあっても、当人たちが作業を楽しむ方向に持って行き、そのフォローをしてあげることが大切。とはいえ普通施設はなかなかそんな方向には向かない」と織田さんは言います。

「平成 13 年から 21 年までの間に 170 名の寮生が独立しました。そのうち 100 名くらいが支援の対象者。そのほかの人たちは死亡したり、病院に戻ったりと多様だが、行方不明は 2 名だけ」だそうです。

今池平和寮の作法

アルコール依存症の場合は即入院扱いだが、悪質な場合は平和寮ではまず警察に通報し、その後留置の措置になります。翌日病院に入院させるが、そんな対応をしてくれる病院などない。どうするのか。そのためには、日頃から救護施設としての平和寮を関係機関にPRしておかなければならない。そんな関係性を大切にしながら、緊急時でも対応する態勢づくりをしている。だから緊急入院も可能になる。すべからく人と人との関係性が重要である」。それが織田さんの強調するゆえんです。

「医療の部分においても、依存症で病院送りのままではなく、再度施設に戻りケアしていくことが大切だ。職員や管理上の都合で、その人への真のサービスをしようとしなないことが問題なのです」。これらの部分は、多くの施設関係者にとっては耳の痛い話しかも知れません。「他人に対しどんなサービスをするかが大切であって、施設は『してあげる』意識を養う素地をもちかねない」。

「よく成人の当事者に〇〇ちゃん等と呼ぶことが多いですね。でも成人への尊厳やプライドを考えない呼び方は、人への本当の関わりが出来ないのではないかと思います」。確かにシンポや人権集会などで「野宿者の方々」「障害者の方々」など、バカ丁寧というかいんぎん無礼な言質だと感じる場面に遭遇することがあります。他人事で関心もないくせに、いかにも当事者に関知しているという、あのよそよそしさに似ていますね。

「依存症の人もいるなか、寮内でもアルコールを出すことを検討したことがあります。そして実行しました。結果的にはほとんどトラブルがなかった。少ないトラブルのために、規則を作っているのが施設ではないか。責任を他者に押し付け、職員が管理しやすいという意味では施設の光の部分だ。救護施設は措置です。利用者が気持ちよく生活できることが施設のあり方だと思う。それをしないのが施設の闇の部分だと思います」。ということで、織田さんは今回のテーマにうまくつなげてくれました。

「『してあげる』ではなく、本人が納得できる道を作っていくことが大切です。病院に入院することに関しても、本人とは入院を納得するまで話し合い、終の棲家としての帰る場所として、安心感を持ってもらうようにしている。そんな時は、どうしても社会資源をうまく使わなければならない」。



福祉事務所との関わり

これまで当事者は、大阪市厚生相談所から一時保護所を通して施設に送られ、その後生活保護受給というスタイルでしたが、「ケアセンターに入所しても保護費を受給できるようになってきた。受面(受付面接)の際、さまざまな状況でケースが現れる。平和寮では女性3人男性3人の緊急ベッドを用意していて、どんな場合でも受け入れるようにしています」。また「福祉と話し合いをするときは、本人の希望を聞き、アパートか施設かの選択をしてもらうようにしています。組織(施設や役所)同士の役割がそれぞれ違うわけで、その役割分担を確実に果たしていく必要がある」と言います。

「(自分ごとではなく)人のことだから出来る仕事だ。自分たちが代弁することで、彼らを守ることが出来るのです。制度の中で、法律から外れず、人と人との知恵比べをやりながら、その人の利益につなげていく

ことをしていきたい」。織田さんは、そのためのネットワークを大切にしていきたいと語られ前半を終わりました。



<後半——談話そして応答>

織田氏：施設が人間の関わりをいい加減にしていると、連携するNPOなどがそれを見ているので、今後施設の信頼に影響をあたえることになる。

佐々木：母親の入院をきっかけに孤立する患者、屍化する患者を見た。介護や病院のサービスの粗悪化を目のあたりにし、患者や家族がその現状を見て、いつかは病院の存亡に関わると思った。医療現場での荒涼たるつながりのなさを見ながら、自分は当事者たちと長いかかわりをしてきたと思う。織田さんが体験してきた施設内で、印象に残る関係とはどんなことか聞かせてほしい。

織田氏：救護は基本的に単身者。でも大きな家族としての施設でもある。施設のあり方を考えよう。施設は措置であり、措置から外れると追うことは出来ない。「偲ぶ会」をつくり、お盆に過去亡くなった人を慰霊した。参加者は多かった。生きて証として施設に関わり、無縁仏にならない安心を感じてもらった。施設は家族である。家族としてのルールもある。家族としてその人の最後のかかわりに注目したい。人を回復させるのは人のつながりだけ。人でなければ人を回復させえない。

佐々木：支援とか被支援の関係は時間とともに変化してくる。初めは人を助けなければと考えていたものが、助けるというより人間のかかわりを深めていくとか、水平な関係になっていくとか、自分の場合はどんどん変化していった。だから支援などという言葉は僕にはフィットしない。

T 君：支援の目的は、その人を自立させることではないか。一生面倒見るわけではないのでは。

佐々木：さまざまな理由で最後を見取ることもあると思う。

T 君：自立支援センターでは自立が目的だった。自分は助けてもらった感がある。天国のようだった。あのまま行けば野垂れ死にだったと思う。世の中（自立支援センターの外）のほうが厳しいと思う。

織田氏：（自立支援センターでの）8人部屋の暮らしはどんなふうだった？

T 君：一人で寂しく過ごしていた人には楽しかったと思う。自分はいろいろなものに会えて社会勉強になった。（施設）退所者が社会に出て順調に暮らしていければ、職員も嬉しいと思う。

Oさん：今池の取り組みは、わたしたちの救護施設から見て耳が痛い。入所者のエンパワーメントが本来の業務であるはずがパワーを奪っている。入所者の希望を否定することなどは施設の闇と言える。

Fさん：今池はよい施設だと思う。私たちの施設の闇が心に浮かんだ。施設は集団生活だが職員も集団。リーダーの資質で大きく変わる。集団の論理は管理。個別ケースを避ける。排除につながることもある。多くの施設はこの形だろう。この状態を改善することが重要ではと考える。

織田氏：組織のトップが考えれば出来ることだ。ただスタッフ頼みでは、異動などで施設のよさが徐々に消える。組織として継承できる仕組みづくりが大切だ。

Mさん：介護では利用者がお客さん。施設は孤立を防ぐという意味では光の部分。しかし手を抜いても一生懸命でも同じ評価というのは闇の部分。入所者がスタッフを支えるような仕組みがないだろうか。

施設と居宅ではなく、施設という家庭（ある種の居宅）という発想にならないか。

佐々木：我田引水になるかもしれないが、楽塾では講師が塾生になり、塾生が講師に転換する。支援者も被支援者になり被支援者が支援者になるという、水平の方向性が見つけられればいいと思う。

今回の授業には、施設勤務者や介護者、ソーシャルワーカーら専門家の人たちの参加もあり、少し難しい話題に傾いたかもしれません。塾生諸君にとっては興味を削がれた部分もあったかも。しかし、福祉という制度の中でさまざまな現場があり、さまざまな関わりを持ち協力し合うことが、私たちの仕事であるということを知ってもらいきっかけになったかもしれません。今は伯太学園で職業訓練をしているH君も、久しぶりに来てくれました。



< 12月5日（土）の授業予定 >

- テーマ：極楽浄土——吉野から熊野へ part 2
- 講師：若松 司先生（大阪市立大学都市研究プラザ）＋前山村雄僧侶
- 時間：18：30～21：00
- 場所：三星温泉B1交流室にて
- 費用：1000円（給食代を含む）

久しぶりに熊野の話を聞き、心をリフレッシュにしたいと考えています。前山さんには熊野信仰や、山岳宗教としての吉野を僧侶としての視点から語っていただきます。また都市研究プラザの若松さんは、新宮でもとくに神秘性のある神倉山（去年は修了記念旅行で拝殿しました）の火祭り神事＝お燈（とう）まつりの解説などをしていただく予定です。2009年度の修了記念旅行を、再び熊野地方と計画しています。その折は、奇祭の火祭りを見学体験したいと考えています。今週の授業はそのきっかけにと考えます。



第29回目の授業が終わりました

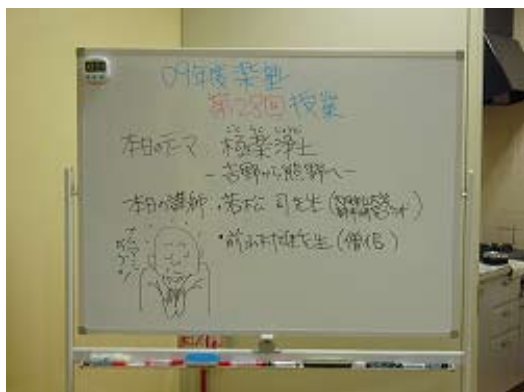
<沖縄から大阪へ>

沖縄の基地移設問題は深刻です。辺野古への移設、あるいは沖縄からの撤退、果てはグアムへと。歴史的に沖縄は常に翻弄され続けてきました。私も返還前の70年に沖縄に行った折、米軍の軍事訓練の影響を受け死にそうな経験をしているので、沖縄への関心（というか米軍への怒りのようなもの）は今も強いのです。最近、橋本知事が米軍基地の大阪移設を検討してもよいという話がありました。もちろん大阪に基地などんでもないけれど、沖縄だけで日本中の基地の70%が集中していることを考えれば、各自治体が相互に負担をするというのも当然の話でうなずけます。昔、原発立地問題が起きた時も、私は大阪に作ればいいんだと思ったことがありました。つまり橋本さんは考えるヒントを提供したのだと思います。彼はすごい知事ですね。素晴らしい。これまで財政節減など、どちらかという私たちに関わる当事者サイドでも影響を受け辛い部分もあって、印象を悪くしていたこともありましたが、これまでの傀儡（かいらい）型知事ではない、党派性に無関係なアバンギャルドが魅力です。

2009年12月7日 塾長

<12月5日（土）の授業>

- テーマ：1、中上健次『熊野集』2、極楽浄土—吉野から熊野へpart 2—
- 講師：前山村雄先生（僧侶）・若松 司先生（大阪市立大学都市研究プラザ）
- 場所：三星温泉B1交流室<楽塾>
- 日時：12月5日（土）19：00～22：00
- 参加者：14名（スタッフ2名、講師2名を含む）



<前半——若松先生の中上健次演義>

熊野に近づく

来年2月の初頭は第2回修了旅行の予定です。今回も熊野地方に遠征しますが、目的地やコースを新たに計画していく予定です。ただ旅の第一日目は、新宮市内にある神倉山の火まつりである「お燈まつり」を見参することになります。新宮、あるいは小説「火まつり」といえば中上健次であり、「楽塾」の健次研究者といえば若松さんということで、今回の授業は、旅行に先立つ旅のイメージを、中上健次が著した『熊野集』をテキストに、健次の実験的手法としての熊野の説話的世界を講義してもらいました。

火まつりを背景に

授業の開始に、ネットから拝借した神倉山の「お燈まつり」の画像を映しました。白装束の男（登り子）たちや、ご神火を松明（たいまつ）に移し、神倉の階段を今まさに駆け下りようとする男たち、神倉山が火

の滝と化す映像、そして何よりも昨年、みんなで修了旅行時参拝した神倉山でのいくつかの記念写真などを見て、新たな興奮に包まれました。

若松さんは、「熊野地方には、落武者たちの伝説や宗教、癒しなどいろいろな背景が、小説家としての中上健次を成立させたのではないだろうか」と話します。「近代の小説は、秩序立てられ、まとまりを持って作られたお話で、近代以前の文学や様式のことを物語と呼んで区別しています」。「作家である健次が実践したのは、近代小説の限界を、近代以前の物語的想像力の再導入によって、いかに突破できるかという実験的な試みであった」（高階秀次『中上建次辞典論考と取材日録』）とし、「活字文化とともにある“眼の物語”ではなく、それ以前に蓄えられた“耳の物語”の再評価」（同上）だったのではないかと話します。「彼の小説の舞台は新宮です。生まれ育った“路地”は耳の物語の宝庫であり、そこから『岬』『枯木灘』『地の果て至上の時』などの作品が生み出されていったのです」

『熊野集』は、語り手が聞き手に対して語る話です。今日は皆さんに輪読してもらい、読むことで新宮への旅をより一層楽しく出来るようにしたい。目次の最初の作品である『不死』を読んで、健次の世界から熊野をイメージしていきましょう、ということで、若松さんが『不死』の作品中、特に興味深い個所にチェックを入れたところを塾生間で順番に読むことにしました。

●若松先生の読んだ個所の要約

熊野山中を、修験というよりほぼ無目的に漂う破戒僧が、ありがたい経より、草が装束に触れて立つジャアラジャアラという音を口真似して歩いていく。

●Tさんが読んだ個所の要約

滝に打たれる破戒僧の前に、一人の女が現れる。女の出現で男の心はジャアラジャアラと邪悪さをつのらせる。

Tさん：「エロチックですなあ」。

●Iさんが読んだ個所の要約

この世のものとも思えないその女を犯し、なぜこんな山中に一人でいるのかを質すが応えない。男は女を離すつもりはなかった。

若松先生：「色気が増してきます」。

●佐々木が読んだ個所の要約

夜のとぼりが降り、闇の中に生息する常態でない妖しい存在に気づく。これまで放埒に生き、生きる値打ちもないと思っていた破戒僧が震える。

若松先生：「何かよくわからない異形のものが存在しているということが表現されていて興味深い」。

●田岡君が読んだ個所の要約

あるはずのない山中に屋敷が現出し、現世の都から敗れはじき出され者たちの死霊が跋扈する。屋敷の女官が叫ぶ声に鬼神たちの憂いが呼応する。ジャアラジャアラという音が背景に広がってくる。

若松先生：「権力闘争に敗れた天皇や貴族たちが熊野に集い、さまよい歩きます。そのうち彼らは異形の者になっていきます」。

●Aさんが読んだ個所の要約

明け方、女が破戒僧に向かって、あなたを送り尊い御方の元に戻りますと言い、朝の冷気の中、二人は身を横たえ深く交わりあう。

若松先生：「なかなか卑猥な表現もあるが、古代的な表現もよいと思います」。

●Mさんが読んだ個所の要約

女と一緒にになりたいという欲望が、女を殺したいという情念を生み、浄土への道を教えてくださいという女の言葉が、実は自分の言葉でもあると自覚していく。情交の中で互いに救済を求め合うのである。

若松先生：「性的だが宗教性を帯びた表現になった。さまざまなものが混ざり合った熊野が描かれている」。



<後半——前山村雄先生の火の旅行>

古代インド—アジア—朝鮮—沖縄—ヤマト

後半は前山僧侶と交代になります。「吉野から熊野へのパート2」として今回は神倉山の火まつりの“火”に関わる講義となりました。「古代インドの祭祀は、まずその年の夜の数360の小石を敷き詰め、その上に祭壇を組んだ」といいます。暗闇の世界を照らすのが火であり、火は男、水は女として象徴され、火と水の神事の前では人は横切ってはならないというしきたりがあるそうです。また赤色は太陽であり、白色は月、そして黒色は稲妻とされた」のでした。

「日本では熊野神社本宮の北方奥にある玉置神社が小石を敷き詰めただけの神社で、その他一切の祭祀的仕掛けがないということです。今回の旅行で、時間があれば玉置神社に参拝してみたいと思います」と前山僧侶は話してくれました。

そしてアジア全域にかけ、これらの神事が受け継がれ祭祀が行われていると言います。これら神事が行われるそれぞれの場所の名称は、アジアでは自然神であり、朝鮮では堂、沖縄では御嶽（うたき）、ヤマトにおいては磐座と呼ばれ、卑弥呼などはこれらの神事を執り行う巫女（みこ）の役割を担っていたのででしょう。この磐座も花の磐座として熊野市にあるので見てみたいです。巫女といえば伊勢神宮ですが、近代に至るまで天皇は行かない場所であったといえます。なぜなら伊勢は熊野と同じく生き神たちがたむろしていた場所であったからだといえます。

熊野

お燈祭りでは海水で禊をし、熊野阿須賀神社（蓬莱山）で礼拝してから神倉山へ登り松明にご神火をもらって、階段を駆け下りる神事となるのですが、「多くの神社では寺院を伴っていた場所も多いのです。お寺であるけれど鳥居を持つというのがそれです。熊野那智大社に隣接する青岸渡寺は神仏習合の見本のような宗教施設ですね。日本の宗教は混合が多く、信心が楽しいのです。私たちは無宗教だといわれるけれど、日本の年中行事では、多くの人たちがさまざまな場所に出かけて参拝をしているので、無宗教という言葉は正しくないのです」。

火まつり

神倉山と同じく熊野那智大社でも7月14日に那智の火まつりがあります。このお祭りは神倉山とは逆にご神体前で火を頂き、火をかかえて階段を登っていくのです。この火まつりに使う扇は女性として象徴されていて、その扇に以前は男根が描かれていたといえます。現在は馬の絵が描かれているそうです。

山岳宗教

吉野、熊野は修験者の要所でした。役小角（えんのおづぬ）を祖と仰ぐ日本仏教の一派です。もともとは山の中で修行し霊力を養った。後世、自然との一体化による即身成仏を目指していったといえます。「隠岐に流された後醍醐天皇の時代、南朝を支えた闇のネットワークとして、修験者や密教との関わりが大きかったのです」。

密教

大乘仏教の対極にある仏教の流派です。日本では真言宗系と天台宗系のそれぞれ密教宗派があるらしい。「このうち真言立川流では、男女が交わって即身成仏するのが教えになっている。男女の関係が比較のおおらかなことは、『熊野集』でも見られたことです。

Tさん：真言宗について教えてほしい

前山僧侶：平安時代に空海が唐に行き仏教を学んできた。それをまとめて真言宗とし、即身成仏を目的とする。当時、宗教は総合的な学問として成立していた。鎌倉時代以降は、庶民の暮らしのための宗教が重んじられてきた。



<12月12（土）の授業予定>

- テーマ：貧乏と希望のあいだ・・・わたしはいまどこに？
- 講師：アマゾンさん（不動産会社員）
- 時間：18：30～21：30
- 場所：三星温泉B1交流室にて
- 費用：1000円（給食代を含む）

お待たせしました。お久しぶりMrアマゾンことアマゾン先生の登場です。景気後退と同時に貧困問題がかまびすしいかぎりです。しかし、貧乏は希望を導く大きな光であると信じている楽塾では、昨今流行の反貧困や所得倍増というプロパガンダに惑わされることなく、また、貧乏をすべからくネガティブにとらえてしまうという疑問を、授業を通して見直してみたいと考えました。昨年好評だった同先生の「生活保護って何だろう？」「男と女のあいだには」に続く、エンターテイメント授業となることは間違いなし！人気講師の熱演にご期待ください。



第30回目の授業が終わりました

<車椅子>

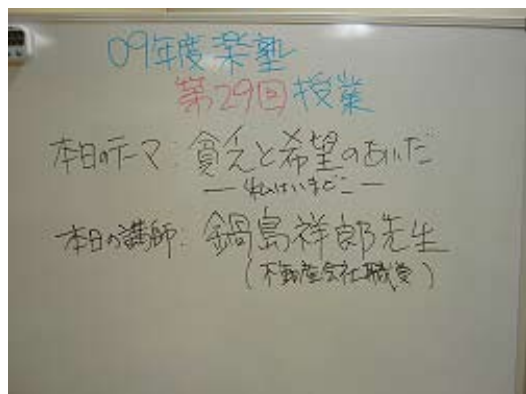
母が厄介になっている阿倍野の老人ホームに行くと、天気の良い日には、母を車椅子で連れ出し、近隣を散歩することにしています。さいわい近辺には知人、親戚などもあって、そのたび邪魔をして時間をつぶすには最適の環境なのです。老々介護などといわれ、高齢者への最終見とりへの嘲笑もあるようですが、私は車椅子を押しながら、ふと母が押す乳母車に乗っている自分を思い出しました。といっても乳母車の幼年時代の記憶はほとんど無いのですが、普通の家の母親と同じく、母は私を乳母車に乗せてすまいの近辺を散策したに違いありません。しかも私の成長を、おそらく期待もしながら、一定期間乳母車という培養機に乗せて、近隣の風景を観察させたことでしょう。

今、母を車椅子に乗せ、これは人生の交代期に当たっているのだと発見したような気持ちになったのです。母がこれから何年生きるのかはわからないけれど、自分が乳母車に乗って大きくなった分、今人生の最後の困難を経験している母に、乳母車を車椅子に替えながら、可能な限り幸福な気分を提供してやりたいと思いました。

2009年12月15日 塾長

<12月12日(土)の授業>

- テーマ：貧乏と希望のあいだ——私はいまどこに？——
- 講師：アマゾン先生（不動産会社社員）
- 場所：三星温泉B1交流室<楽塾>
- 日時：12月12日(土) 19:00～21:30
- 参加者：13名（スタッフ2名、講師1名を含む）



<前半——貧乏とは>

貧乏のイメージ

おなじみ近大生らに市大院生数名が参加してくれ、少しばかり研究ムードの「楽塾」になりました。しかし、講師がアマゾンさんなのでそんなアカデミックは心配無用。さすが名物講師のわかりやすく、しかもテーマ性の深い授業となりました。

「今日のテーマは『貧乏と希望のあいだ』です。私はこれまで貧乏の研究をしてきた結果、生まれた環境が人間の生活を左右するのではないかと考えていました」。「私が名門といわれる高校を受験し、その合格発表の次の朝、いつもより早く同窓の友人たちが教室に来ていました。なぜ早く教室に来ているのかを問うと、『自分たちはどうあがいても上にいけない。能力を持った人間がもっと上に行ってほしい。だから出来る人

間に期待するのだ。結果を早く知りたかった』と話してくれたのです。それがこの研究をする動機になっています」。

アマゾンさんが用意したワークシートには、塾生それぞれがイメージする「貧乏」とはどんな状態なのかを記入する個所があります。その下には「こうなりたくないこと」が記され、その右側には「希望」という個所と、その下には「こうなりたいこと」という項目が書かれています。「貧乏」と「希望」の項目のあいだには「あいだ」という空白が作られていて、それがまさに貧乏と希望の距離を表しているのです。

「それでは、皆さんがイメージする貧乏とは何かを記入してもらいます」。記入時間の10分後、T君から発表がありました。

T1君：鼻血。母親片親。子だくさん。

M1君：自分の小さいときは裕福だった。父は明治18年生まれで今も奈良に銅像がたっている。

＊自らの貧乏経験の裏返しとして裕福だった時代をイメージしたものだと考える（塾長コメント）

T2君：麦のおかかと梅干。麦飯。

I君：三食食べられないことが貧乏。遊べない（遊興費がなくなる）。カラーテレビや電化製品のある家との比較をすることで貧乏をイメージする。

M2さん：栄養失調で死んだ友人（その父親は飲んだくれ）。父親が保証人になったがゆえに差し押さえの赤紙が張られていたこと。学生時代、友人の卵を盗んだが、あの卵ほど体に染み渡ったことはなかった。

Y君：借金→三食が食べられない→住居費が払えない→住まいがなくなる→ワーキングプア。

Iさん：下駄。ランニングシャツ。青漬（はな）。

M3さん：孤独。仕事がない。食べられない。身寄りがいない。

Kさん：土地を持たないものは首のないのも同じ。茶粥。お金がないと離婚も出来ないこと。周りに助けしてもらえない。学生で奨学金を受けているので学生も辞められない。安全でいいものが買えない。早く老化しそう。

H君：心に余裕がない。夢がない。お金がない。

T1さんから質問です。「この授業はどんなことを意味しているのですか」ということで、「貧乏をよく考えることで、自らの希望を作るきっかけにしていきたい」とアマゾンさんのメッセージがありました。

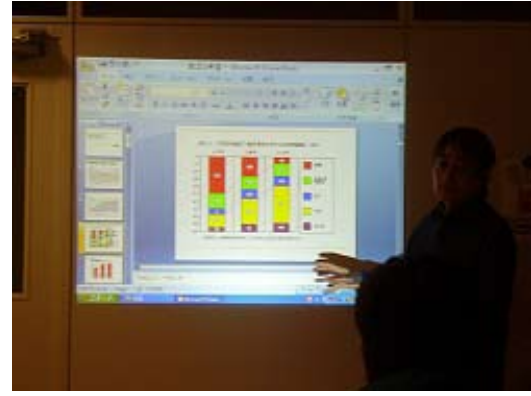
以前の研究から見えてきたこと

「自分がしてきた研究について一言説明しておきましょう。1995年に行った某県の全公立・私立高校生徒1万人の調査から、高校卒での就職を見た場合、正職雇用は6割。フリーターは4割になっています。これを1980年代調査で見ると、正職雇用は9割、フリーターは1割です。また1990年代の大卒者の正職雇用では7割、フリーターは3割でした。これが現在ではともに半数になっています。」といます。学歴格差が歴然です。

「高校卒の方がフリーターになりやすい、学歴が重要なファクターとなり、安定した生活をしにくくしているのです」「進学が出来ない原因としては、[勉強嫌い][学費がないから進学できない]という要素が大きく影響しています。親に貯えがあるなしでその子どもに大きく影響してしまうのです」。

また「お金以外の大学に行かない理由として、自分専用のTVを持っている子どもは進学しないということです。TVを持つ子どもの進学率は2割、就職は4割」といい「TVを持たないその進学率は4割で就職は2割」だそうです。つまり、物持ちが大きく左右するわけです。親の学歴は進学率に影響を与えていますが、高学歴の親の方がTVを子どもに買い与えていません。TVの悪影響を親がわかっているのです。結論として勉強嫌いはモノで甘やかされることが大きく影響しているのです」。

教育には金がかかるんですが、親の生活癖も大いなる影響があるのです。



<後半——希望に向かうために>

こうなりたくないこと

「後半では [こうなりたくない] ということを書いてみてください。どんなことでも結構です」。これは貧乏を誘引する要素を書き出すことです。

Y 君：孤独にはなりたくない。でも、お金がなくとも身寄りや知人があれば幸福かも。

H 君：精神的に追い込まれること。子どもの後押しが出来なくなること。

M2さん：仲間、友だちがいないこと。身体がうごかないこと。

Iさん：人をだましたり、貶めたりすること。納得の出来ない仕事をする事。

M3さん：心の余裕がないこと。働けず、ワーキングプアになること。身寄りがないこと。

Kさん：離婚できない。自立できない。身よりのないこと。安全な食事、貧乏だとレッテルを貼られること。

納得できないことはしたくない。

M1さん：貧乏になりたくない。アメリカ軍に占領されていたので、アメリカ大統領に文句を言いに行きたい。

T2君：ここまでこられて、この生活に満足。

I 君：年相応の健康を保ちたい。寝たきりは避けたい。

年齢によってもなりたくない中身が違ってきます。

「それでは『こうなりたくないところ』にならないためにはどんな方法があるでしょう」。このテーマでは出

●一日一善●感謝の気持ち（ありがとうの気持ち）●毎日の暮らし、周りの人を大切に●理屈で友を失うことの無いように●結論をすぐに出さない●仕事に喧嘩をしない（短気はソソク）●無理をしない●お金なんてもういいという価値・工夫のあるくらし金持ちから金を取る●金持ちが金を持つことを恥づかしいと思えるよう、新しい価値を作るなどなど、地道にこれを実行していくと、ひょっとしたら希望が見いだせるかも。

てきた意見をアトランダムに記述することにしました。

I君がアマゾンさんに聞きます。「(先生の)座右の銘は何ですか？」

「ツキがあると思うこと。ありがとうという気持ち、そして努力です」と話し、また「くよくよ考えず逆らわない。ネガティブな考えを変えることが大切です」とI君に答えていました。

こうなりたいこと——希望

「最後に『こうなりたいこと』を考えてください」。アマゾンさんのワークシートの最後の部分。これらの実行が遂に希望を導くことになるのでしょうか。

●金持ちになること(わかりやすいなあ) ●ツルゲーネフの『初恋』を最後まで読みたい(素晴らしい希望です) ●人に依存しない ●悩み事を話せる友人と同じ町に住みたい ●誰かに支えられ誰かを支えること ●尊敬されたい(尊敬することも大切かも) ●人の集まる中で暮らしたい ●即身成仏 ●凡々 ●教育は貧困を救う ●離婚の危機の無い安定した死後 ●希望を持って生きること(そのままやん) ●他人を受け入れる(受容)

アマゾンさんは「貧困とはこうなりたいという気持ちを失ってしまう状況ではないでしょうか。今夜はどうやって希望を見出すのかを考えてみました。その点お金持ちは希望が無いだろう。満ち足りた生活を生きる人は希望が無いのかもしれないですね」と希望のある笑顔で語ってくれたのです。

教訓や処世術と考えられるような意見、経験や体験から自分の思い入れとしての意見がたくさん聞かれました。しかし、多くは人とのかかわりを軸にした、当たり前の関係性をつないでいくことが「希望」の原点になっていると思いました。地域や社会のメカニズムが急速に変化していく中で、本来人間の持つリズムは互いに似かよい、機能を等しくするものだと思います。ヒューマンなスケールをきっちり持ち、薄れていくかかわりを補い、修正することから貧しさを克服し、希望につなげていきたいと考えました。

現在席卷する概念としての反貧困やワーキングプア等についても言及しなかったのですが、今回はその第1歩ということで、気長にこれらの問題について考えていこうと思います。



< 12月19(土)の授業予定 >

- テーマ：記憶を絵であらわす
- 講師：山口明香さん(アーティスト)
- 時間：18:30～21:30
- 場所：三星温泉B1交流室にて

りぷらでの楽塾ファッションショーで、何度かお世話になっているY2さんが今週のゲストです。今回は絵の具を使って絵を描いてみようという計画です。山口さんは、京都市立芸術大の彫刻科出身で、1年間に何度かの展覧会を開くアーティストです。現在どんな授業にしようかということで塾長も企画参加させていただきます。きっと楽しい授業になると思いますので、応援団の人たちもごいっしょにご参加ください。大きな紙いっぱい自分を表現してみてください。



第 31 回目の授業が終わりました

<チェ>

旧聞になりますが、「モーターサイクル・ダイアリーズ」という映画がありました。エルネスト・チェ・ゲバラが医学生時代の友人と二人でラテンアメリカをバイクで旅する話でした。チェのみずみずしい青春時代を描いてすばらしい映画に仕上がっていました。特別なドラマも展開も無いけれど、アルゼンチン生まれの医学生が、中南米各国の極めて貧しい現況をつぶさに目撃し医療への意思を確かにするのですが、もちろんここにはキューバ革命もボリビアもありません。しかし、現在のキューバにおける進んだ医療制度や技術はゲバラという文化が残したものだとな得しました。

むかし「ゲバラの日記」を読んだ時も、革命家というよりフィールドワーカーというイメージが強く、人間のなまな顔を見た印象があり好感を持ったことを覚えています。革命家でこんなにカッコいい男はほかにいるのだろうか。何より類を見ないイケメンに今もあこがれてしまいます。

最近「チェ」という二部完結の大作を見て、少なくとも最後まで兵士を仲間として付き合いしていく姿はやはりすごいと思いました。それに比べ、昨年「実録連合赤軍—浅間山荘への道程」という映画で見た仲間への嫉妬や拷問、殺戮を思い出し、わが左翼のお粗末さを嘆いてしまいました。それは、過去私自身が経験したことの裏づけにもなった映画でした。つまるところ、活動家という種族は人間には興味が無かったということだったのです。「集団の目的はあらゆる手段を正当化し、個人はあらゆる点で従属させられるだけでなく、共同体のために犠牲にならなくてはならない」という基本原理から出発する」（アーサー・ケストラー著「真昼の暗黒」岩波文庫）。

12月21日 塾長

< 12月19日（土）の授業 >

- テーマ：思い出を絵にしよう
- 講師：山口明香さん（りぷらスタッフ・アーティスト）
- 場所：三星温泉B1交流室<楽塾>
- 日時：12月19日（土）19：00～21：30
- 参加者：9名（スタッフ2名、講師1名を含む）



<前半——どんな思い出？>

クレパスと絵の具で

山口さんは、「楽塾」ファッションショーでおなじみ「りぷら」のスタッフであり、日常的には美術家としても活躍されています。本授業では「絵を描く」をテーマをお願いをしました。忙しい日々を送る山口さんに感謝いたします。ありがとうございました。

「今日は、皆さんの今まで経験してきた色々な思い出を絵に描いていただこうと思いました。まずは画用紙（B4判）に、用意した白いクレパスで思い出を絵でも字でも何でもいいから描いてください」。白い画用紙に白いクレパス？ 塾生諸君はよくわからないまま画用紙を前に考え込んでしまいました。「（白い紙に）白で描いたらようわかれへんがな」。T君はいつもの調子で応じていました。

「わかりにくいと思いますが、まずは白色で始めて見ましょう。絵でも字でもかまいませんよ。そのときの印象、その時の気持ちを思い出してみてください」。塾生たちはそれぞれクレパスでなにやら徐々に描き始めていきます。船のような形、人物像、抽象的な図柄などなど。その中には文字が入っているものもありました。描きあげていくとだんだん自分が描いた図柄がわからなくなっていく。画用紙を斜めにしたり、はすかいにしたり、光に反射させたりして苦労しながら絵を仕上げていくのです。

「出来上がったら、今度はその時の気持ちを色に例えたら何色なのか、好きな色を使って絵の具でその上に塗っていきましょう。出来ればたくさん色で塗り重ねてください」。それぞれの机におかれた絵の具箱、筆、筆洗を利用して、塾生たちは思い思いの絵の具のチューブを絞りながら、先ほど画用紙に描かれた白いクレパスの上にカラーをペイントしていきました。このように絵の具を使いながらキャンバスの絵が塗り重ねられていきます。

「そろそろ出来上がってきたので、いったん作品を乾かしてみしましょう。その後は後半のお楽しみにします」。作品の1枚1枚をドライヤーやガスコンロで乾燥しながら、前半を終わりました。



<後半——真っ黒けのケ>

黒く塗れ

「それでは、今描いて頂いた作品を申し訳ないですけど、今度は黒のクレパスで真っ黒に塗りつぶしてみようと思います。出来るだけ真っ黒にしてください。」「え！ せっかく描いたもんを塗りつぶすんかいな」。T君が叫ぶとMくんも一緒になって文句を言います。山口さんは申し訳なさそうに「すみません。とにかく黒く塗ってください」。事務局長は「ペイント イト ブラックやね」といいながらストーンズの「黒く塗れ」を鼻歌で歌いながら黒く塗っています(この青年はこの曲知ってるんや。ちょっと驚き)。塾生たちは、ちょっと残念な気持ちを隠しながら、描きあげた作品に黒クレパスでゴシゴシ塗りつぶしていきました。こうして全員の作品は、すべて真っ黒ケになってしまいました。山口さんは塾生たちに「黒く塗る前に描いてきた絵のイメージを話してください」と質問します。「それではT君から」始まります。

T1君：イメージは高倉健やね。若いころ、高倉健の映画を見て感動した。その後映画の楽しみを覚えていった。映画は思い出やね。

M君：俺が中学生の頃に学校同士の喧嘩があったのを描いた。こっちはチェーン、あっちはナイフを持って喧嘩をやった。3人ぐらい死んだ。学校同士の対抗やった。

塾長：クリスチャンの幼稚園だったが、クリスマスの時、もみの木やひかりものを初めて見て感動した。ピカピカ光るものがきれいだった。

T2さん：木造のナマ船(魚を加工するために運搬する船のこと)を描いた。香川県にいた頃、船長と機関士と私の3人がその船に乗り込み、明石まで魚を買い付けに行き、翌日朝方帰ってくる。買い込んだいわしなどを釜ゆでし海岸で天日干しする(「ああ、それで煮干っていうんや」とみんなが納得)。これはしんどい思い出やった。*T2さんは16歳から20歳ぐらいまで、夏場の3ヶ月間はこの仕事をしていました。

I君：はじめて東京に出たとき、飯田橋で芸者さんというものを初めて見た。ものすごくきれいな人で、すれ違った時すごくいい匂いがした。その時の印象をまとめてみた。その人はその頃の芸者といわれる人たちとは数段に格が違っていったと思う。

N君：公園の一部を描いた。小学校高学年二十歳頃まで、ずっと思い出の場所だったがその印象のある公園を描いた。野球やジョキングなど、ここで遊んだ記憶があり、ここが一番印象に残っている。友だちやいとこなどとも遊んだので一番の印象がある。

事務局長：大学を卒業し、北海道からの船で帰阪した時の記憶です。北海道→仙台→名古屋への航路の途中、大学入学の喜びの頃から卒業までの不安などを思い出した時の、時間の経過を描いてみた。帰阪の不安が強かった。

スクラッチで遊ぶ

「黒に塗った作品を、ここに用意してある釘(五寸釘)で引っかいてください。どんな方法でもいいので、自分のイメージを頭に置いて釘でスクラッチしながら描いてください」。塾生たちは、またまたよくわからないまま釘を持って途方にくれています。しかしさすが塾生！ 難問もモノとはせず、ゴシゴシ真っ黒画面をスクラッチし始めていきました。そうすると、黒で隠れていた最初の絵の具の部分がスクラッチによって徐々に現れてきます。ただ、全体が暗い色調で描かれている絵の場合は引っかいてもそれほどの効果は現れませんでした。明るい色調の作品の場合は多少の色彩が浮き上がるのですが。

「ちょっと最初の説明がまずかったために、スクラッチの効果が出なかったですね。申し訳ありません」と山口さんは言います。いえいえ、結果よりそのプロセスがみんなの楽しみになっているのだから楽しかったのです。欲を言えば、クレパスの重ね塗りがより効果はあったかも知れません。次の機会の時にはまた山口さんにやってもらいましょう。塾生諸君、真っ黒ケになってご苦労様でした。



< 12月26(土)の予定 >

「さようなら 2009年謝恩会」のおしらせ

●時 間：18：30～21：00

●場 所：ビアン（長橋3丁目7番28ブランコート1F）

●費 用：塾生1000円 講師：無料

●連 絡：090 - 6551 - 4214（佐々木）

09年楽塾最後の授業は「謝恩会」です。本年1月から12月まで、講師を無償で担っていただいた方々に、塾生および楽塾事務局からささやかなお礼でお返しをする交流会です。おいしい料理を食べながら、1年間の授業の思い出を語り合いたいと思います。講師の皆さんのご参加を楽しみにしています。あらかじめ講師の皆さんにはご連絡をさせていただき予約を締め切らせていただきました。この場をお借りし再度ご通知いたします。この連絡を最後としますが、お気づきの点があればご連絡ください。なにとぞよろしくお願いいたします。

第32回目の授業が終わりました

<さようなら 2009年「楽塾」謝恩会>

「さようなら 2009年『楽塾』謝恩会」が、賑わいの余韻を残して終了しました。本年1月から2月までの8回授業（2008年度）に、2009年4月から12月までの32回授業（2009年度）を加え、本年中に全40回の楽塾授業が行われたこととなります。

全講師30数名、参加塾生の累計は565名でした。今回の謝恩会への講師の参加予定者は35名でしたが、直前に2名が体調不良で不参加を、また塾生の参加予定者も3名が欠席となり、しかし、昨年の謝恩会より予想を上回る参加者がありピアノは満席となりました。2月に実施した修了旅行のマイクロバス状態のようなひしめき具合で盛況な謝恩会が出来ました。とくに市大の水内先生が、都市研究プラザの院生諸君や府大の中山先生らを連れてこられ、私としては、これからの楽塾授業の講師メンバーに引っ張り込もうと、虎視眈々（こしたんたん）です。

12月28日 塾長

<12月26日（土）の「楽塾」謝恩会>

- テーマ：さようなら 2009年「楽塾」謝恩会
- 総合司会：田岡秀朋「楽塾」事務局長
- 催事管理：川井友二（都市公園管理共同体事務局）
- 場 所：レストランピアノ
- 日 時：12月26日（土）18：30～22：00
- 参加総数：38名（スタッフ3名を含む）



<1. 開会宣言から乾杯へ>

田岡事務局長の総合司会のもと、予定の時間きっかりに、「開会式の宣言」を塾生のTさんが行いました。「塾生と楽塾スタッフが、この1年間お世話になった講師の方々にお礼をこめて、謝恩会を開催します」という宣言でした。つづいて塾長の私は「昨年7月から楽塾を開校し1年半が経過しました。こんなに続けてこられたのは、授業に参加してくれた塾生諸君がいたからであり、何よりも趣旨に賛同し、授業を作っていた講師の先生方がいたおかげです。楽塾はたくさんの協力で成り立っています」とお礼の言葉を伝えました。

このあと株式会社ナイスの富田社長から「今年、私は釜ヶ崎に（コミュニティーハウス萩）というマンションを建てました。地域の中で高齢者が安心して暮らせるまちづくりの観点から、支援付き住宅と純粋な部屋

貸し住宅の中間にあるような、生活拠点を考えてみたかったのです。一方『楽塾』は地域の中で根をおろし始め、楽塾の「学校」という手法は、ひょっとしたら新しいまちづくりという意味からも“1丁目1番地”となるケースになるのではないか」と話し、私は楽塾への共感を聞かされ嬉しく思いました。

会場では、全40回の授業を撮影してきた数千点の所蔵写真を、田岡君が約1900点に集約し、編集した授業写真をスライドショーとして映写しました。富田社長の挨拶のあと、塾生のNさんが乾杯の音頭を引き受け、全員ビール（一部ウーロン茶）で乾杯をしました。



<2. 祝宴>

謝恩の宴（講師紹介1）

ここからは謝恩の宴の前半となります。まずは田岡事務局長が、本年1月から前回までの40の授業内容を時系列で簡単に紹介し（『楽塾の歩み2009』参考）、その後、講師を引き受けた人たちが楽塾への印象や寸評を語ってもらう時間としました。これは、授業日時など時系列とは関係なく、座席の順番で進行していきましました。ここでは講師の人たちの名前を当日の順番で記述しておきます。稲田七海氏、黒木宏一氏、若松司氏、久保晶氏、水内俊雄氏、ジョン・ホンギョ氏、菊田好克氏、藤原敦子氏の順で、楽塾での各授業の受持ちを語っていただきましたが、中には「今後も楽塾の継続を！ 塾長も年なんだから後継者の発掘を」という有難い意見もありました（涙）。

賞状授与

ここでいったん自己紹介を中断し、賞状授与の時間に切り替えます。アマゾンさんが授与者として、塾生皆勤賞のT2さんに賞状と副賞の花（まちの花屋さんBon購入）を渡して頂きました。また、楽塾貢献賞としてこの1年間、講師役が8回と最も多かった市立大学都市研究プラザ（教授・准教授・院生）の人たちに授与しました。水内俊雄氏を代表として受け取って頂きました。授与式のあとアマゾンさんから「講座だけでなく、『この人に会えるから・楽しく給食を食べられるから』といったことが楽塾に参加する1つの大きな動機であり、学校の大切な要素だろう」という簡単な講評をいただきました。

塾生の紹介

楽塾塾生の順番はTさんから始まり、Mさん、T2さん、Nさん、M3さん、Yさんと続きました。残念ながら3名の欠席者がありました。

謝恩の宴（講師紹介2）

引き続き、後半に残した講師紹介の時間に戻りました。参加講師名を自己紹介の順番どおり記述しておきます。森田智保氏、T氏、三宅嘉美氏、平田節子氏、和久貴子氏、川崎那恵氏、山崎安敦氏、柴田剛氏、山口明香氏、川浪剛氏、アマゾン氏でした。この席でも「今後も楽塾の継続を」という意見が何人かから話され、少しばかり本気にならなくてはと緊張してしまいました。このあとは約30分間飲食の時間としてリラックスメニューしてもらうことにしました。この間、Tさんがマイクを持って大声で歌を歌ったり、アマゾンさんの2人の子どもたちとふざけあったりしています。





来賓紹介

20時を過ぎ、これまで「暮らし応援室」のパートナーとし、雇用協力の大きな力を頂いてきた(株)美交工業専務の福田久美子さんに来賓の言葉をお願いしました。何を隠そう福田さんは楽塾の理事長なのです。理事長を持つほどの体をなしてはいない楽塾なのですが。福田さんは、「名前だけの理事長で、昨年一度の講師役で登場させていただきました。楽塾には何も出来てはいませんが、これからは新たに参加させていただきます。これからもよろしく」と話してくれました。福田さん、今後も力強い仲間として期待しています。

研究者の見た楽塾

水内さんは、日常さまざまな側面で協働作業をさせて頂き、楽塾には多くの院生や研究生を送り込んでもらっています。03年発刊の路上新聞「なにわ路情」以来の、“路上”パートナーとして一言話していただきました。

「楽塾は、いっぱい線路があって錯綜していて、あちこち勝手に路線が向かっています。どこに連れて行ってくれるのかわからず、それがスリリングでもあります。テーマもばらばらなんですけど、けれど、その答

えを出さない方向が極めてユニークな試みだと思うのです。いつまでこの形式で続けられるのかという懸念もありますが、楽塾をこれからも続けて行ってほしいと思います。新年3月までに、都市研究プラザと楽塾の共同編集として、楽塾プロジェクトの冊子を作成する予定です」。さすがテッチャン！楽塾を線路に例えてくれました。私もフィールドから水内さんに発信し続けます。これからも面白いパートナーシップを続けていきたいと考えていますのでよろしく！

このあと大阪市大の院生や研究者（ジェイ氏、平川氏、タミン氏）、中山先生らの自己紹介をしてもらいました。またむすびの会の新人村川さんにも話をしてもらい、その後、遅れての参加となった蓬莱さんにも自己紹介と楽塾について一言を話して頂きました。また、家族で参加して頂いたアマゾンさんや奥さん、それから2人の小さな子どもたちからもメッセージがありました。今やアマゾンファミリーは、楽塾のアイドルとなりつつあるようです。



<3. 宴の終わりに>

閉会のことば

山崎さんは、本年初めから楽塾に参加してくれているイケメン塾生ですが、10月に同じ近畿大学の本田寛大君（本日風邪でダウン）とともに講座も担当してくれました。今日は講師の側で参加してもらいました。平成元年生まれの青年も、塾内ではおなじみの顔になってしまいました。今日のトリは塾生としての山崎さんをお願いしました。

「閉会の言葉を頼まれてしまいました。楽塾は千差万別、たくさん色で出来ています。ごっちゃん色が魅力でたくさん色に囲まれ、僕にとってはこの空間にいることがすごく居心地いいのです。楽塾をひとこと色で表すと虹だと思います。この虹の中に居心地のいい自分がいます。これからも楽塾に参加します。そしてそれを閉会の言葉とします」。山崎さんは「虹」という表現で謝恩会を閉めてくれましたが、塾長としてとても嬉しい閉会の言葉でした。山崎さん、これからも新たな授業を作って一緒にやろう！

閉会のまとめ

最後に田岡楽塾事務局長から、2月の修了記念旅行への参加のお誘いと、楽塾への“ご勧進”へのお願い（かなり強引）を参加者に伝えてくれました。ご勧進、つまり浄財については参加者から10万円近くが集まりました。今回の謝恩会経費および楽塾運営に役立たせて頂きます。参加者の皆様ありがとうございました。

最後に田岡君、総合司会ご苦労様。川井君会場のお世話をご苦労様でした。

楽塾は1月9日から開校です。皆様にとって2010年が魅力あふれる年になりますようお祈りいたします。今後も楽塾の応援をお願いいたします。



<2010年1月9日（土）の予定>

- テーマ：支援という事柄……—キリスト者のメッセージ
- 講師：本田哲郎神父（ふるさとの家）
- 時間：18：30～21：00
- 場所：三星温泉B1F交流室
- 費用：1000円（給食費500円を含む）

ながらく釜ヶ崎「ふるさとの家」の施設長として、日雇い労働者や路上生活者たちの支援活動をされてきた本田神父を、年初の講師としてお願いしました。全国的に見てもキリスト者の野宿者支援は多いような気がします。わが国の神道、仏教のそれと比べると著しく差があるように思うのです。いわゆる弱者への視点が違うのか、何よりも弱者とは誰なのか、そんなことをヒントに話のスタートを切ってもらいたいと考えています。

第33回目の授業が終わりました

<年の初めに>

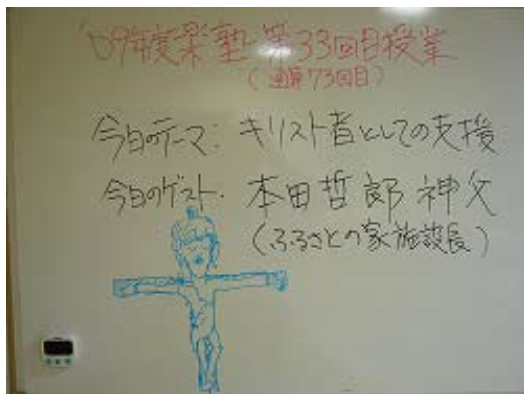
塾生、楽塾応援団の皆さん。明けましておめでとうございます。2010年を迎えました。楽塾へのたくさんのご協力、力強い応援のおかげで、09年度の授業も残りわずかとなりました。皆さんに感謝を申し上げます。これからもみんなの寄合い場所「楽塾」を大いに活用していただきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

年の初めに、塾生のT2さんからお菓子を相伴しました。給食時みんなでデザートとしていただきました。また、Tさんがコツコツためた硬貨の入った貯金箱を「楽塾に使ってほしい」と持参してくれました。両君、年初の感動をありがとう！

2010年1月12日 塾長

<1月9日(土)の授業>

- テーマ：キリスト者としての支援
- 講師：本田哲郎神父（ふるさとの家）
- 時間：18：30～22：00
- 場所：三星温泉B1F交流室
- 費用：1000円（給食費500円を含む）
- 参加総数：15名（講師・スタッフ2名を含む）



<前半——宗教の本質>

動機

本田神父を「楽塾」に登場をと考えたのが、今回のテーマ「支援と被支援」を構想していた時でした。キリスト教主義者ではなく、キリスト者の立場から話が聴ければと考えたのです。年初の第1回目は優しく味わい深い、しかもキリスト教への深く切り込んだ話になりました。

カマという場

「カマというところは不思議なところで、いろいろなものを剥ぎ取ってしまうところだ。自分の立ち位置さえひっくり返してしまうところ」。本田神父のカマへの印象です。神父の言葉を言い換えれば、それは「価値観」の変転ではないかと思いました。

「私は80年代後半にカマに入った。90年代のバブル崩壊、神戸の震災を経てブルーテントが増えてきた。震災時にニュースを見て、<ふるさとの家>に来ていた一人の労働者が『なんとかせんといかんぞ』と声を上げた。『炊き出しをしたらどうか』という提案を受け、たくさんのおにぎりを作って4人ほどで神戸に出かけた。朝に出かけたのに神戸に着いたのは夕方だった。当時現場にいる人たちや、若い人たちのボランティアに関わる感覚が素晴らしいと感じた。それは辛さをわかっている人でないと、このしんどさはわからない、ということだと思った」と本田神父は述懐します。

「カマに来てから散髪のボランティアをしている。そのきっかけは一人の男性が発した、『本田さん、今日は悔しかった』という言葉だった。手配師から『あんた、その髪何とかしいや』と言われ、早く仕事をしたかったので、人に金を借り、髪をさっぱりした後その手配師を探したがもういなかったという。その青年にとってそれが悔しかったというのだ。「食事や、衣類などは優先されるけれど、散髪はいつも最後になってしまう。初めはぴんと来なかったが、何人もそんな人が出てきて自分でも理解できた」と話し、「私は学生時代、寮生活だった。だから（自分でやってきたのだから）散髪ぐらい出来るだろうと考え、震災の後ぐらいから「ふるさとの家」でやり始めた。オールバック・裾刈りなど練習しながらだんだん上手になっていきました」。

今では散髪メニューが増えたと言い、「スポーツ刈り・丸刈り・カット・裾狩りなどのほか、女の人のもやります。出来るだけ丁寧に」と話す。「険しい顔で入ってくる人たちも、散髪しているとみんな例外なく表情が柔和になってくる。気持ちがほぐれてくるのですね」。私も頭を調髪されていると気持ちよくなり、眠ってしまう時があります。

「仕事がなく、食もほとんど食べていない40歳くらいの男が我慢できなくて、大阪市の更生相談所に相談に行った。受付では一言『仕事探してがんばれ』と言われ、最後の手段だと思って行ったのに断られてしまったという。神父である私はどうすることも出来なかったが、脇にいた男が『わしらも一緒や』と一言しゃべった。その瞬間、当の男の表情が和らいだ。私は何の答えも出せなかったが、その男の言った言葉が青年に元気を与えるきっかけになった」と話し、同じ境遇の者同士の共感が、気持ちを落ち着かせる素になっているのだろうと思いました。

支援ってなに？

「今回のテーマ支援、被支援のテーマだが、これまでは支援とはなんと立派なことだろうと思っていた」と言い、しかし自らキリスト者としての立場を明確にされます。

「もう亡くなったNさんが結核で入院していた頃、私に『日本を悪くしている大学はどこだと思うか』と聞いてきた。私は単純に東大・京大だと答えると、『本田さん、わかってないな。上智大（本田神父は上智大）と聖心女子大だよ』と答えた。『なぜなら上智は中産階級以上の連中を養い、聖心は皇室を中心としたハイソサエティーが集まるどちらもクリスチャンの大学だよ』というのですね。勝ち組に都合のいいような仕組みを作っているのが日本の大学であり、キリスト者の現状だというわけで、私はキリスト者としての立つ瀬をなくしたのです」。そして「これから考えていかなければならないことは、人間と人間のかかわりを再生

していくこと、そしてキリスト者にふさわしくない人間がキリスト者を名乗っているということが問題」と語ります。

あるキリスト者の発言から

本田神父はある一文を引用します。「出来ないものは出来なくとも結構。100人のうち1人でも出来ればよい。戦後、底辺を底上げすることばかりに腐心してきた。非才や無才には実直な人間になってもらえばよい」。これは何年か前、教育審議会役員をしていた三浦朱門の新聞掲載文で、稚拙な文章だったので私も覚えていました。「この人はキリスト者ですが、キリスト者としては信用しないほうがよい」と話し、神父はキリスト者以前の人間の本源を考えない人の浅はかさを訴えるのです。

「しかしキリスト教だけではなく、仏教、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教、すべてが同じだろう。私たちは、いったん宗教を脇において、人間という観点からものを見直していかなければいけない」。「本当のところ人は宗教によっては救われないのではないだろうか。宗教に入信することでその寄って立つ場、安心を与えられることはあるかもしれないが、痛みや悩み、貧しさ辛さの共感を分かち合うことがなければ宗教とはいえない」。本田神父は、宗教者自らの悩みとして私たちに語りかけてくれました。「死後の世界をいくら美化しても、生きていて解放されなければ意味がありません」。

この間、塾生たちからの横槍や「キリスト教にも占いがあるのか」などの質問も入りながら前半が終了しました。



<後半——>

「明日はわが身？」のわが身とは誰？

本田神父作成のレジユメを見ながら後半の講義が進められます。

- ①野宿生活をせざるをえない人がどんどん増えています。と始めた上で野宿者は「勤労意欲にかけた人たち」ですか？—という問いかけ。「“明日はわが身”とは言うけれど、社会の上流にいる人たちにはそんなことは実感として関係ないだろう。仕事の末端で働く人たちこそがそんな境遇のなかで実感を確かにする。この言葉は言葉遊びに過ぎない。誰よりも汗水たらして働いている人たちから切り捨てられていくのだ。そこをちゃんと見据えていく必要がある」。私の経験事例でも、当事者の中にハイソな連中の野宿経験者など皆無です。マスコミは、サクセスストーリーを捏造するのが大好きなので、一流サラリーマンが野宿し再度這い上がってきたケースに群がろうとするのですが、そんなものは元々ありえないのです。
- ②野宿は“三日やったらやめられない”気楽な生き方でしょうか？—では市内に発生する「死体検案記録」などでデータの内容を考えます。ホームレスの不自然死場所（02年記録）は「路上90人、公園45人、河川敷17人などなどについてはMさんから「もっと多いはずや」などと声が飛びます。気楽な生き方に対し、これまたTさんが「自分の意思で野宿をやるならそれには同意できる。自分はやりたくない」という意見。

マザー・テレサ

マザー・テレサの話にも及びました。「前述のNさんが、テレサを批判していたことがある。Nさんは、『彼女を賞賛する言質とは、ボランティア活動の目標であるかのような位置づけがある』と言うのだ。正直、私もそれを目標にしていたことがある。しかし彼は『そんな活動ではなく、私たちがそんな状態にならないように動いてくれればいいんだ』と言う。私はそのとき目が点になった。つまり彼が指摘したことは、『世界中テレサを誉める暇があれば、もっと路上死しない社会を実現するために働いてほしい』と言いたかったのである」と話すのです。私も以前からマザー・テレサには懐疑的だったので（Nさんの観点とは違っていただけ）神父のお話しには共感しました。

このあと、③失業が野宿に結びついてしまう今の日本社会…何とかしなければいけません」という項目ではMさんが「意図的に犯罪をし、刑務所に入って3食食った方がええという時代や」という発言がありました。「これは本当にそうだと思います」と本田神父は同意します。寝場所も無く、仕事探しであくせくした挙句、食事もまともに出来ない現況では、拘置所や刑務所の中のほうがずっと楽だと言いたいのです。

「むすびにします」。ということで本田神父が関わる「釜ヶ崎反失業連絡会」（反失連）について言及がありました。反失連は福祉的対応をしているが、社会に役立つ仕事を作り出そうと、就労や生活保障などの実現を目指している。これまででひとつの成果は特別清掃事業(特掃)だ。輪番で回ってくる。また福祉センターのガードマンなども含め、1人の人が週に1～2回作業が出来る。これからも仕事作りで連帯していきたい」という話で時間が来てしまいました。質疑などは給食時にやろうということだったのですが、本田神父が帰らなければならないため、この場で質問ということになりました。

Tさんは「神父の活動開始時期はいつですか」と質問しました。「私は21年目になります。89年からですからね」。田岡事務局長が「特掃枠で新たな職域を開拓していくという選択肢は無いのだろうか」という答えとして、「たくさんの選択肢を作っていききたいが、運営管理の面のお金がかかってしまう。今のところは多くの人の仕事をつくりたいので、なかなか思うようにいかない」という応答です。

今年の決意を一言漢字で。

内容も質も高い授業となったあとの給食時間中に、Tさんが突然「みんなの今年の決意を漢字一言で表したらなんと言う字になるかやりたい」と提案し、口にご馳走をほうばりながらの決意表明給食となりました。いや～大騒動になりましたね。

各々の決意漢字を、Tさんは白板に書き連ねていきます。以下はその順番です。

生 (Tさん) → 働 (Uさん) → 修 (Kさん) → 苦 (I 4さん) → 健 (O 2さん) → 明 (Aさん) → 性 (Mさん)
→ 老 (T 2さん) → 課 (Yさん) → 変 (Iさん) → 持 (塾長) → 強 (Nさん) → 換 (事務局長)。

* Bさんはパスでした。それぞれの漢字由来は、読者の想像にお任せいたします。なお前山僧侶は仕事のため途中下車されました。

塾生のレポートが届きました

これら授業のレポートを、塾生で大阪市立大学大学院創造都市研究科の川北かおりさんから楽塾事務局へ送っていただきました。川北さんありがとうございました。「塾長の授業参観」と合わせてご覧いただければ幸いです。



< 2010年1月16日(土)の予定 >

- テーマ：施設としての支援
- 講師：坂口邦明氏 (自立支援センターおおよど相談員)
- 時間：18:30 ~ 21:30
- 場所：三星温泉B1F交流室
- 費用：1000円 (給食費500円を含む)

私が、応援活動をする契機となったのが、「自立支援センターおおよど」の相談員として、多数の野宿者の対応を始めたことでした。「センターおおよど」は施設とはいえ、アットホームな雰囲気を持ち、利用者たちのなかでも人気の高い施設でした。当時の施設利用者たち数人は楽塾の塾生でもあります。T坂口相談員は後輩に当たります。面倒見のよい坂口さんに、施設の中での支援のあり方を話していただくことにしました。

第 34 回目の授業が終わりました

<衛星放送>

TVを見て得をしたというプログラムに出会うことがあります。TVの無い生活が長かったので番組表を見る習慣も無く、刹那(せつな)的にボタンを押し、その時気にいった絵があれば見るというスタイルなので、だいたい前半あるいは後半の内容が欠けた中途半端な見方になるのですね。

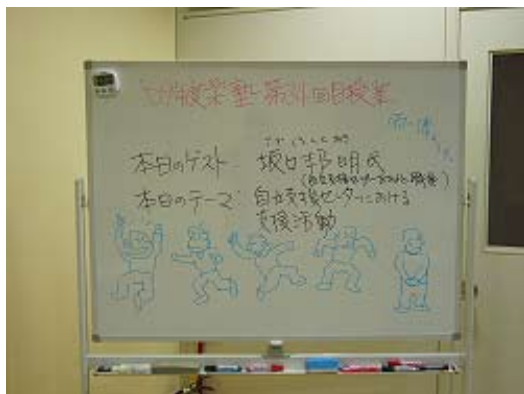
まず昨年のお正月の体験です。私は昔からウイーンのニューイヤー・コンサートを当地で見たいと思っていたのですが、たまたまスイッチを押したらNHKの衛星放送で「ニューイヤー・コンサート」の同時中継をやっていたのでした。演奏はすでに佳境を迎えていたのですが、こんな見られるんやと感動したわけです。衛星放送なのだから当たり前といわれそうですが、あまりそんな文化に親しんでいなかったわけですから、メディア文化はすごい!と思ったのです。

衛星放送っていつの頃からだっけ。そういえば20数年前、ライブエイド「USA FROM AFRICA」を見てすごい!と感じた記憶があります。世界の各拠点から、多くのミュージシャンが「WE ARE THE WORLD」を歌っていた。思えばあれは衛星中継だったのだ。そして今年のお正月。スイッチを押すと、またもや偶然「ニューイヤー・コンサート」が現れました。半分ぐらい終わってはいましたが、ウイーンフィルの優雅な音色と、ジョルジュ・プレートルというフランスの名コンダクターの指揮を堪能したのでした。例年衛星放送でウイーンフィルを見られることがわかったので、もうウイーンまで行かずともという気持ちです。

2010年1月20日 塾長

<1月16日(土)の授業>

- テーマ：自立支援センターにおける応援活動
- 講師：坂口邦明さん(自立支援センター職員)
- 時間：18:30～22:00
- 場所：三星温泉B1F交流室
- 参加者：9名(講師1名、スタッフ2名を含む)



<前半——自立支援センターの概略>

坂口さんのプロフィール

予約していた参加者がこれだけ少なかったのですが、自立支援センターを利用していた塾生たちが、親しみを持って坂口さんを歓迎してくれていました。坂口さんとコラボをお願いしていた同僚の武田さんが体調不良で欠席され残念でした。

坂口さんは「おおよどに入った頃、元警察官と見られていたことがあった。実は学生時代、権力に棒（ゲバ棒）を振って対峙し、人生を棒に振った」と言い、おおよどでの仕事は自分にとっていい職場だと思っている」と語り始めました。私も同感で、おおよど及びおおよど寮は素晴らしい施設でした。代々施設長のユニークな取り組みや人柄の影響も大きかったと思います。

坂口家は仏壇屋さんを経営していたそうですが跡継ぎせず、「介護資格を取り福祉施設などに勤めたが腰痛であきらめ、2001年、山本施設長との出会いがあってセンターの相談員として再スタートした」といいます。「その当時、武田さんや佐々木さんが先輩でいて、武田さんが硬派なら佐々木さんは自由人であった」らしいです。「新潟の仕事があり、利用者を連れて武田さんと一緒に大変な作業をした記憶がある。佐々木さんは食堂などで利用者を集めてディスクジョッキーをしていた」と明かされてしまいました。

「山本前寮長の考え方は、再野宿をさせないというコンセプトを持っていた」。そうですね。私も寮長に再野宿調査を提案し、市大の水内先生や府大の中山先生たちの協力を得て実現したことがありました。これはユニークな調査でした。「センターは大体3～4ヶ月間で退所してもらうのがルールです」と言うと、M君から「わしは1年居とった」と発言あり。

（坂口さんへの応答として）

T君：「ストリップ小屋に勤めとった若い奴と（おおよど）の風呂場で喧嘩になりかけた時、寮生のMさんに止めに入ってもらったことがあった」

坂口さん：Mさんは今も元気で建築の仕事をしてはります。

T君：おおよどに入る前、武田さんに飯の用意してもらったことがあった。

センターおおよどの現在

センターは、古くからの職員が配置転換され、若い人たちが入社してきても辞めていくケースが多い」と話します。「入居者の移り変わりとして、センターおおよどの年齢層は若くなっている。平均44～45歳ぐらい」といいますから、2000年初頭と比較すると、10歳近くも若年化しているのです。「彼らの特徴は、親子の関係性が悪いとか、生活習慣に問題がある人たちが多く、個々の内面がわかりにくくなってきている。人間関係の構築が不得手な人たちも気になる。そのほか借金問題を抱えてしまい、金融関係などから請求書が来た時点で退所してしまう」。自らが都合の悪い状況になると、遁走してしまうのも野宿者の特色なのですね。

施設としての支援

「現在、大阪に支援センターが5つ。内訳は舞洲1と2、おおよど、淀川、西成である。食事、宿泊、入浴サービスをする。月、水、金はハローワークの職員が来て就職相談会をする。技能講習では自動車免許取得が人気がある。中型・大型もある。フォークリフト、ヘルパー2級もあり需要が増えている。アフターケアとして職場訪問、家庭訪問をする。金銭管理なども大切な仕事だ」とセンターおおよどでの活動を話してくれました。

センターおおよどの役割

センターおおよどのパンフレットを資料として、施設の役割を解説してくれました。

○畳の上で生活したいという人たちにセンター入所をさせる（入所日は週1回。現在は舞洲1・2で確認作

業をした上で、各センターに配置される。必要に応じ三徳寮に短泊（2週間ぐらい）した上で入所になることもある。

○毎日、センターでの清掃作業があり、1回250円の支給で週1回の支払いがある。貯金をしたりタバコを買ったりする人たちもいる。

○住居や仕事、身元保証などが必要なときは保証人制度などを利用する。2万円払えば保障される。

○貸与金制度では、面接に必要な交通費、食事などでお金を貸す。これらは仕事が決まった時に返却してもらう。ここでT君「1年で100万貯めた。使うことあらへんもん」。T君、その金今残ってんのん？



<後半——自立支援センターおおよどの事業>

部屋担当のしごと

「部屋担当は、それぞれの個人面談をするのだが、利用者はここに着くまでにあちこちで既に面談を受けているので、あまり聞き取りをしたくない。しかし、こちらは初めてお会いする方なのでと断りを入れたうえで、出来るだけ正直に、就労や借金問題などの情報だけを確認し応援の糧にする。また借金問題などの無い人に関しては住民票をセンターへ移動をする。NPO釜ヶ崎支援機構の促進事業などの共同事業を1ヶ月間してもらう。弁護士相談も実施している。過払いなどの問題が多い」という。

Tくんが「多重債務で自己破産してノウノウとしている人間がいる。複数のサラ金を借りまくって返さんままトンコしてしまう奴が多い」と憤ります。坂口さんは「居宅保護、半就労半保護などを活用しながらそんな人も結構いる。現在おおよどの就労自立率は45%（大阪市目標は60%）。これまではセンターを1度しか利用できなかったが、現在は複数回利用できる」となっている。

退所の形

「これまでの利用者が退所する理由としては、退所勧告（ギャンブル・喧嘩・お酒が多い）161人。自主退所340人。帰郷退所31人が主だったものである。また639人が就労自立をしている（09年12月現在）」という。

アフターケア事業

「センターおおよどのユニークな作業はアフターケアだと思う。前任の施設長がこの制度が出来る前から独自でやってきた事業で、他のセンターに先んじてやってきた仕事になっている。サテライト事業は、いきなり自立独立して失敗することのないよう、退所前に2ヶ月間の訓練期間を設けている」。現在センターおおよどの利用者数は70名（定員100名）。最近の傾向として、低年齢化していることと利用者が少なくなってきた印象があります。ひとつには生活保護費を受給しやすくなっていることがあげられると思います。これまで、役所が門前払いしていた当事者への対応が、徐々に緩和してきている傾向にあるのでしょうか。



< 2010年1月23日（土）の予定 >

- テーマ：吉野から熊野へPART 3
- 講師：前山村雄僧侶・佐々木敏明（塾長）・
- 時間：18：30～21：30
- 場所：三星温泉B1F交流室
- 費用：1000円（給食費500円を含む）

本来なら、大谷浩子さんが講師として登壇するシリーズ「ことのは」の予定でしたが、大谷さんが急用のため急遽予定を変更いたしました。2月初めが旅行になっていますので、一足先に旅情を楽しむため、ツアー立ち寄り先などの前知識を授業として話すことになりました。前山僧侶が解説する吉野・熊野地方の旧跡案内に加え、塾長の日本歴史講話を少しばかり聞いてもらおうと考えています。

○2月6～7日の修了記念旅行の参加申込みを締め切りました。ご協力をありがとうございました。参加者には近日中にメンバープラン表をお送りいたします。

第35回目の授業が終わりました

<あらためて日本の歴史を学ぶこと>

今回の授業は、大谷浩子先生が急用のため、急きょ前山・佐々木デュオで授業をさせていただきました。来週はいよいよ修了記念旅行なので、旅行先（吉野・熊野地方）にまつわる人物や、旧跡、歴史、宗教などの逸話を披露しようと考え、前山・佐々木デュオの1週間にも足りない、いわば1夜漬けで作り上げた授業です。

前山僧侶には、古代王権から吉野にいたる南北朝時代を経て、熊野の作家「中上健次」の話題の概要を語ってもらい、佐々木は、皇統継承に欠くべからざる「三種の神器」と、その争奪が熾烈であった後南朝を中心として「応仁の乱」に至る歴史を話しました。

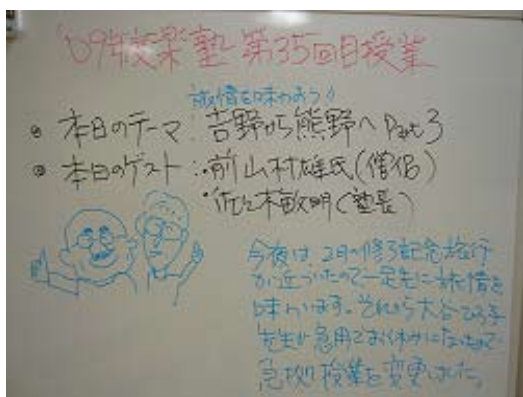
これまで「吉野から熊野へ」をシリーズで授業してきました。08年度と同じテーマの授業を加えると多少多めの授業数になることがわかりました。それは天皇や貴族制度、武士階級の勃興、真言仏教、神社仏閣建築や美術文化などなど、日本歴史の年輪を覗き見する授業でもあったわけです。

新年度、楽塾の修了記念旅行を契機に、我々先達たちが作ってきた日本の歴史を、あらためて授業として検討してみたいと考えました。歴史好きの応援団の方々、一度教壇にお立ちください。

2010年1月25日 塾長

<1月23日（土）の授業>

- テーマ：吉野から熊野へPart 3
- 講師：1. 前山村雄僧侶 / 2. 佐々木敏明（塾長）
- 時間：18:30～22:00
- 場所：三星温泉B1F交流室
- 参加総数：7名（講師を含む）



<前半——吉野から熊野／前山村雄僧侶>

「旅行に先立ち、吉野や熊野への旅をおさらいし、修了旅行をより一層楽しいものになりたいと思い、塾長と一緒に授業を作っていきます」と語り、前山僧侶はレジュメの解説に入りました。

「記紀は、当時の権力の都合のよい作り話なのだが、それは政権を正当化させるための神話として成立させたものである。太古の時代、国づくりはどうであったのか、どんな風に国づくりを進めていったのか。それは出雲神話の国づくりの話などにも出てくる。巫女とは、未婚の女性が一番神に近い存在だということで、王へまつりごとのために占いをしてアドバイスした。采女（うねめ）や贄（にえ）などは朝廷での下働きで

奉仕した女性たちで、太古、女性への扱いは過酷であったと思われる。

「皆さんの天皇へのイメージを聞いてみます」と前山僧侶は塾生に質問します。

●Tさん：御簾（みす）の中で顔が見えないで座っているイメージやね。

●Aさん：昭和天皇が天皇のイメージとして強かった。

「新嘗祭（にいなめさい）とは、11月の中ごろ天皇が新穀を食し新しい魂をもらう祭りごとである。冠位束帯（かんいそくたい＝礼服のこと）で1日中厳しい姿勢で行なうらしい」。*佐々木注：現在、この新嘗祭は11月23日「勤労感謝の日」として国民の祝日に制定されている。

また大嘗祭とは天皇が即位後、初めて行なう新嘗祭のことで、仮の神殿を設け、東（左）をゆき、西（右）をすきと呼び、神に新穀を供える祭事。その際采女を同衾させるといわれている」といいます。

「鎌倉幕府の頃は、外敵（元寇）を退散させるのはよかったが、功績を挙げた武士への恩賞が無かったため、彼らの不平不満がつり幕府衰退の原因となった。その後、天皇の世継ぎ争いが南北朝廷の抗争に発展するが、南朝方の吉野は、山岳仏教や周縁部族たちの協力が大きな兵力となった」。

「三種の神器とは天皇家のものではなく略奪品であった。もともと皇室の貴品ではなく、神話として正当化した宝玉品といえる。南朝は応仁の乱時も祭り上げられ、各氏族の大義名分となった。また戦後、南朝方の天皇の末裔である熊沢天皇という人物が現れ訴訟になったこともあるので、南朝問題は現代社会をにぎわしてきた」。

「中上健次が天皇に対してどう考えていたのか。『紀州』という著書の中の『伊勢』という項目がある。大逆事件で新宮の医者や僧侶たち数人が冤罪で死刑となっている。路地が無くなっていく中、自分のアイデンティティーをどこに求めていくのか。たとえば異国の大使館に行くと菊のご紋があり、帰属意識を持ってしまう。天皇の帰属性に足元をすくわれる思いだということが書かれている。しかし、天皇は貴重な存在だ。連綿と続く系統を持つものとして希少なものと中上健次は語っている」と話してくれました。

私（塾長）も過去天皇制へ疑問を持ち、とくに憲法第1章へは憲法改正もありだと考えていたこともありましたが、しかし、歴史を眺めていくうちに、天皇の存在が権力の二重性を生み出すダイナミズムを持ち、独自の文化を开花させたエンジンであり、何よりもいくつものビッグストーリーを生み出してきた創造体としての天皇という存在を発見し、興味を持たせてくれたのでした。



＜後半——三種の神器と後南朝／佐々木塾長＞

三種の神器

まず佐々木は、添付資料としての奥吉野地方の地図を塾生に見てもらいながら話します。「今回の旅行は、奈良県川上村から上北山村を經由し熊野地方に向かう。和歌山では紀ノ川と呼ばれる一級河川は、奈良県に入ると吉野川と名前を変える。吉野川には巨大な大滝ダムがあり、そのため川上村のほとんどは川底に沈み、山上に国道（169号）が走り、川上村の多くがその国道沿いに移転したという歴史がある。今夜は、紀ノ川・吉野川の水問題調査に関わったこともある佐々木が、今回バスで通過する奥吉野地方（川上・上北山村）が後南朝の拠点であり、天皇の証となる「三種の神器」争奪の現場であったということをもヒントにして中世の話をしてみたいと思った」と、テーマへの動機を語りました。

「三種の神器を話す前に、現代にも三種の神器があった話です。昭和29年（1954）に始まる三種の神器という大衆的現象があったことを知っている人」という質問に、早くもTさんが「TV／洗濯機／冷蔵庫」と手を上げました。「消費文明が流入し欧米生活に憧れた日本人が、生活にとって貴重なもの、かけがえの無いもの、もっとも必要としている物質の象徴として、この時期必要とされた耐久消費財だった」と話し、現在塾生諸君が必要とする三種の神器とは何だろうという問いかけに以下のように、塾生が答えてくれました。

- Tさん：家
- Iさん：タイムマシーン
- T2さん：別荘
- 前山僧侶：自分の教団
- T3さん：車
- Aさん：①パソコン②I p o d③プレステ
- 佐々木：知恵

三種の神器ならぬ「一種の神器」のみの塾生が多かったのですが、そのぶん強い欲求が現れていたようです。ちなみに塾長は答えていなかったのを追加しておきました。このあと本題として「三種の神器」とは、＜やたの鏡、草薙（くさひな）の剣、八咫瓊勾玉（やさかにのまがたま）＞をさし、それぞれ神器の由来や、神器の保有が皇位の正当性を証明するものとして必要以上に重要視され、とくに南北朝時代以降の権力闘争に利用された」ことなども話しました。

南北朝から後南朝への変遷

「南北朝時代は後醍醐天皇と室町幕府創設の足利尊氏との確執から始まる。尊氏追討計画に失敗した後醍醐天皇は神器を携え吉野に逃れる。以降、持明院統（北朝）と大覚寺統（南朝）との対立が激しくなり北朝の優位が続く。幕府内部の分裂騒動で一時南北合一が図られるがすぐに破綻。北朝に天皇を立てた將軍義満の頃、北朝の権力は幕府＝義満の絶大な権力によって吸収される。明德3年（1392）、南朝の後亀山天皇が神器を北朝の後小松天皇の内裏に移し、57年間にわたる南北朝が合一した。しかし義満の謀略により約束の両統交代はついに行われず、後亀山天皇は失意のうちに死ぬ」。

後南朝の終息

「嘉吉の乱（1441年）によって將軍義教が赤松満祐によって殺され赤松氏断絶。北朝にある神器が南朝方に強奪され、奥吉野を中心に攻防が繰り返される。赤松氏再興をもくろむ赤松氏残党は南朝方をあざむき、南朝皇胤の尊秀王、忠義王の両皇子を暗殺し神器を奪う（長祿の変）。この変で赤松氏は再興し、実質的に南北朝の争いは収束していく」。その後、台頭してきた守護大名たちの活躍が応仁の乱に発展し、三種の神

器への権威は急速に薄れ、戦国の時代を迎えるのである」。

とくに川上村に残る南朝菩提の金剛寺（自天皇の墓がある）、今も山深く人の通わない三之公や隠し平の後南朝行宮跡、忠義王行宮跡など、後南朝ゆかりの史跡を巡った経験と後南朝時代への興味から、少しの逸話などを織り込んで話してみました。



< 2010年1月30日（土）の予定 >

- テーマ：よりそいネットからのメッセージ
- 講師：北場好信さん・益子千枝さん（よりそいネットワークスタッフ）
- 時間：18：30～21：30
- 場所：三星温泉B1F交流室
- 費用：1000円（給食費500円を含む）

09年に発足した「よりそいネット」は、刑余者、つまり犯罪により刑罰を受けた人、前科のある人たちが刑務所を出所した後、新たな生活を応援するためにできた組織です。この作業スタッフには、当時、私が野宿者巡回の際、強力なパートナーとして、連日大阪市内を聞き取りのため共に歩き回った益子千枝さんと、現在、益子さんの上司であり、私たちの日常の協力者でもある北場好信さんにゲストとして参加していただきます。刑余者のみならず、社会のアウトサイドを漂わざるを得ない人たちに、「よりそいネット」という小さな灯火を作る仕事が始まりました。その現場から支援・被支援のありようを語ってもらいます。

1、三種の神器

今様三種の神器

昭和 29 年（1954 年）に始まる大衆的現象。私たち日本人は、急速な欧米の消費文明の流入と生活向上を目的に、とくに便利で合理的な耐久消費財の購入に憧れた。景気や経済が豊かになる過程で、欲望の極端な対象となった商品群といえる。時代とともに対象となる三種の神器は変化するが、基本的には生活にとって貴重なもの、大切なもの、かけがえの無いもの、最もほしいものという意味で名づけられたと考えられる。現在塾生諸君の三種の神器とは何だろう。

天皇の地位の象徴としての三種の神器

歴代の天皇が受け継いだ三つの宝玉。やたの鏡、草薙の剣（くさなぎのつるぎ）、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）をいう。皇位継承に問題が生じると、神器の保有が皇位の正当性を証明するものとして必要以上に重要視され南北朝時代にもっとも顕著で、神器争奪の原因ともなった。

1、やたの鏡の由来

スサノオの乱行に困った天照大神（アマテラスオオミカミ）が、天石窟（アメノイワヤ）に入ったとき、八百万（ヤオヨロズ）の神々がアマテラスの御霊として作ったといわれる鉄の巨大な鏡。太陽信仰の象徴とされる。伊勢神宮のご神体として祀られている。

2. 草薙の剣の由来

スサノオノミコトが出雲で八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治したとき、尾の中から出てきた剣で天照大神に奉獻された。その後日本武尊（ヤマトタケル）がこの剣を倭姫（ヤマトヒメ）から賜り、相模の国造（くにのみやっこ）にだまされ野火の難にあった時、この剣で草を薙ぎ倒し命を免れたという。現在剣の本体は熱田神宮のご神体として祀られている。

3、八尺瓊勾玉の由来

聖なる装飾品としてまつりごとや身分格式の証とされる。また剣や鏡と一緒にして副葬品として埋葬された。天石窟から天照大神を導き出すために、鏡や木綿（ゆう）とともに榊（さかき：特に神木として用いられる）にかけられた。唯一勾玉は宮中にある。そのほかの神器はレプリカとして宮中に祀られ、所有者である天皇自身もこれらを実見できないという。

2. 南北朝から後南朝の時代へ

南北朝時代の幕開け

南北朝時代が幕開けをしたのは、室町幕府を開幕した足利尊氏追討計画を実施し失敗した後醍醐天皇が、神器を携えて吉野に逃れた延元元年＝建武 3 年（1336）のこと。以後、持明院統の天皇（北朝）を擁した幕府とのあいだに、皇統の正当性をめぐって大覚寺統（南朝）との対立が繰り返された。軍事力・経済力で上回る北朝方が南朝方を圧倒していたが、貞和 5 年＝正平 4 年（1349）足利尊氏・直義（ただよし）兄弟の対立から幕府内部が分裂。一時尊氏が南朝方に降伏し、正平 6 年＝観応 2 年（1351）に偽りの南北合一が図られ、尊氏が直義を倒すと南北合一は破綻。北朝方は吉野を攻撃。南朝方の後村上天皇は天河の賀名生（あのう）に逃れた。このとき神器も持ち去っている。

北朝再建を画策するが、天皇の権威である神器が南朝方に持ち去られ、そのうえ世継ぎもない。幕府は窮余の一策として、光厳上皇の生母を担ぎ出し女帝にし、その後、彼女の孫（15 歳）を後光厳天皇として即位させた。

3 代将軍足利義満の代には、宮中の政務もつかさどる強大な力を持つ幕府となり、北朝の権力は義満＝幕

府によって取り込まれてしまった。しかし幕府内の有力守護一族の対立が頻発し、義満は、強力な守護たちの討伐に加え幕府権力の確立に腐心するが、反乱軍や、南朝に加担する勢力の大きさを認識せざるを得ない。

明德3年（1392年）、南朝の後亀山天皇は、三種の神器を北朝の後小松天皇の内裏に移し、57年間の長きに渡った南北朝が合一した。しかし、その後義満の謀略が成功し、南北の両統交代約束は果たされず、後亀山天皇は失意のうちに崩御する。

後南朝の戦い

嘉吉（かきつ）元年（1441）、足利4代将軍義教（よしのり）は播磨の守護赤松満祐によって殺害される（嘉吉の乱）。幕府の追討によって討伐され、以後赤松氏の残党は反幕勢力となり南朝方に加担するが、その後南朝のせん滅に力を注ぐことになる。嘉吉3年（1443）、北朝の三種の神器のうち勾玉が南朝兵らによって強奪される（禁闕一きんけつ一の変）。このように南朝復興の攻防と神器奪還を狙う北朝との戦争が奥吉野（川上村・北山村など）を中心に繰り返されて行われる。

嘉吉の乱で幕府に滅ぼされた赤松氏の遺臣たちが結束し、今度は南朝方をあざむき長祿元年（1457年）、後亀山天皇のひ孫筋に当たる南朝皇胤の尊秀王（自天王）と忠義王（河野王）を殺害し、神器を奪ってしまう（長祿の変）。この変で赤松氏は再興し、実質的に南北朝の争いは終結していく。

南北朝時代に台頭してきた守護大名の活躍が、次にくる戦国時代を用意していて、三種の神器への権威が薄れていく。

第36回目の授業が終わりました

<お燈まつり>

古くから「山は火の滝 下り竜」と新宮節に歌われ、日本の奇祭として有名な新宮市神倉神社の「お燈まつり」が今年も2月6日に行われます。たいまつを持ち白装束に身を包んだ男たちが、538の神社石段を一挙に駆け下りるといふ勇壮なお祭りです。たくさんのたいまつが次々に闇の中を駆け下りてくるさまは、まさに滝が燃えるようであり、火の竜が舞い降りるといわれ、語り継がれてきたのです。新宮市では、このお祭りの頃がもっとも寒い時期だそうです。昨年の楽塾熊野旅行では初夏並みの暑い天候でした。

今年の楽塾修了記念旅行では、昨年計画を逸したお燈まつりに焦点を合わせ、再度熊野の旅のためのスケジュールを作ってみました。新宮市職の方たちの協力を得て、今週末、楽塾は吉野・熊野地方を經由し「お燈まつり」の下り竜の雄叫びを堪能してきます。

2010年2月2日 塾長

<1月30日(土)の授業>

- テーマ:「よりそいネット」からのメッセージ
- 講師:北場好信先生・益子千枝先生(よりそいネットおおさかスタッフ)
- 時間:18:30~22:00
- 場所:三星温泉B1F交流室
- 参加総数:14名(講師2名、スタッフ2名を含む)

<新しい協力者たち>

「よりそいネット」とは、刑務所を退所した人たちを単なる<罪人の問題>とするのではなく、社会から逸脱してきた人たちの福祉や人権的課題であるという認識の上で、彼らの再犯を防ぎ、出所後の支援やケアを目的に作られたネットワークです。

「よりそいネット」の北場さんは人権協会に所属し、昨年よりこのネットワークの中心的スタッフとして組織を牽引する心優しい人です。益子さんは、塾長が巡回相談員をしていた頃の後輩同僚であり心強い協力者でした。昨年「よりそいネット」開設時にスタッフとして招聘されたスキルフルな女性です。新しい仕事として、これからも私たちとの協力関係が強まる予感を感じます。そこで今回はお二人に登場を願いました。



<前半——よりそいのメッセージ>

北場先生

まずは北場さんから始まります。「現在人権協会に所属しています。文字通り人権をテーマにやってきました。1964年奈良県曾爾（そに）村に生まれました。新幹線の開通した年です。男ばかりの3人兄弟。父は山林の仕事をしていて、杉皮をととのえる仕事でした。大阪には47の解放会館や隣保館があり、私はそのひとつに勤めました。隣保館事業とは、「特措法」以前の同和地区における住民がかかえる、さまざまな生活上の問題を、身近な相談場所として定着させてきた地域事業です。その取り組み中ですごいと感じたのが『識字学級』の存在でした。〈楽塾〉はまさにこの識字学級に近いものです」。北場さんは楽塾と識字学級を同等価値でほめてくれました。

北場さんの先輩職員のレポート「識字学級から学んだこと」をテキストに、学びを作ってきたはずの指導員が、実は学ぶ側から大きな学びを教えられた、と得がたい体験した話を紹介してくれました。「その後人権協会に移動し、昨年9月に刑余者支援の仕事を始めました」と話し、「毎日犯罪記事に接し、犯罪が多くなっているようだけれど、実際は少なくなっているのに刑務所は満杯です。なぜでしょう」と問いかけると、すばやく前科を持つM君が「障害者や覚せい剤やってるやつがいるからや」と第一声。「犯罪するやつが増えるんや」とM君は続けます。北場さんは「凶悪犯罪も含め年々犯罪は減っているにも関わらず、執行猶予者が少なくなり、身元引受人も無く仮釈放者が少なくなり、累犯者がそのまま刑務所に残ってしまうために、いつまでも刑務所は満杯状態が続いているのです」と説明します。

「満期になっても、受け入れ先の無い釈放者は約7,200人。高齢者・障害者をかかえた自立困難者は1,000人。それらの再犯率は70%と異常に高い」と話し、それらを背景に「『地域生活定着支援センター』の開設が進められているが、進捗状況が遅い」。「また地域の偏見や歪んだ視線も大きく影響している。たとえば刑余者を受け入れる施設自身が、どんな犯罪者が来るのか戦々恐々としている」のが現実のようです。またまたM君「行き場の無い連中がホームレスをしてるんや」と怒ります。



益子先生

「平成12年、社会福祉法人に入り、野宿者の巡回相談室に移動したとき1年半ほど佐々木さんとペアを組みました。平成16年ごろ、救護施設に入所する高齢者を連れ地下鉄で移動中、彼の戦時中の体験を聞かされたが、その時、地下鉄の中で、私自身その時代にタイムスリップしたような不思議な体験をしたことがあります。平成21年8月から北場さんたちのいる人権協会に移動して相談業務が始まりました。現在までに23名の人たちと関わっています」。

「刑務所内では考えられない懲罰があります。「不正洗濯」というのがあります。刑務所の中で時間外に洗濯をすると罪となることを知った」と話します。ここでも刑務所体験のあるM君は「(反対に) ええことをしたら等級が段階的に上がる」といい、刑務所内での評価がよくなるらしいのです。「満期した後、出所時間などが定まらず、夕方などに出てきた場合は動きようが無く、保護監察所などに保護カードを持っていけ

ない。私たちは相談には乗るが、しかし安心サービスが受けられない」。すかさずM君は「わしは身元引受人がいたのでよかった」と発言。益子先生は「それはいいですね。私たちの仕事には、そんな身元引受人はまったくくない人たちがばかりです」と話します。M君は再び「住所が無いとあかん」と言います。「施設や病院に入ってもらい話を聞き、その人たちの生活のサポートをしていくことが課題なんです」と益子さん。

また「制度化して平等な生き方を作っていきたい。野宿者、刑余者の共通は施設利用をし、それを何回も代わっていく人、病院を点々とする人、野宿を繰り返す人などで、居場所を持たない人たちなんだなあと感じてしまう」と益子さんは実感します。



<後半——たくさんのテーマ>

以前から北場さんや益子さんとは、後半をワークショップ風にしようと計画していました。私は前日、6枚の厚紙(32×14cm)を用意し、犯罪および差別に関わる6つのワードを書き込み準備していました。その厚紙に長さ1mの竹棒をつけ持ちやすいプレートにし、それら6テーマを収納するボックスを作成しテーマを隠します、塾生諸君から1人1枚のプレートを引っ張ってもらい、引いた本人がそのテーマへの印象、考え、問題点など、何でもいから喋ってもらおうというゲームでした。6つのテーマとは「セクハラ」「売春行為」「同和(部落)」「障害者」「前科者」「野宿者」でした。さあ、それでは順番に引いてもらいます。



●セクハラ

先頭バッターはI君でした。彼が引っ張ったのは？〈セクハラ〉

I君：男であれ女であれ、例えば触ったとしてセクハラとを感じるのか感じないのかは、その時の人間関係ではないかと思う。むしろ力関係の有無が問題だ。それから人種差別ではなく、年齢のハラスメントが強いのがフランスだと聞いている。

塾長：僕は日常的にエイジハラスメントを受けている。年齢を面白がられてるんやね。

M2氏：僧侶の世界では、年をとればとるほど価値を見出してくれる。

このほかたくさん意見が出されたので一部記述しておきます。

- ・同じ内容でも人が違うとセクハラにならない
- ・男同士でもセクハラがある
- ・男と女がある限りセクハラはあるだろう
- ・行為というより関係性の問題
- ・会社などではセクハラとパワハラがセット（対人関係・上下関係でおきる）。

●野宿者

次の順はT1君です。彼は〈野宿者〉を引きました

T1君：周囲でよう見るな。あまり抵抗感が無い。駅前などは安全だろうし安心かも

北場氏：茨木に住んでいるが、野宿者は珍しい

M君：都会にいてたら石を投げられる

I君：働くための仕事が無いのが問題

北場氏：彼らは好きにやってると思われているが、背景を考えないと

このほかの意見。

- ・野宿は都市の問題
- ・野宿者は〈家が無い〉では無く〈仕事が無い〉というイメージ
- ・一般的には好き勝手にホームレスしている、といったイメージ
- ・缶拾いでも縄張りがある大変な仕事だ



●売春行為

〈売春行為〉のプレートはAさんが引きました。

Aさん：戦前ならともかく、今では若い人たちの援助交際などでそんな行為が変化してきている。出会い系とか友人に誘われたとかで、行為そのものが犯罪とされていない。

北場氏：セックスボランティアみたいなものもあるし。

そのほかの意見をまとめます。

- ・昔からある商売
- ・現代の小遣い稼ぎ。ゲーム感覚
- ・売春のウラには精神的な病が隠れている
- ・売春という選択肢しか無い女性もいる。コミュニケーション、職能不足の理由で…
- ・売春で得た大金に群がる人々。2度被害者？になる
- ・スティグマは見過ごされた支援ニーズの裏がえしではないか。スティグマはマクロにしてしまう。ミクロの個人をわかるようにしたい
- ・売春を認めたら、性犯罪は減少するのか？

●前科者

たくさん意見が出て時間が少なくなってきたぞ。次にいこう！T2君。

T2君：前科者のイメージは、昔映画で渡哲也の「前科者」を見たことがある。指の無い人間が前科者だと思っていた。

藤木氏：刑務所を出所した女性は、性風俗の仕事を職業にせざるを得ない人もいた。

北場氏：前科というもので差別をしてしまう。

M2氏：不可抗力で犯罪を実行してしまう場合もある。

そのほかの意見。

- ・前科者とは出所してからの仕事探しに困る人
- ・前科＝差別の表れ
- ・前科という名前をやめて経験者にする

●同和（部落）

〈同和（部落）〉を引っ張ったのはN君です。

N君：小学校の時、同和地域に引っ越してきた。それがなぜ問題なのかがわからなかった。それをずっと考えていた。自分自身は同和への悪いイメージは無い。もともと同和地区というわれる場所に住んでいてよい町だった。あまり悪い印象は無い。

北場：要は中身を見ればわかるはずなのだが、偏見が左右している。

その他の意見をまとめました。

- ・なぜそれが問題なのか理解しにくい
- ・住む場所が違うというだけでなぜ問題になるのかわからない
- ・誰が同和地区だときめるのか。外の人？町の人？

ここで2月13日の講師予定であり、僕の同窓でもある藤木さんが来られているので、今まで話されてきたテーマも含めて何か一言を。

藤木美奈子さん：元女性刑務所に勤めていて、現在施設などでSSTの活動などで当事者のサポートをしています。佐々木さんにも相談した或る女性（23歳）のことです。精神疾患があり、

デルヘルの仕事をしている。父親からDVを受けていて、人との関わりが出来ない。よく稼ぐのだが、昨年なんかはホストクラブに一晩40万円も貢いでいる。やっとホストクラブを脱却したかと思ったらパチンコをやりだす。しかし自分自身を自覚しにくい人なのです。野宿者といっても、ひとつの枠に収まらない。売春している人についても一緒です。世間から見るこの人たちと、関わっている人たちとの見る目は違うかもしれない。

塾長：小川さんは昔卒論で「遊郭」に関するレポートを書いてはるけど。

小川さん：昭和31年に売春防止法がなくなったが、見えないところで残っている。遊郭では健康管理が割合整っていたようだが、現在その点では野放し状態のようだ。

北場氏：障害者やうまく恋愛できない人たちもいる。欲望を満足に解決できない問題も大切なのでは。

●障害者

最後のプレートが残ってしまいました。誰に引いてもらうのか迷っていると、「塾長やれ！」といわれてしまったので私が<障害者>を引き話しました。

塾長：最近ではなんだかんだ障害の名称が増えています。だいたい僕自身が何らかの障害を持っていると思っているので、障害者とはよくわからない問題だ。只、自分と違うというだけで、他人を何かの範疇に閉じ込めてしまうことは自分にもある問題で、差別とは見た目や他人に対する比較から始まるのだろう。

益子氏：診断すれば障害者となるし、申告しなければそうではないとおもわれる不思議なくくりだ。へんな言い方だが、障害者手帳を取る前と、とった後は何が変わったのか。

N君：交通パスがもらえたりして。

このほかの意見を。

- ・現代的にとらえるには、もう少し広範な意味が必要
- ・障害という名前自体が問題なのでは
- ・先天的・後天的なものがある
- ・手帳の有無が「法的」な障害になっている
- ・紙切れ一枚で対応が違う。



刑余者テーマというより、その問題を通してたくさんの社会問題をあぶりだしてしまったというのが正直な印象です。それほど刑余者問題というものが、犯罪や差別を考えさせる事象を多く含んでいると思いました。そして後半1時間という短い時間内に、たくさんのテーマを話し合うという贅沢と、もとより時間的にも不可能なことをやり遂げた楽しさがありました。今回の授業はいつかもう一度各テーマごとにやってみたいものだと思います。

たくさんおしゃべりしたため全員が空腹状態で、給食は素晴らしいおいしさで終わりました。久しぶりの塾生の参加や、これからの講師予定者らの参加で、話が大きく弾みました。皆さんご苦労様でした。今週は旅行です。身体に留意して旅を楽しみましょう！



< 2010年2月6日(土)～7日(日)の予定 >

- 行き先：吉野経由熊野地方から新宮の「お燈まつり」へ
- 日 程：2月6(土)～7日(日)
- 費 用：19,000円(第1日目の昼食のみ自費・それ以外すべてを含む)
- 宿泊地：雲取温泉「高田グリーンランド」

2月27日の最終土曜日は09年度楽塾の修了式です。今週一足先に、恒例の修了記念旅行を行います。現在21名(男性14名・女性7名)が参加します。バス定員には数名の余裕があります。最終2月3日までにご連絡いただければ参加可能です。ご遠慮なくどうぞ。

第 37 回目の授業が終わりました

< 09 年度修了記念旅行へ >

本当に早いもので、昨年度の修了旅行から丁度 1 年目になります。この旅も昨年同様新宮市を中心とした旅でした。09 年 2 月 14 日、私たちは新宮市史上初めてという、2 月に 24 度という記録的な暑さに遭遇し、真冬に汗を拭きながら半そで姿で旅を楽しんだのです。

今回の旅は、昨年とは異なるコースで大峰山系の国道をバス走行し、猛吹雪を突破するスリリングなドライブを体験してきました。旅のメインは新宮市内神倉神社の「お燈まつり」でした。この計画については、新宮市職の勢古口、荒木両氏のアイデアに負うところが大きく、お二人の尽力が修了旅行を完成させたといっても過言ではありません。また両日のバス車中では、水内先生が行く先々、紀州の人文地理学や町並みの話題などを平たく解説し、名ガイド役を一手に引き受けてくれたのです。2 日間の旅でしたが、いつものながらのボリュームある、ユニークで中身の濃いツアーであったと思います。帰阪路は渋滞に会い 3 時間半遅れてしまいましたが、痛快な旅を満喫できたと実感しています。

2010 年 2 月 10 日 塾長

< 2 月 6 日 (土) ~ 7 日 (日) の旅 >

- 行き先：和歌山県新宮市「お燈まつり」、大辺路巡り（太地・田辺を中心に）
- 参加者：22 名
- 日 時：2 月 6 日 (土) 7:00 西成長橋 3 丁目ピアン前出発。
2 月 7 日 (土) 21:30 帰阪
- 宿泊地：新宮市高田雲取温泉「高田グリーンランド」



第1日目

<川上村「金剛寺」へ>

午前6時45分。第1集合場所であるピアン前には肝心のバスが見えません。7時には第2集合場所で待機予定の参加者と連絡を取り合いしばらくの待機を連絡します。そして運転手が場所を勘違いしていたことがわかり、やっと7時30分頃にバスが到着。その足で第2の集合地点新今宮駅前に急ぎました。ここで全員が合流し、このあと阪神高速文の里入り口前で待つ前山僧侶を拾い、まずは阪神高速から南阪奈道を南進し吉野方面をめざしました。府大の中山先生が参加してくれ、先生とは久しぶりの旅となりました。

スタートの瞬間から水内先生の"講義"が始まりました。羽曳野の聖徳太子ご廟や近つ飛鳥の里の話題、周辺の同和地区の話なども織り込みながら、時折神仏に関わる話題になると前山僧侶が引き取りながらの登場。吉野川を右に見て車は一路川上村に向かって走ります。私は1月の授業で川上村大滝ダムや後南朝のお話をしていたので、川上村通過直前に、少しばかりダムや川上村の歴史を話しました。

吉野川を左下方深くに見る頃、大きな大滝ダムが前方に現れました。激しい反対運動があった大滝ダムですが村は川底に没し、多くの村民は標高300m以上の山上に移住しました。人口は約2000人ほどで高齢者が65%という過疎の村。ダム関連の話題から、水内さんが「自分の博士論文が『近代日本における国土開発の地理学的研究』であった」とカムアウトして皆びっくりしました。ここから約20分ほど走り大平橋を左折、さらに10分ほど林道ともいえる山中に分け入るところに金剛寺があります。このお寺は、南朝の菩提寺であり、自天王という皇子が北朝の赤松氏によって暗殺されたあと、南朝方の兵士がその首を奪い金剛寺に安置したといわれています。実は、私たちの旅の前日である5日に、500年ものあいだ続けられている南朝の「朝拜式」がありました。私個人のこだわりもあり、川上村の象徴としてのお寺でもあることから参拝しました。

第2のハプニングは、細い道を無理やり登ってきたためユーターンが困難で、移動の際バスの車体を傷つけてしまったことです。運転手さんには申し訳ないことでしたが、「遅刻したわしが悪かった。バチが当たったんや」と言われ、余計気になった事件です。



<下北山村「きなりの湯」へ>

金剛寺を後に、奈良県の水源を確保する大迫ダムや入の波（しおのは）を左方に眺め、昼食場所である下北山村へと急ぐ頃、全天が灰一色に変わり、雪が吉野川溪谷から吹き上がってくる光景は見ものでした。やがて国道も雪が降り積もり、全山が白装束に衣替えをしていきます。伯母峰（おぼがみね）のトンネルを抜けると上北山村に入ります。

12時には人口1000人ほどといわれる下北山村に到着しましたが、峠から眺望する村の雪景色はとても美しかったです。昼食場所である「ゆったり温泉きなりの湯」はかなり広い敷地内にあり、ここから見上げる山の雪景色も広々としてスケール感がありました。旅客は私たちのほかは僅かで、予約をしていたお昼ご飯<真菜(まな)定食>をゆっくりと食べることが出来たのです。真菜はこの地方特産の野沢菜に似た野菜で、<真菜定食>はこの野菜をおにぎりに巻いて食べます。熊野の名物<めはり寿司>にそっくり。下北山村では<ジャバラ>というかんきつ類が栽培されていて、物産店ではジャバラのジュースやお菓子類、南朝味噌、真菜のお漬物、栃もちなどが販売されており、塾生たちはお土産の選択に懸命でした。



<新宮「高田グリーンランド」へ>

上北山村に向かう頃には雪も消え去り、山や森林も緑を取り戻していきました。最初の予定では、ここから309号を經由し42号で熊野市に出て、花の窟屋（いわや）を散策する予定だったのですが、水内さんの趣味(?)が高じて急きょ変更。そのまま169号を瀨峡から新宮市の飛び地を抜け、高田に向かいました。この道はわれわれのバス1台がかるうじて行きかう幅員で、対向車が現れるとなかなか通行が難儀を極めるのです。実際、対向車との往来で車を移動中バスのバンパーを大きくこす音がして、またまた車に損傷を与えてしまいました。佐々木に次ぎ水内さんが無理難題コースを指示してしまい、運転手さん大変申し訳ありませんでした。これが今日3回目のハプニングになりました。しかしこの旅行中、いくつかの難所を抜群の走行で切り抜けてくれた運転技術には車内から拍手が起きたほどです。改めて運転手さんに感謝しておきたいと思います。



<新宮市内「お燈まつり」へ>

「高田グリーンランド」には15時前に到着しました。男子3室、女子2室と部屋を割り振りし、それぞれが温泉に入湯し始めました。露天風呂は山並みが望め、空気も爽やか。お湯加減も最高でいい汗をかくことが出来ました。塾生たちの歓声の賑やかさが、旅の開放感そのものをあらわしているようでした。17時前、食事の準備も整い、全員が夕食をとりました。食事はボリューム満点でしかも美味しく、私はすべてを食べることが出来ませんでした。参加者一人ひとりが満足していたと思います。

今夜のプログラムは20時から神倉神社で始まる男の行事「お燈祭り」の見学です。この神事は、白装束に身をやつした上り子たちが各自松明（たいまつ）を持ち、神倉山の中腹にある神倉神社で神火をもらい、そのあと燃える松明を振りかざして、583の階段をいっせいに駆け下りてくるという荒々しいお祭りです。「山は火の滝 下り竜」と新宮節に歌われ、日本の奇祭としても有名な行事となっています。この上り子たちは、この行事が始まる数時間も前、海辺で禊をし、阿須賀神社・熊野速玉神社・妙心寺の三社に参拝することが慣わしになっており、私たちも上り子たちの様子を見ながら、その後用意されたK会館の屋上に上って祭りを遠望しようという予定になっていたのです。

新宮市職の勢古口、荒木両氏が「グリーンランド」まで来てくれました。私たちは勢古口さんと一緒に速玉神社に参拝し、ここに訪れる上り子たちが、神倉神社に行くまでを眺めながらK会館まで歩きました。荒木さんは運転手さんを駐車場に誘導し、私たちの見物の終了後に拾ってくれることになっています。上り子たちは角々の商店でお神酒をもらったり食べ物をもらったりして、すでにへべれけになっている男、道に倒れている男たちも目立ちます。店の人たちから私たちにもふるまい酒が提供され、口の卑しい塾生たちは、コップ酒をゴクゴク飲んで上機嫌でした。上り子たちのグループが出会うと、それぞれの松明をぶつけ合い「頼むで！」と威勢よく声を掛け合っていきます。白装束の子どもたちもお父さんと連れ立って神倉神社に向かって行く姿が多かったです。

しかし、19時には上り子たちは神社境内に入らなければシャットアウトされるので、時間に遅れた男たち（その多くは酒に酔いつぶれた上り子がほとんど）が道にしゃがんだりしています。私たちもK会館に移動し、行事が始まる19時30分まで会議室で暖を取り、ここでメンバーのために自己紹介をしいました。もちろん市職の人たちも入ってくれました。19時30分、屋上にあがり、神倉山を遠望します。まだ明かりはなくて正面の店のネオンサインがまぶしく、少しばかり緊張感が緩んでしまいました。せめてお店も気を配ってくれたらなあ、とちょっと身勝手なことを思いながら。しかし山の方からは時折地鳴りのような雄叫

びが聞こえてきます。そして火が徐々に点火されていき、ごとびき岩の周辺が赤く輝きだしました。

屋上では、この数年間新宮市で顔見知りになったMさんやNさんに久しぶりに会い、再会を喜びました。20時前には上り子たちの先頭集団が、(小さな点にしか見えない火でしたが)山を降りていく様子がわかりました。そして後続集団が火をかざして次々山を降りていくのが見えます。遠望なので、写真などで見るような、燃えて流れ出る火の滝というイメージからは遠いものでしたが、新宮の奇祭を眼前で味わった満足感がありました。このお祭りは見る祭りではなく、体験する祭りであると実感しました。

20時30分に集合し、ミーティング用のお菓子などを買い込んで、再び「高田グリーンランド」に帰館します。温泉にもつかりながら24時までおしゃべりが続きました。



第2日目

<新宮市内「阿須賀神社」へ>

川崎さんは用事のため一足先に帰阪しました。私たちは、予定からはずれていた市内の阿須賀神社参拝を急ぎよ復活させました。もともと大きなバスの乗り入れが困難だということで諦めていたのですが、昨日の乗り入れ困難場所を幾度となくクリアしてきたものですから、だんだん大胆になり運転手さんに難題をふっかけることになりました。

この寺は熊野速玉神社の摂社であり、本社と一体となって渡御祭が行われる場所です。昨夜のお燈祭りの禊が行われる社でもあります。ここの資料館は素朴だけれど、この場所で発掘された銅鏡ややじり、生活具、山林作業や筏流しなどの貴重な写真、甲冑などが展示されていてゆったりと見学が出来ました。拝殿前で記念写真を撮っていると、神社の宮司さんが阿須賀神社の説明をするというので登場しました。「熊野川の水流が陰であり、太平洋の海水が陽である。この陰陽が合流する場所がここ阿須賀神社の地なのだ。さまざまな記紀伝説やわき道の話が神社の来歴を複雑にし、神社の本質をわからなくしているが、阿須賀神社は陰陽の宿る場所として理解してほしい」と、正にわかりやすく、しかも少しばかりアウトローな語りと解釈に、みんなは感激し納得してしまいました。



<太地の町「くじらの博物館」へ>

バスは勝浦町を経由し、10時半には鯨の町太地に到着しました。「太地町立くじらの博物館」に入館しましたが、この資料館には鯨の身体各部位（舌・鼻・目・内臓・生殖器（！）などなど）が堂々展示され、また古式捕鯨に関わる道具類（とくに捕鯨の五連銃が大迫力）や鯨に寄生する生物などの標本類展示が新鮮で、3階すべてが飽く事のない調度ですごく資料館でした。鯨やドルフィンのショーなどより水族館の鯨を目前に見られたことが嬉しかったです。塾生たちもガラスの前で幾度も歓声を上げていました。時間があればもっとゆっくりしたい場所だと思いました。また古式捕鯨船の展示館があり、船体のデザインや色彩の美しさに感嘆してしまいました。時間があればもっと滞在したい場所だと思ったのは私だけではなかったと思います。少しばかり未練を残し、昼食を予定している串本町にバスは急ぎます。



<串本町「橋杭岩」から田辺市「扇が浜公園」へ>

12時30分ごろ、有名な橋杭岩のまん前にある食事どころ「はし杭」に到着しました。予約をしていたので橋杭岩が眼前で眺望できる2階の部屋に案内され、景観を楽しみながらおいしい麺類などを食しました。橋杭岩は弘法太師の伝説もありますが、「太古の火山活動で隆起した岩石の名残」と水内さんは話してくれました。大小たくさんの岩石が林立し壮観ですが、田岡事務局長がその岩のてっぺんに登ってふざけ始めました（その証拠写真を撮っていますのでご参考に←なんの参考じゃ！）。

1時間ほど橋杭岩あたりで遊んだあと、太平洋沿岸を周遊しながら御坊に行くつもりが、又々水内さんの個人的趣向が湧き上がり、急きょ（今回は、なんと“急きょ”の多いこと）田辺市内の「扇が浜公園」に行くことになります。別に有名な公園でもなく、立ち寄るための特徴もない公園だとみんなが思っていたが（実はトイレ休憩だけの目的）、海岸に設置されたストレッチ遊具が大変ユニークだったので！ 腹筋を鍛える、腰をひねる、背を伸ばす、腕を回す、足腰を鍛える等、10種ほどの遊具にはそれぞれ「ネジネジ」「のびのび」「アブアブ」「キック」「ぐるぐる」「フリフリ」などの名前がついていました。塾生たちも利用して大いに楽しんでいましたが、隣で「こぎこぎ」を利用して足腰を鍛えていたおじさんは「よく来るよ。でも町の連中はまだ知られていないのと違うやろか。身体にええからワシはよく来るけどね」と話していました。「カマの三角公園に置いたらええね」とは水内さん。ちなみにこの遊具はツムラ製作所という会社がつくっているらしいです。扇が浜公園を後にし、JR紀伊田辺駅周辺を散策、弁慶ゆかりの闘鶏神社にも参拝。16時を半ば回りそろそろ帰阪体勢となりました。

南部町の阪和道に乗り入れた直後から渋滞が始まります。そして大阪に帰ってきたのは21時を大きく過ぎていました。昨年よりシンプルな旅にするつもりが、結局ボリュームある旅となり、それでも「去年よりもよかった」とはMさん。いくつもの感激があった修了旅行となったのは確かだと思います。塾生諸君、応援団の皆さんご苦労様でした。来年も面白い旅を作りましょう。

最後に水内先生、中山先生、前山僧侶、T2さんなどからご寄付を頂き、楽塾の負担を少なく抑えることが出来助かりました。本当にありがとうございました。



< 2010年2月13日(土)の予定 >

- テーマ：パーソナルな視点からのメッセージ
- 講師：藤木美奈子先生
- 時間：2月13日(土) 18:30～21:00
- 場所：18:30～21:00
- 費用：1000円(うち500円は夕食代)

藤木さんは女性刑務所看守の経験があり、また現在は、社会的困難を持つ女性の支援を目的とする会社の代表として活躍しています。多くの著書を持つ作家であり、塾長とは同期とともに野宿者問題を研究したこともありました。ごく最近博士号をとった藤木さんですが、大きな組織を背景に活動するというわけではなく、むしろ個人的な視点でフィールドを築きつつある、というのは私の作業に近いかもしれません。支援・被支援という問題を、そんなパーソナルな観点から活動する藤木さんから聞きたいと考え、ゲストをお願いいたしました。

第38回目の授業が終わりました

<品格>

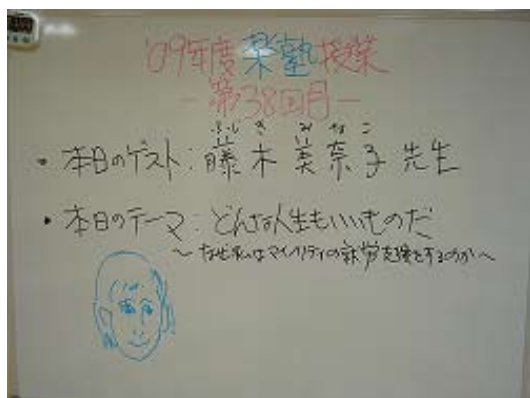
横綱朝青龍が引退をしました。関取として品位に欠けるとか、行儀の悪さを指摘されていました。それでも横綱の行状を先送りしてきたのは、相撲協会という組織の保身であり、稼ぎ頭をなくせば身が危ういという協会役員たちの欲得がらみだったからでしょう。遊里の元締めが人気花魁（おいらん）を追放できるわけがないのです。朝青龍のほかにも、スポーツ選手の品位とか品格とかが問われています。ボクシングの亀田、格闘技の石井、近くはスノボの国母選手などなどの評判例ですよ。

能で有名な世阿弥の花伝書、つまり「風姿花伝」の一節～風姿花傳第三 問答條々 下～に「能に位(くらい)の差別(しゃべつ)を知る事、如何。」という問いに答えて「位自(おのれ)と上る風体(ふうてい)あり。ただし、稽古なからんは、自れと位ありとも、徒(いたず)ら事なり。先づ、稽古の劫入りて、位のあらんは、常のことなり。また生得の位とは、長(たけ)なり」とあります。私なりに解釈しますと「その人の芸位の段階を判断する基準とは」という問いに対し、「どんな能者にも自然に芸位を持つ者はいるが、稽古をしないものには芸位が高くとも役に立たないものだ。稽古でしのぎを削ることが当然大切なことで、生まれついで位の位というものは品格である」と言います、品格とはその人の階層や異文化性が問題ではなく、もともと人として備わった品性を言うのだと思います。しかし、スポーツ選手や芸人というのはいわば埒外世界を生きるわけですから、社会の基準でモラルを垂れる必要があるのか否かは疑問だと思うのです。

2010年2月15日 塾長

<2月13日(土)の授業>

- テーマ：どんな人生もいいものだ
～なぜ私はマイノリティーの就労支援をするのか～
- 講師：藤木美奈子先生
- 時間：2月13日(土) 18:30～21:30
- 場所：三星温泉地階交流室
- 参加者：17名(講師・スタッフ各1名を含む)



<前半 --- 藤木美奈子という私>

藤木さんは、「前半は私自身の話をさせてください」と断った上で、自著「傷つけあう家族」を紹介しながら、自らの出自を語り始めました。貧しい中で母が子どもたちを養っていたこと、新しい父親の暴力、子どもながらに生活というのは大変なものだと実感していたことなどを話します。

「高校を卒業し和歌山に在住した頃、女性刑務所の刑務官になりました。受刑者の多くは在日朝鮮人や同和地区の人たちで、社会的弱者といわれている人ばかりでした」と語り、その頃自分自身の問題も勃発していたことを話しました。「結婚し、パートナーから暴力を受けていて心身ともに疲弊していたが、あるとき刑務所で倒れ刑務官をやめてしまった」そうです。「30代の後半、対人関係が駄目で、人間としての自信が持てなくなったとき、或る職業訓練校に入学し、ここでいろいろと学ばせてもらいながら、自己流の自己改革をやり始めました」。そしてこの時期結婚をし、子どももうけたが夫婦そろって精神的な病を持ち仕事もなかったのです。そこで、「自分のようになかなか仕事につくことが出来ない女たちが多いはずだと想像し、女性に呼びかけ会社を設立しようと考えた。この時呼びかけに集まった人は300人にもなった」と言います。これが、現在藤木さんの主宰するNPO「WANA関西」の始まりなのです。

「個人で働く女性の権利と地位を獲得するために戦ってきました。社会の仕組みも見え始めてきた39歳の時、大阪府知事選に立候補しました。対立候補は横山ノックで、それまで知事選などは女性の立候補者がなく、300万円ほどのカンパを集めて選挙活動したのです。『女性を議会に送る会』という組織があったが、協力どころか『負ける選挙に誰が応援できるのか』といい、選挙期間中ひどい誹謗中傷を受けつづけ、自分たちだけで無我夢中の選挙を戦った」と興味深い同性の選挙妨害を話してくれました。

マスコミは、はじめから知事選候補者は男のものだと認識しており、インタビューも粗雑なものであったらしいのです。「それにしても横山候補の組織力、動員力はすごいと思いました」と話します。開票速報の折、自分の名前が3位で発表されて驚いたといいます。「8万票という多くの支持票を得て、その後自分を社会化していくのです。ノック知事が失脚したあと女性の大田知事が選ばれました」。



「43歳のとき大学院に入学しました。自ら虐待や精神的外傷を受けた経験から、自分のこれまでの体験を客観的に研究してみようと考えたのです。認知行動療法という観点から、SST (social skill training) という療法が、心の傷や虐待を受けた人たちには効果があるということで、施設でインターンシップを実習し、その後施設でSSTの実践を始め博士号も取りました」。

「自分を責める人、無力感を持つ人、価値のない人間と考える人たち。でもそんな人たちと共に話をする中で、(悪い状況は)自分だけではないと感じていく人たちが現れ始めます。自分を認識しにくい人が話を聞くことで自分を認めていく。それがこのSSTの役割なのです」

現在、藤木さんにはいろいろな施設からS S Tへの要請が来ているようで、「自分の強みは辛いことから脱出してきた経験があること」だと言います。現在は「マイノリティーの就労支援を中心に動いている。弱くてしんどい人、お金を持たない人たちに寄り添っていきたい」と話し前半を終わりました。

<後半——藤木さんの実践を質疑応答で>

後半は藤木さんへの質問や、相互交流をするということになりました。まず最初に手を挙げたのはM君でした。

M：男の刑務所に入っとった。番号で呼ばれていた。

藤木：男と女の刑務所ではまったく違う。男の刑務所の方が圧倒的に規律も厳しい。女性刑務所では番号ではなく名前と呼ばれる。

T：男が好きな女にDVするという話だがなぜそうなるのか。何かの拍子で好きになっているのに、それやったら結婚せんといたらいいのに。女は自分に落度があると考えてしまうのと違うんか。または飽きられたと考えるんやろか。

藤木：共依存という。男は自分に自信が持てず、誉められたこともない。自分を認めてほしい、自分のすべてを受け入れてほしいと思うわけです。女性を支配したいと思うんですね。女性は「私がいなくてこの男は駄目になる」という誤った心配がある。これを解消するには女性が「やってられん」と決意しなければならない。女性の側にも（男にそんな行動を起こさせる原因を持つための）責任があるので。原因を持たない女性なら、1回の暴力で関係は解消してしまうわけだから。

A：ギャンブルやアルコール依存症のように対処する場所はあるんですか。

藤木：非暴力ネットワークという団体が全国的にはあるが少ない。女は男の行動に文句は言うが、男の側にお金がある時は別れることをしない。お金という物の力がいかに強いかということです。

A：（そんな施設に入って）効果はあるのですか。

藤木：専門家も結果はわからないと言います。米国などではそれらのプロジェクトがあるのですが、いずれにしても施設から出所したあとの追跡調査が出来ておらず、わからないようです。

K 1：自分の心が病んでいるということがわかったのは病院であった。藤木さんは自分でわかったというが、どんな感じだったのですか。

藤木：職場などで自分の異常を感じていた。人への不信感や嫌悪感がありすごく攻撃的にもなって、自分でもおかしいと感じていた。

K 2：ご自分で感じるのがすごいと思う。

藤木：だから、自分の経験を人に伝えていきたいと考えたのです。自分の感情を抑圧する癖がずっとあったので判断がつかない。そんな時、人との関わりがあって自ら学んでいき悪い習慣を改めていくようにした。私が通った職業訓練所では、礼儀作法など一から教えてくれて気づかされたことがたくさんあった。個人的要因ではなく、学んでこなかっただけ。問題解決のスキルがあるはず。

H：S S Tの時、どんなテーマで進められるのか。

藤木：男性の場合、就労をテーマに焦点を当てる。心理を学ぶ場だというと誰も来ない。当面自分が直面している問題をテーマにしておく必要がある。（藤木さんは、手順として<コミュニケーション、金銭管理、ギャンブル・酒・債務・面接、職場の悩み、辞めなくなったら、家族・友人・仲間とのつきあい方、新聞記事の議論など>をロールプレイしながら、自らの病癖や悩める理由を克服し、見直していく作業をすると言います）。教えられるのではなく、強制されるのではなくて、互いに話し合っていくのがS S Tの強みです。

K 1：デートDVに対してはどんな対応をしたらいいのか

藤木：事実関係をまず見つけていくこと。正しい情報を伝えていくことから始まります。

塾生の中には藤木さんの言葉に適時うなづく人もいて、かなり熱い交流会となりました。S S Tに参加したいとか、藤木さんの持参した著作がすべて売切れるとかで反応が直截的で驚きました。

<バレンタインデー>

14日がバレンタインデーということで、りぷらの森田さん、塾生のAさん、O2さんから男性塾生たちに素敵なチョコがプレゼントされました。給食後、デザートとしておいしく頂きました。たくさん頂いたのでお腹は満足、頭も満杯の一夜となりました。ごちそうさまでした。



<2月20日(土)の授業予定>

- テーマ：ボランティアの意味って何
- 講師：小川裕子氏(福祉施設職員) 上地徹氏(会社員) 青山美香氏(団体職員)
- 時間：2月20日(土) 18:30～21:00
- 場所：三星温泉地階交流室
- 参加費：1000円(給食費含む)

十数年間にわたり、萩之茶屋にある旅路の里を拠点とする「木曜夜まわりの会」で、野宿者へのボランティア活動をしている小川裕子氏と、上地徹氏、青山美香氏をゲストとしてお迎えします。5～6年前、小川さんが夜まわり途上で就労相談を受けた当事者を、私がビルメン企業に紹介し、一定期間サポートしたことがありました。この時「夜まわりの会」との接点が生まれました。小さなボランティア団体が、自前の地道な活動で人とのかかわりを大切にしている様子は、応援活動の原点だと思います。夜まわりの歴史を通して人間の悲哀や喜びを、また支援・被支援のありようを語ってもらえたらいいなあと考えています。

第 39 回目の授業が終わりました

<クジラロジック>

過日、楽塾修了記念旅行の折り、太地町の「くじらの博物館」を見学しました。何よりもびっくりしたのは鯨の身体部位を見せる大規模な展示室でした。クジラの眼や口腔、鼻、胃、生殖器までもを標本パノラマで一覧できました。また、太地町の中世に始まる古式捕鯨法や古式捕鯨道具、彩色豊かな捕鯨艇などには驚愕し絶句しました。私たちの先達たちが作ってきた伝統的文化の凄さが少しばかり実感できたのでした。

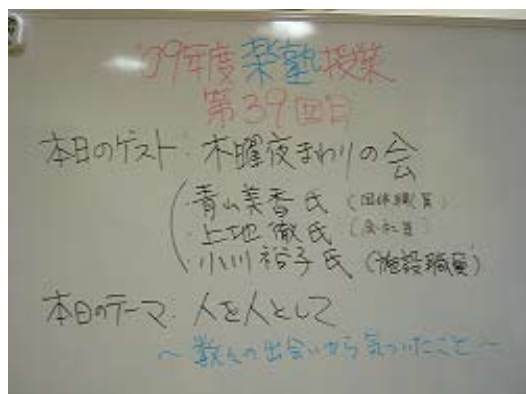
旅行直前、欧米の反捕鯨組織シーシェパードが、日本の南極調査捕鯨船に体当たりしたニュースを独占していました。グリーンピースの系列組織で環境保護団体という名のテロ集団らしいのですが、オーストラリア政府は表向き暴力行為を批判はするが、日本への捕鯨には強硬に反対しています。いわばテロには反対だが、裏では煽り行為が見えて二律背反のように思いました。

捕鯨はその国の食文化に深く根ざし、加えて自然環境や生態系などにも大きくかかわる問題ではあるのですが、「自分は菜食主義者だから、人は動物を食するのをやめよ」というような独断な優性観にもとづく差別性を突きつけられた感じでした。それはとりもなおさず、西欧思想という原理をこれまで私たちが疑いなく受け入れてきた結果の戸惑いでもあります。WASP・白豪主義者らが、有色人種の排斥を訴え続けるようにアパルトヘイトの再来はもうごめんです。

2010年2月22日 塾長

<2月20日(土)の授業>

- テーマ：人を人として ～数々の出会いから気づいたこと～
- 講師：木曜夜まわりの会スタッフ小川裕子氏・青山美香氏（団体職員）
・上地 徹氏（会社員）
- 時間：2月20日(土) 18:30～21:30
- 場所：三星温泉地階交流室
- 参加者：9名（講師3名・スタッフ各2名を含む）



<前半—— 3人3様>

小川さん

結成して20年近く、野宿生活者の生活相談や支援活動を続けてきた「木曜夜まわりの会」のメンバーが登壇してくれました。まずは司役としての小川さんは、某企業がHPで紹介した「夜まわりの会」の解説記事をみんなに見てもらいます。

http://www.pfizer.co.jp/pfizer/company/philanthropy/2001/aera_05.html

http://www.jca.apc.org/~hirooka/mitikusa13/miti13_4.html

元々、越冬時期に安否確認のための夜まわりを続けていた中で、冬の時期だけではなく恒常的に夜まわりをやるという人が「木曜夜まわりの会」を結成したといいます。「従来のようにモノを与えるだけの安否確認作業でなく、声をかけあって話をしていくという作業を、週1回始めていくことになりました。身体の悪い人には医療券を渡し、病院に行ってもらう事にします。ただ救急搬送されたあとの人、施設に短泊で利用して退所してもその後の人の行方が気になりました。だから病院やケアセンターに入院、宿泊した人たちには面会することを始めました。またアパートに入居した人も一人暮らしで孤独。そこでアパートにも行くようにします。これまで関わった50人の人たちのうち41人が亡くなり、お葬式などにも関わってきました。現在10名ぐらいの人たちとおつきあいがあります」と、夜まわり初期の頃から関わっている小川さんは話します。まず小川さんの進行でメンバー紹介が始まりました。

青山さん

「私は95年に夜まわりを始めました。初め<夜まわり>とか<野宿>っていったい何?とっていました。とくに世間や親からは、一あんな場所に行ったらあかん—と言われていたのが、そんな場所に足を運んでいる自分がいて、しかしやっているうちに興味が出てきました。世間などが言う彼らへの偏見である“自業自得”という観念などではない、もっと違う理由があるのではと思い始めたのです」。青山さんはゆっくりかみ締めるように語ってくれました。

上地さん

「2002年にあるキリスト者から木曜夜まわりの会の紹介を受ける。ボランティア精神が過剰に強い人や団体は苦手な私が「木曜夜まわりの会」とは馬が合いました。それは木曜夜まわりの会が自分たちにできる小さなことを野宿者に向けて行う姿に感心したからです。声をかけたり話をきいたり、シンプルな行いやけどなんかすごいと。そして夜まわりに参加し、金曜ケアにも加わりました」。コミュニケーションを苦手とする私も、スタッフや野宿者との交流とや居宅保護者の訪問をして色々と感じ、人との交流の大切さなど学ぶことができました」と自己紹介をしてくれました。



青山さんの事例から

96年に夜まわり中にある方と出会い、関わる中で、初めて知った社会的入院（病院で長期入院を続ける）という言葉に衝撃を受け、誰かがいれば退院できるはずなので、後見人的に引き受け居宅としてケアしていききました。ところが私たちの出会う中には、私たちの思いとは反して酒で乱れる日々、病気や障害を簡単には受け入れられない。周りの人にあたったりする人もいる」ここで塾生から「そんなん何ぼやってもあかん」という声。「ところが、たとえ寝たきり状態になっても、自分の居宅での生活を続けたい、という気持ちに、こちらが何とか応えようとしていると、だんだんと変わっていき、落ち着いていかれる方もいました」。青山さんは、地道な関わりが人を変化させていくきっかけになったのではないかと問いかけているようでした。「働いていたNPOで介護事業を立ち上げ、介護保険で必要な資格を取得し、仕事も実践していくようになり、さまざまな方たちのケアを引き受けることも可能になったのです」。青山さんの資格取得も大きかったようです。

上地さんの事例

「生保を受給させてアパートにはいった人を毎週金曜日にケアしています（小川さん注：この支援は、夜まわりの有償ボランティア事業として実践している）。元やくざで最初は怖かったです。刺青も入っているし。しかし僕には穏やかだった。ただ住人や病院からは出入り禁止となっている人でした。現在は認知症状態になりつつあり、気に入らなかつたら声を荒げることもあります。人をケアすること、人の役に立つことは大切だが、時を経て変わっていくそれぞれのニーズを確認していくことが大事なことだと思うようになりました」。人それぞれのニーズについては私も同感です。

小川さん

「夜まわりの会誌『よなよな』を年4回発行しています。病院で暮らす人や一人暮らしをする人たちに配布しています。社会的には、まだまだ路上で生きる人を人としてみていないのではないかと、またその人を親身に対応する人もいないことこそが問題だと思います」と話し、困窮をきたした人々への視線が、なお厳しい状況であると話していました。「なお『夜まわりの会』では、交流会や食事会、季節のお花見会などを定期的実施しています」と付け加えていました。



<後半——ボランティアと仕事のあいだに>

後半冒頭から事務局長が質問します。

1. 夜まわりにかかる時間に加え、ケアなどに時間をかける分、夜まわりのエネルギーに負担がかかることはないか？

2. ボランティアと同様な仕事をしている小川さんや青山さんは、どんな心構えで支援をしているのか？

上地さん：①金曜のケアは僕一人なので、エネルギーが分散することはない。

小川さん：①仕事のかかわりで木曜夜まわりには常時参加することが出来にくくなっている人もいます。その分病院面会などをするが、ベースは夜まわり。

小川さん：②福祉職員をやる以前は、まったく違う仕事をしていました。ボランティアをしても、(当事者から)話を聞くだけで、自分ながら頼りなかった。しかし施設に就労の機会があり、チャンスとしてスキルを磨くようになっていった。そうすると今度は、その人がより一層よくなるような状態にしていきたいと、自分の思惑で進めようとしがちになった。そうではなく、その人がどうしたいのか、一人の人間として話をじっくり聞くという原点を、時折だが夜まわりに出ることで見直している。

青山さん：②その人にとっては、わたしがボランティアであっても職員であっても関係がない。しかし、制度の中ではさまざまな制限があり出来ないことも出てくる。時折ボランティアを始めた頃を懐かしむこともあり、原点を探すこともある。

事務局長：夜回りのエネルギーが減少したのではなく、かかわり方が多様になったということですね。

M君：だいたいあの連中(路上生活者)は、食べるもんも食べず、寝不足になっとる。

Aさん：夜まわり時は何人ぐらいで回るのですか？

青山さん：平均6～7名です。

塾長：事務局長と同じ質問。両方同じような仕事をしていてストレスはないか。

青山さん：初めはルンルン気分だったが、ボランティアでも仕事でも関わるようになった頃、途中でやめようというストレスが起き、夜回りに参加できない時期もあった。しかし、いまではバランスをとりながらどうにかこうにかやっています。

塾長：活動のモチベーションとなるものはなんですか？

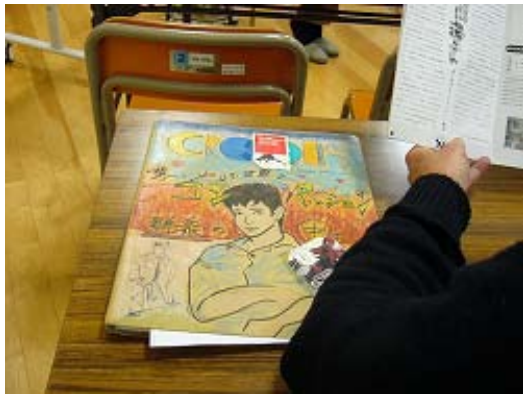
上地さん：役立ちたいと思うこと。がちがちに頑張る人は大体続かない。

小川さん：(当事者たちの多くは)私より人生の先輩たちなので、それらが私のエネルギーになることがある。人から力を得ている部分はあると思う。



<志としてのボランティア>

仕事をしながら、志としてのボランティアを続けるということは力のいることだと思います。私は「夜まわりの会」にボランティアの原点を見る思いがします。支援者というような威張りや殉教さでなく、でもこれでいいのだろうか、というような自覚で作業をしている印象を受けました。支援をしてあげるといふ気負いのないのが素晴らしいと思いました。だから給食も大いに盛り上がり大変おいしく頂きましたよ。



<2月27日(土)の授業予定>

- テーマ：09年度楽塾修了式。修了書授与
- 時間：2月27日(土) 18:30～21:00
- 場所：三星温泉地階交流室
- 参加費：1000円(給食費含む)

09年度楽塾第40回目の授業は修了式で終わります。週1度の授業とはいえ、授業計画や当日準備の作業に忙殺され、熟考や反省の足りなさは多々ありますが、塾生諸君があきらめず楽塾に通ってきてくれることと、楽塾講師や応援団の限りなきボランティア・スピリッツのおかげで細々延命し続けています。修了式では、小さな祝宴を開きたいと思っています。これまで楽塾に関った方たちにも参加して頂きたいと考えています。どうぞ修了式を祝ってあげてください。10年度の開講は、3月の春休みを経て4月3日(土)から始まります。

第 40 回目の授業が終わりました (09 年度修了)

<時代は変わる>

ネットや携帯の普及は、新聞というメディアの存亡に関わる問題を抱えていると思います。情報の即効性や経済流通の促進は紙メディアの比ではなく、また総花的情報としての新聞紙と比べ、深度のある個別情報の選択肢（といっても標準化・規格化・基準化された情報の洪水を、選択肢の多さと誤解している場合もありますが）の広がり、これからも個人的嗜好や取捨選択をより拡大させ続けていくでしょう。あらためて自分が、新聞紙のどんなページを見ているのかを確かめてみると、経済、株式やスポーツ、家庭面（最近は気味の悪い犬猫ペット欄までがある）などはほとんど読んでいないことがわかりました（ワッ、もったいない!）。長年連れ添ってきた新聞ともそろそろ決別しようかなと考えているこのごろです。

と言いながら、先日読んだ新聞の社会面には、個人の志向や分野にあわせた紙新聞がヨーロッパで発行されたり、自分仕立ての記事がサイト上で読める電子新聞が、アメリカやロシアで発行される、との記事を見ました。また別の日には、日本経済新聞が自分好みの記事を読める有料サイトを発行するという記事もありました。新聞の生き残り策とはいえ興味深いです。航空や自動車業界もそうですが、新聞社さえ雪崩を起こしていく時代で、まさにディランの THE TIMES THEY ARE A CHANGIN' がリアルです。もうすぐディランが来日です。

2010年3月1日 塾長

Barks でのボブディラン公園の紹介記事

<http://www.barks.jp/news/?id=1000056736>

<2月27日(土)の授業>

- テーマ：09年度楽塾修了式
- 時間：2月27日(土) 18:30～21:30
- 場所：三星温泉地階交流室
- 参加者：13名(スタッフ2名を含む)



<前半——09年度楽塾修了式>

本日の修了式をもち、09年度楽塾の授業がすべて終わりました。塾長から出席塾生へ修了証書が渡されました。修了証書の内容は以下の通りです。

「修了証書 ○○○○様 あなたは、学びと遊びによく努め、楽塾を修了されました。これを証します。2010年2月27日 楽塾印」。このあと、来年度4月からの開校のこと。楽塾に興味ある人たちを連れてきてほしいこと。近畿大学文芸学部の清先生から、楽塾を活用しインターンシップを実施したい旨などの件を塾生に報告しました。そして09年度最後の晩餐である給食を頂くことになりました。



<後半——食事に>

今夜は特別にアルコールを少々おみやげとしてサービスしました。また酒の当てなどが持ち込まれたりしたので、まずは乾杯ということで給食が始まりました。というのも塾長の勘違いで、お米をいつも通り洗っていたのはいいのですが、従来の時間割としてタイマー予約をしていたものですから、お米がまだ炊飯されていなかったのです。つまり前半の授業（修了式）が、予定よりも早く終わったためで、塾長はそれを予測していなかったわけですね。というわけで炊飯器をリセットしなおし、米の炊けるまでビールやお菓子で間に合わそうということになったのです。しかし、くらし食堂さんの盛り付け料理は豪勢でうまかったです。給食の雑談中、09年度に行われた授業40回のうち、とくに塾生にとって印象深かった授業を話してもらいました。



- T1**：「どんな人生もいいものだ」のすべてがよかった。女性刑務所の話が珍しかった。
- M**：「貧乏と希望のあいだに」が面白かった。昔の貧乏といまの貧乏の違いが面白い。それから、以前にやった「男と女の間には」のようなものをやりたい。
- T2**：「ホテルマンになってわかったこと」で、本来人間の大切な礼儀の大切さを教えてもらった。「ドーナツの秘密」の仕事への取り組みが興味深い。あと「わが青春の歳三」の栗塚旭さんがよかった。
- A**：「空手・メタボ追放」に参加したあと、体調不良を起こしたので病院にいくと、良性だがポリープが見つかった。参加していなかったら、まだ発見されずにいたかも。空手練習は興味があり参加してよかった。
- I**：「映像の記憶」で上映されたイラン映画がよかった（イラン映画は08年度での楽塾上映）。イランの映画は哲学的なので面白い。
- Y**：「ALL OF DADDIES」で、自分が知らなかった感情に出会った。いろいろな人からの体験経験が聞けたこと。とくに手紙で書いたことが面白かった。自分の表現が出来た。
- M1**：「吉野から熊野へ」は前の旅行より面白かった。前より座り心地の良いバスに乗り続け、徒歩が少なかったのがよい。
- M2**：「私のたくさんの“父たち”、“母たち”」の逆境を生きる力の素晴らしさ。爺婆たちへのアプローチの楽しさ。「わが青春の歳三」の栗塚さんのかっこよさ。
- S**：「最果ての人々2」の旅情が素晴らしかった。とにかくそこへ行って見たいという気になった。「かっこいいスタイル2」はみんなの深層心理が見え隠れしていて興味深かった。「田植えに行こう」は、自分たちが食べる給食の米が、自分たちで作ったという感動につながっている。
- T3**：「貧乏と希望のあいだに」はさすが。講師としてのスキルが凄いと思った。塾生たちが講師になった「僕の話聞いてくれ」は、それぞれの表現をしてくれて素敵だった。「人生は紙芝居」ではゆるやかなつながりを生む場の力を見せられた。近畿大学生の「私のポートレート」はよく構成されていておもしろかった。

塾生と思い出を語っているなか、仕事を終えた塾生のH君が顔を出してくれました。

いきなりの質問で、みんな考える時間もなく、その場での答えとなってしまったので、まだまだ残された名作があると思います。私たちはそんな名作の発掘もかねて、来年度の授業を計画していきたいと思っています。



<徳島からのメッセージ>

最後に、徳島県で「新しい自立化支援塾／まねきNECOの会」の代表をしておられる森本初代さんからメッセージを頂いています。森本さんは、昨年新宮市旅行にご一緒しました。森本様ありがとうございました。

佐々木様

楽塾メンバー各位

いつも楽しそうな情報をありがとうございます。

既に修了式も終わられたようですが・・・

一度も参加できなかったのがとても残念に思っています。

ほんとうに・・・お疲れ様でした。

4月以降は、楽塾を手本にして私の妄想が構想として実行可能なものになるように支援塾で福祉基金の助成金申請で就活支援企画をしてみました。

特に、「農林業の体験実習」「造園業の体験学習」「家庭料理応用講座」等を考えていますが、「ふれあいの里さかもと」では一泊2食付@ 6,300円で宿泊できますので、新たな交流事業ができればいいですね。(^ . ^)

また、お会いできることを楽しみにしています。

新しい自立化支援塾／まねきNECOの会 代表 森本 初代

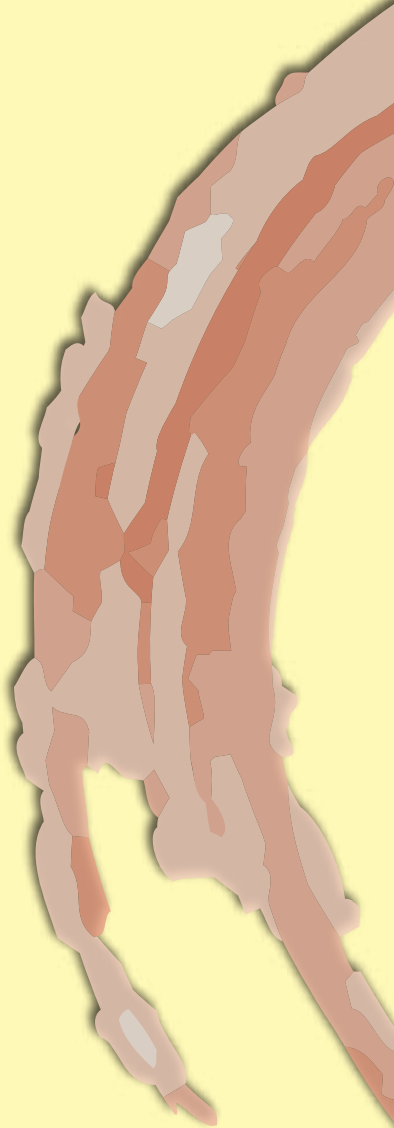
< 2010年度楽塾開始について >

- 次回授業の予定：3月中の休みを経て4月3日（土）から開校します。
- テーマ：現在、授業プログラムを計画中です。決定次第ブログに掲載いたします。
またパソコン非利用者には郵送、あるいは手渡しにてご連絡いたします。
- 時 間：4月3日（土）18：30～21：00
- 場 所：三星温泉地階交流室
- 参加費：1000円（給食費含む）

この出版については、大阪市立大学、平成21年度新産業創生研究
「脱貧困をめざした居住支援のソーシャルビジネス化に向けた研究」
(研究代表:都市研究プラザ教員、水内俊雄)助成金を使用した

楽園

あそびを学び
まなびを遊ぶ
新しい学校の冒険



URRP

Urban Research Plaza, Osaka City University,
3-3-138 Sugimoto, Sumiyoshi, Osaka, 558-8585
Japan, office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

大阪市立大学 都市研究プラザ
558-8585大阪市住吉区杉本3-3-138
office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp